鞠智城（きくちじょう）シンポジウム
2022成果報告書

# 渡来系技術から見た古代山城・鞠智城

熊本県教育委員会

鞠智城シンポジウム　２０２２

# 渡来系技術から見た古代山城・鞠智城

シンポジウム概要

鞠智城シンポジウム　２０２２

# 渡来系技術から見た古代山城・鞠智城

一　開催日時等

日時：令和四年（二〇二二年）十月二十三日（日）十二時五十分～十七時

場所：くまもと県民交流館パレア十階パレアホール

（熊本市中央区手取本町八番九号テトリアくまもとビル十階）

主催：熊本県・熊本県教育委員会

共催：明治大学日本古代学研究所

後援：山鹿市教育委員会・菊池市教育委員会・熊本県文化財保護協会・菊池川流域古代文化研究会・肥後古代の森協議会

二　講演等プログラム

・報告①「鞠智城の渡来系技術」
　長谷部善一（歴史公園鞠智城・温故創生館館長）

・報告②「渡来系の土木技術とため池・山城」
　小山田宏一（大阪府立狭山池博物館館長）

・報告③「古代建築と渡来系技術」
　海野　聡（東京大学大学院工学系研究科准教授）

・報告④「渡来系技術の導入と古代山城」
　吉村　武彦（明治大学名誉教授）

・パネルディスカッション
　コーディネーター　佐藤　信（くまもと文学・歴史館館長、東京大学名誉教授）
　コメンテーター　亀田　修一（岡山理科大学特任教授）
　パネリスト　小山田宏一
　海野　聡
　吉村　武彦
　長谷部善一

# 目次

主催者あいさつ　1

熊本県副知事　木村　敬　2

明治大学日本古代学研究所所長　石川　日出志　4

報告①　「鞠智城の渡来系技術」　長谷部　善一　7

はじめに　8

一　鞠智城に遺る渡来系技術　9

（一）選地　9

（二）城門　13

（三）土塁線　16

（四）貯水池跡　21

（五）建造物等　21

（六）出土遺物　25

二　発掘調査から見えてきた鞠智城に遺る渡来系技術　27

報告②「渡来系の土木技術とため池・山城」小山田　宏一　35
はじめに　36
鞠智城の貯水池　37
排水工と減勢工　38
浅い水域　39
貯木場　40
泉井　湧水の水汲み場　41
鞠智城貯水池の再検討　43
補強土工法　44
拡散する補強土工法　46
東アジアの補強土工法　47
六・七世紀の新羅・百済の補強土工法　49
倭国古代山城水門付近の治水工　51
おわりに　53
報告③「古代建築と渡来系技術」海野　聡　57
はじめに　58

一　建築の設計・技術と技術者・統率者　60
建築の設計と技術　60
技術伝播　61
渡来系技術者と統率者　63
二　全体計画にみる大陸からの影響　63
飛鳥時代の伽藍配置　63
飛鳥時代の寺院と東アジア　65
藤原京と周礼考工記　67
三　七世紀の多様な技術と技術伝播のルート　68
古式な法隆寺の特徴　68
金堂の建築的特徴　69
金堂の意匠　70
山田寺の発掘調査と金堂の特殊な柱配置　71
山田寺の出土部材と七世紀の建築技術　73
山田寺の出部材に見える特殊な方法　75
山田寺の技術と東アジア　77
古代建築研究の可能性　77

四天王寺の扇垂木と薬師寺東塔の両層繁額　78
校倉の特殊な技術　81
四　古代山城の渡来系技術の課題　84
古代山城と遺構　84
鞠智城の八角形遺構　85
おわりに　85
報告④　「渡来系技術の導入と古代山城」吉村　武彦　89
はじめに　90
渡来系移住民の役割　90
東アジア世界論　91
五世紀における開発　92
「才伎」の渡来　93
筑前の「韓鉄」木簡　94
技術者の渡来　95
一　渡来系諸技術の導入　96
横穴式石室　96

寺院建設と渡来系移住民　97
百済からの上番と移住　98
二　大宰府と鞠智城　101
古代山城の築城　101
筑紫山城と百済系官人　103
三　肥後国と百済　104
大化前代の肥後と百済　104
古代山城と渡来系移住民　106
大宰府と鞠智城　107
パネルディスカッション　109

付　録　参考資料

講演④（吉村　武彦）　30
講演③（海野　聡）　18
講演②（小山田宏一）　9
講演①（長谷部善一）　1
シンポジウム次第
【2022年度　鞠智城シンポジウム　資料編】

※今回の成果報告書を刊行するにあたって、当日使用した資料を「資料編」として巻末にまとめました。

# 主催者あいさつ

# 主催者あいさつ①

熊本県副知事　木村　敬

皆さん、こんにちは。熊本県副知事の木村でございます。

本日の鞠智城シンポジウムの開催にあたり、主催者を代表して一言御挨拶申し上げます。

本日は御多用の中に御来賓の皆様を始め、多くの方々に御来場いただき誠にありがとうございます。県外からも多くの方にお越しいただいていると聞き、心より嬉しく思っております。また、明治大学日本古代学研究所を始め、講師の皆様、関係者の皆様の御協力により本日のシンポジウムが開催されますことに心から感謝申し上げる次第です。誠にありがとうございました。

皆様方も御存知の通り、鞠智城は七世紀後半の東アジアの政治的緊張の中でヤマト政権により築かれた古代山城の一つでございます。また、続日本紀等の六国史にも記載がある大変重要な遺跡でございまして、その重要性から平成十六年には国史跡に指定していただきました。さらに、鞠智城は軍事施設から行政施設へと機能を変えながら、三百

年以上もの長きにわたりこの熊本の菊池・山鹿の地に存続し続けてきたことが本県の発掘調査により分かっております。現在、史跡の保存活用に向けて調査、研究、整備、普及、啓発等、様々な取組みを行っております。この鞠智城シンポジウムは、そうした取組みの一環として学術的な評価を高めるために平成二十一年度から開催し、今回で十一回目を迎えました。今回は「渡来系技術から見た古代山城・鞠智城」をテーマにしております。古代山城の役割やその変遷を明らかにするため、渡来系技術を切り口に古代史学、考古学、建築史学等、多方面の研究者の方々に本日お集まりいただき、報告をいただくこととなっております。また、報告の後のディスカッションでは、ここにお集まりの皆様と一緒に、鞠智城の渡来系技術について考察を深めてまいりたいと思っております。

このシンポジウムを通じて、皆様の鞠智城に対する理解が深まるとともに、学術的な価値がさらに高まること、そしてさらに多くの方々に知っていただくことを期待しております。御来場の皆様には、どうぞ最後までお楽しみいただければと思っております。

最後になりましたが、本日御参加いただいた皆々様の御健勝と御活躍をお祈りするとともに、講師の先生方に心からお礼を申し上げ、主催者からの挨拶とさせていただきます。

本日はお集まりいただき誠にありがとうございました。

# 主催者あいさつ②

明治大学日本古代学研究所所長　石川　日出志

会場の皆様、こんにちは。明治大学の日本古代学研究所の石川日出志と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

開会にあたりまして共催者として一言御挨拶申し上げます。

まず初めに、皆様方おいでのパレアから東に九百キロメートルの東京からスクリーンを通しての御挨拶となります。この失礼をお許しいただきたいと思います。私の背景画像は、新潟市の古津八幡山遺跡、丘陵上の弥生時代の集落遺跡です。

さて、私ども日本古代学研究所は考古学、歴史学、文学の三分野が共同し、さらに民俗学・民族学の視野も加味して日本の古代世界を総合的に、ちょうどトンボの目のように複眼的に探求しよう、そういう研究プロジェクトです。しかし、大学内で共同研究することにも限界がありますので、行政組織を含めた全国の方々と様々に連携して、刺激を受け、研究の視野を広げ深めてまいりたいと考えています。その

一環として鞠智城という魅力的な歴史遺産をお持ちの熊本県と連携して本日のシンポジウムを開催するものです。

とてもいい時代になったな、とお思いの方もいらっしゃるかもしれません。本日の主催者である熊本県が東日本にも鞠智城の魅力を知ってもらおうと思い、東京でシンポジウムをやろうと計画された際に私どもにお声がけいただき、明治大学で毎年、東京シンポジウムを開催してきました。熊本が誇るくまモンや鞠智城のころう君も登場して、お姉さん方のサポートもありながら大変盛り上げていただいています。先生方の熱弁もあってですね、千名余りを収容する会場がほぼ一杯になるという非常に熱いシンポジウムとなります。残念ながら近年はコロナ禍のために東京シンポジウムは休止しておりますが、来年こそはと熱い思いで期待しているところであります。ちょっと何か閉会みたいに聞こえますかね（笑）。

本日は「渡来系技術から見た古代山城・鞠智城」と題し、佐藤信先生をコーディネーターとして、他五名の先生方に講演とディスカッションを進めていただきます。事前に資料を拝読しました。古代山城というのは建築、土木等、多彩な技術がシステムとして機能して初めて成り立つものなのだということを改めて感じました。私だけはオンラインでの視聴となりますが、本日は会場の皆様と一緒に楽しみたいと思っております。

最後になりましたが、私どもを共催としていただいている主催者の熊本県及び熊本県教育委員会に

厚く御礼を申し上げます。

それでは皆様、本日はよろしくお願いいたします。

# 報告①　鞠智城の渡来系技術

講演者紹介

長谷部　善一（はせべ　よしかず）

平成三年（一九九一年）四月に熊本県教育庁入庁。熊本県立装飾古墳館、熊本県教育庁文化課課長補佐を経て、令和四年（二〇二二年）四月より熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館館長。

# 「鞠智城の渡来系技術」

歴史公園鞠智城・温故創生館館長　長谷部　善一

## はじめに

鞠智城跡の保護施策は、昭和三十四年（一九五九年）の長者山礎石群、深迫門礎石の確認を受け「伝鞠智城跡」として県の史跡指定を皮切りに、昭和四〇年代の発掘調査成果を踏まえ、昭和五十一年（一九七六年）に鞠智城の位置が確定するに至り指定名称を「伝鞠智城跡」から「鞠智城跡」に変更した。平成十六年（二〇〇四年）には国により「我が国の歴史を語るうえで重要な遺跡」として、国指定の史跡に指定され更なる高みによる保護が図られた。

本稿では、これらの保護の過程で明らかにされてきた古代山城としての鞠智城の価値を示す「渡来系技術」について、これまでの研究成果をもとに報告する。

## 一　鞠智城に遺る渡来系技術

鞠智城跡の発掘調査は昭和四十二年度（一九六七年度）の第一次調査以降、令和四年度（二〇二二年度）までで三十七次を数え、城門跡、土塁線、管理・行政機能を司る建物群を擁す平坦地と建物群、そして国内の古代山城では初めての確認事例となる貯水池など多くの調査成果が得られてきた。

ここでは、これまでの発掘調査の成果や、鞠智城シンポジウム及び鞠智城跡「特別研究」で、朝鮮半島に由来する渡来系技術として指摘されてきた各遺構について紹介し、この後の報告につなげたい。

### （一）選地

鞠智城は、菊池川沿いの菊池平野と内田川沿いの菊鹿盆地の両方向を望む位置に所在する。鞠智城が築城され役割を終える時期には、八世紀～九世紀代を中心に、鞠智城を望む地域に官衙的要素を有する遺跡が現在までに、四か所知られている。その他、全容は把握されていないが官衙的要素を有する可能性が高い遺跡として、掘立柱建物や火葬墓を確認している赤星福土遺跡（菊池市）、竪穴建物、掘立柱建物が確認され、越州窯系青磁が出土している赤星水溜遺跡（菊池市）がある。

そのうち鞠智城に最も近い位置には、土塁が巡り多量の布目瓦が出土する「菊池郡家」と推定される西寺遺跡（菊池市）、うてな台地南側斜面上に塔心礎が残り、西に金堂、北に講堂を持つ法起寺式の伽藍配置が推定され、さらに鴻臚館式瓦を出土する「菊池郡寺」と推定される十連寺跡（菊池市）、

官衙的要素の一つとされる「コ」の字に並ぶ掘立柱建物群の存在が確認されている御宇田遺跡（山鹿市鹿本町）並びに同じく「コ」字に掘立柱建物群を持つ「上鶴頭遺跡」（菊池市七城町）などが知られてきた。

その後、平成に入りうてな台地上の圃場整備事業で一部で、うてな遺跡七枝地区から多数の竪穴建物と共に二十棟を超える掘立柱建物が検出され、三彩壺や銅椀片並びに墨書土器が出土するなど鞠智城から谷を一つ隔てた地域に官衙関連の集落が展開していたことも判明している。また、近年、鞠智城近くを通る官道の「車路」ルート近くで、鞠智城の存続期間都と被る九世紀初頭の掘立柱建物群を検出した赤星石道遺跡（菊池市）の調査がおこなわれるなど、鞠智城取り巻く遺跡が知られている。

このような現在までに知られている官衙的を持つ遺跡はすべて、凝灰岩台地の平坦地を選地するか、菊池川河岸段丘の平坦地を利用して立地している。これらは例外なく、他の役所や集落を見通す位置を選地しており、車地を通じ連携できる位置に選地している。

それに比べ鞠智城は現在知られている三つの城門はもとより、米原台地の建物群など、これらは他からの視点を遮断するかの場所に建設され、かろうじて長者山、灰塚など「烽台」が置かれたであろう場所だけが周辺を遠望できるが、外部からその位置を正確に求めることは難しい。

それではなぜ、重要な官衙や拠点集落がうてな台地や河岸段丘上に造られてきたにもかかわらず、鞠智城だけは外から見えない低山地内に選地されたのか。おそらく、この選地こそが、古代山城築城

1．鞠智城跡　2．津袋古墳群　3．袈裟尾高塚古墳　4．木柑子ブタツカサン古墳　5．木柑子高塚古墳
6．御裳塚古墳　7．瀬戸口横穴群　8．御宇田遺跡群　9．上鶴鴫遺跡　10．うてな遺跡　11．十蓮寺跡
12．西寺遺跡（郡家）　13．篠原遺跡

図１　周辺遺跡分布図

図２　鞠智城城域範囲

の渡来系官人による選地の重要な部分であったことが考えられる。

濱田耕策氏は平成二十一年の鞠智城シンポジウムで、「鞠智城を「くくち」と読む『日本書紀』の古訓を糸口に鞠智城の築城者層について考察されており、筑紫の二つの山城と連携するこの鞠智城の「鞠智」が築城に際してその土地の選定に始まる築城プランナーとして城名に名を遺すほどの貢献をなしたものかと考えらえる」とし、百済官人のそれも上位の官位を持ち、佐平や達率を帯びた亡命官人の関与を指摘されている。このことから、選地が鞠智城の最大の渡来系技術（思想）そのもので、渡来系（百済）官人の関与を強く示唆していると考える。

## （二）城門

現在、鞠智城内で調査により確定している城門は三か所である。いずれも城域の南側土塁線上から西側土塁線にかけ、東から深迫門、堀切門、南側土塁線を経て池ノ尾門を認める。このうち、深迫門と堀切門は包谷式を取る選地の条件から、周囲の平坦地もしくは車路へ抜けるルート上には深い谷を有し、起伏の大きな進入ルートしか想定できない。唯一、西を向く池ノ尾門は菊鹿盆地を横切る車路や、河川交通として川湊が想定できる菊池川や木野川から谷を隔てることなく進入することができ、城外から城内中心部まで進入できる最も起伏の少ない城門である。城内に搬入される米をはじめとする物資の搬入口としての役割を担っていたと考えられる。また、のちに報告するが貯水池から出土した鞠

智城初の文字資料である木簡も荷札として付けられた状態でこの城門を経由し持ち込まれたものと考える。

また、この池ノ尾門は、現在の福岡県八女市から国道三号を経由する岳間渓谷を辿ると最短距離で大宰府方面とを結ぶルートとなる。現在知られている車路・延喜式官道で想定されているルート上には乗らないが、大野城・基肄城の後方支援基地としての役割を考えるとこのルートの存在も生きてくる。更に、鞠智城には城域の北側、現在の米原集落近くに北門の存在も指摘されている。これまでの調査では確認されていないが福岡県方面に向けての城門があってもおかしくはないと考える。

そこで城門がなぜ、渡来系の技術と考えるかだが、同じく朝鮮式山城として築城された大野城・基肄城と同様、城門は単独で存在するものではなく、土塁線上にあり土塁と連携することで城としての機能を有する存在として城門はある。深迫門では城門を挟み込むように谷地形の中まで土塁が迫っており、その延長として城門が造られている。

城跡を考える上で重要となる定義の一つに、岡田茂弘氏[2]が示された「城跡」と判断する基準を、「防御的構造物＝自由な出入を規制する施設の遺構の存在」とすると、城門と土塁の連続性に強い防御的思想を見いだし、同じ構造を持つ大野城・基肄城と同様にこの当時の国内の築城思想から派生した施設ではなく、朝鮮式山城に不可欠であると考える。

図3　城門位置図

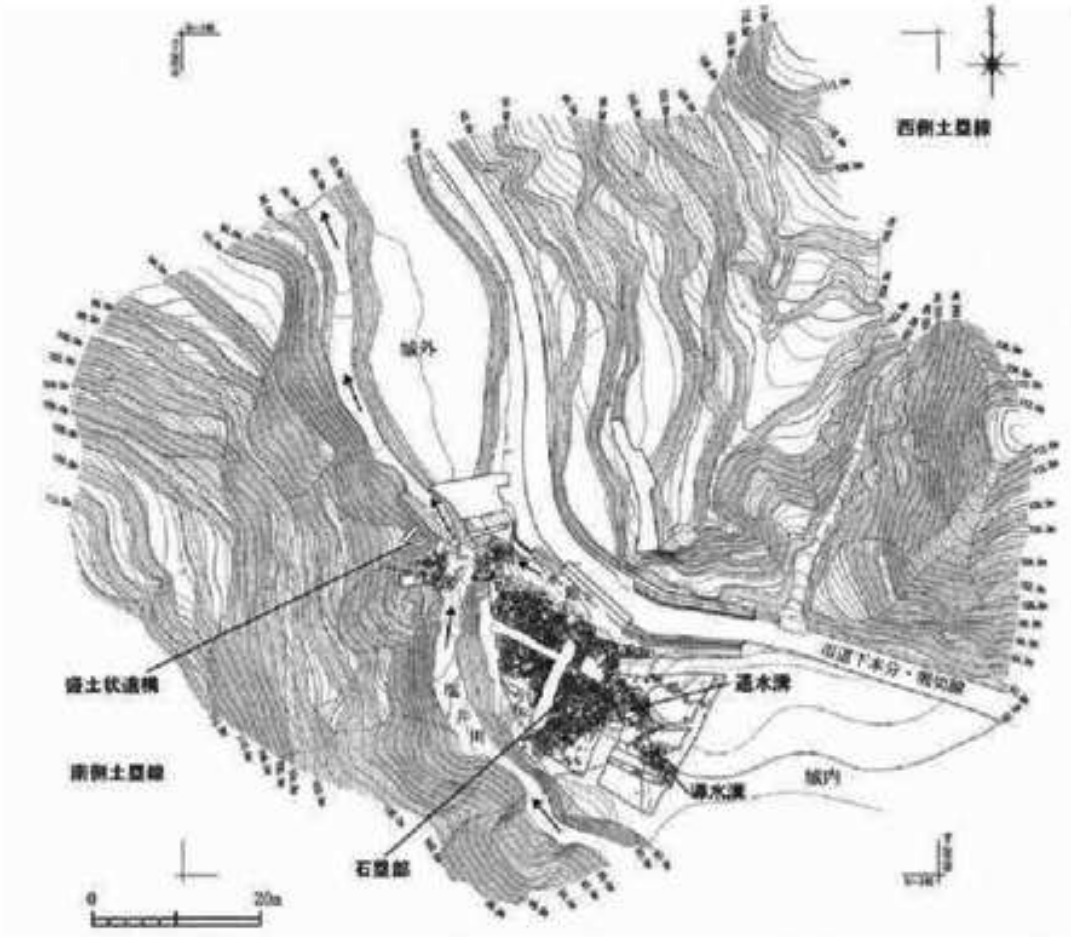



図４　池の尾門周辺地形図

## （三）土塁線

鞠智城の土塁線として南側・西側土塁線が知られていることを先述した。土塁と城門が組み合わさることにより、城の防御的構造物となる。さらに、この両土塁には、古代山城で初めて取り入れられた築城手法である「版築」技術が用いられており、これまでの発掘調査で中国・朝鮮半島の築城技法が明らかにされている。

南側土塁線は、堀切門跡から西方向に延びる標高百二十ｍ～百三十ｍの丘陵頂部に位置し、総延長五百ｍの区間である。丘陵南斜面は、裾部との比高差が二十ｍ

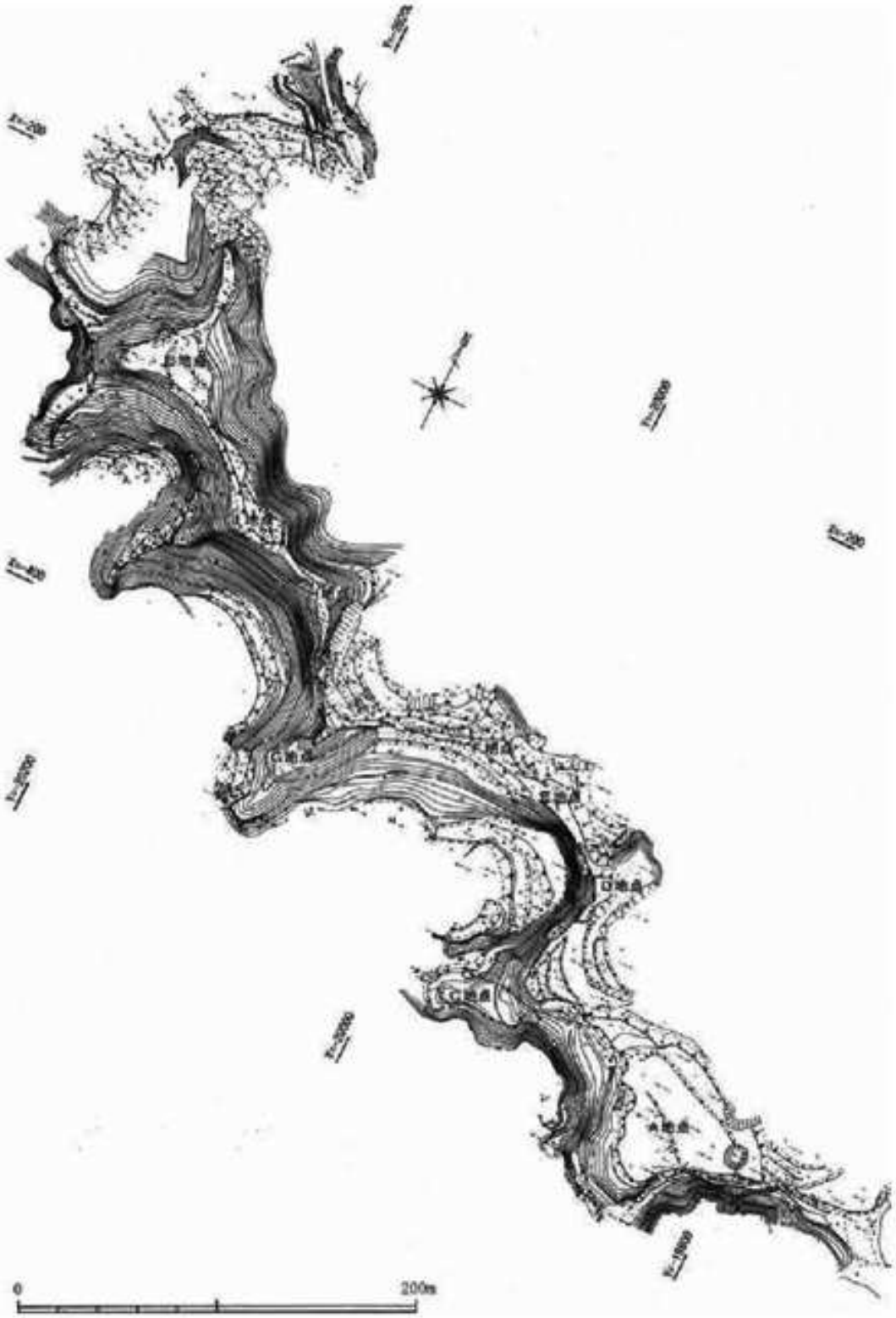



図5　南側土塁線

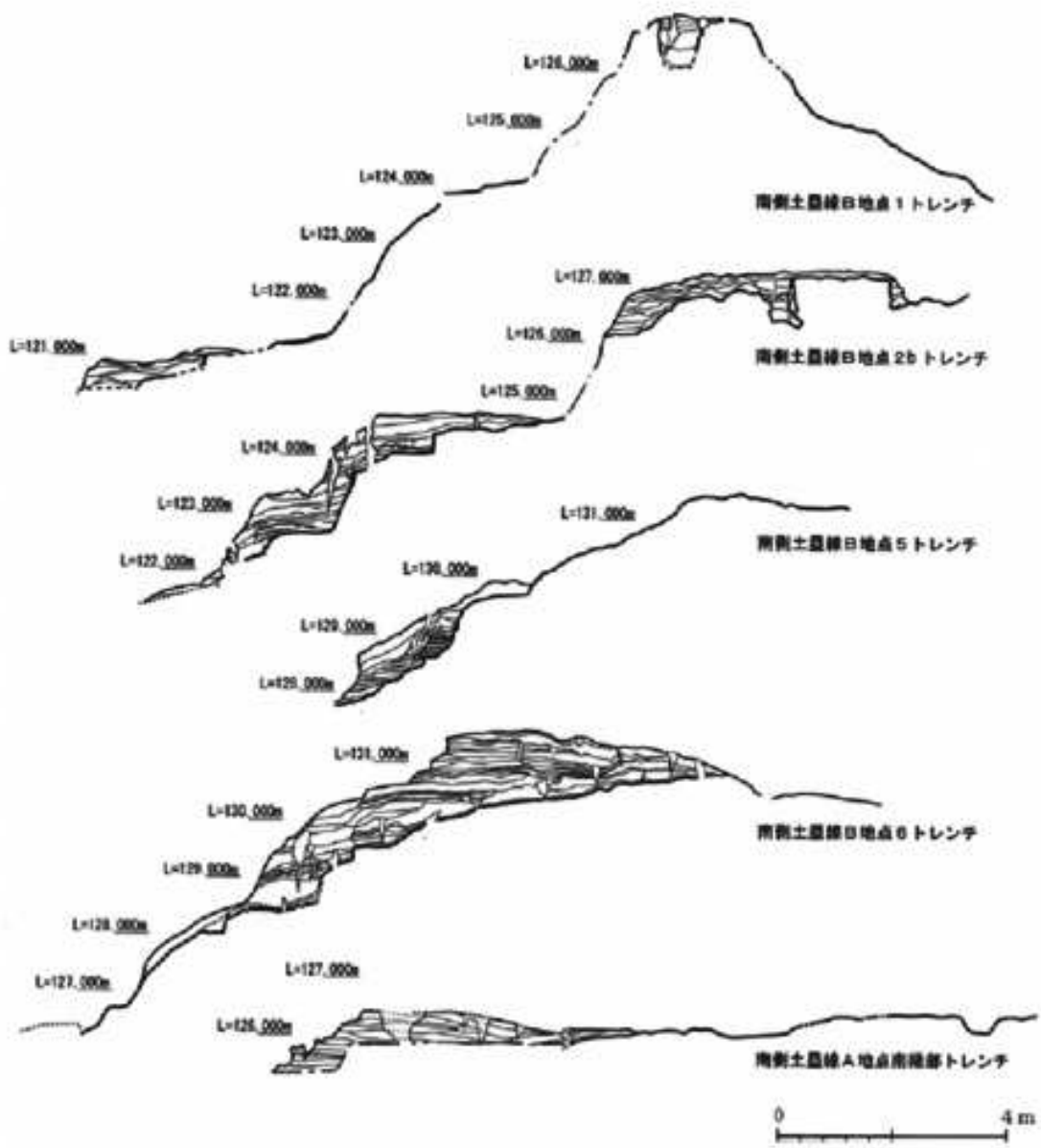

南側土塁線B地点1トレンチ
南側土塁線B地点2b トレンチ
南側土塁線B地点5トレンチ
南側土塁線B地点6トレンチ
南側土塁線A地点南端部トレンチ
0
4 m

図6　南側土塁線断面

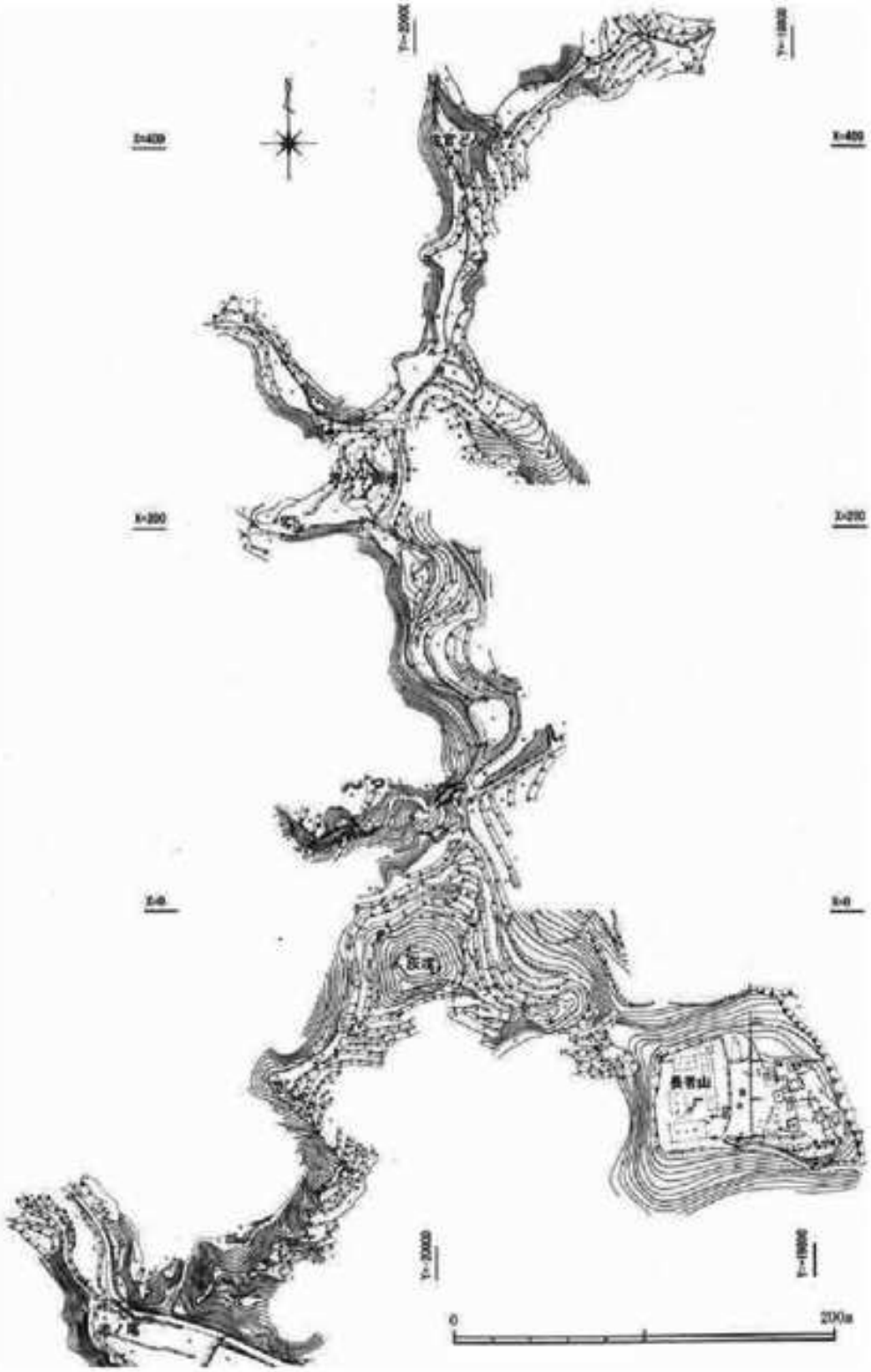



図7　西側土塁線

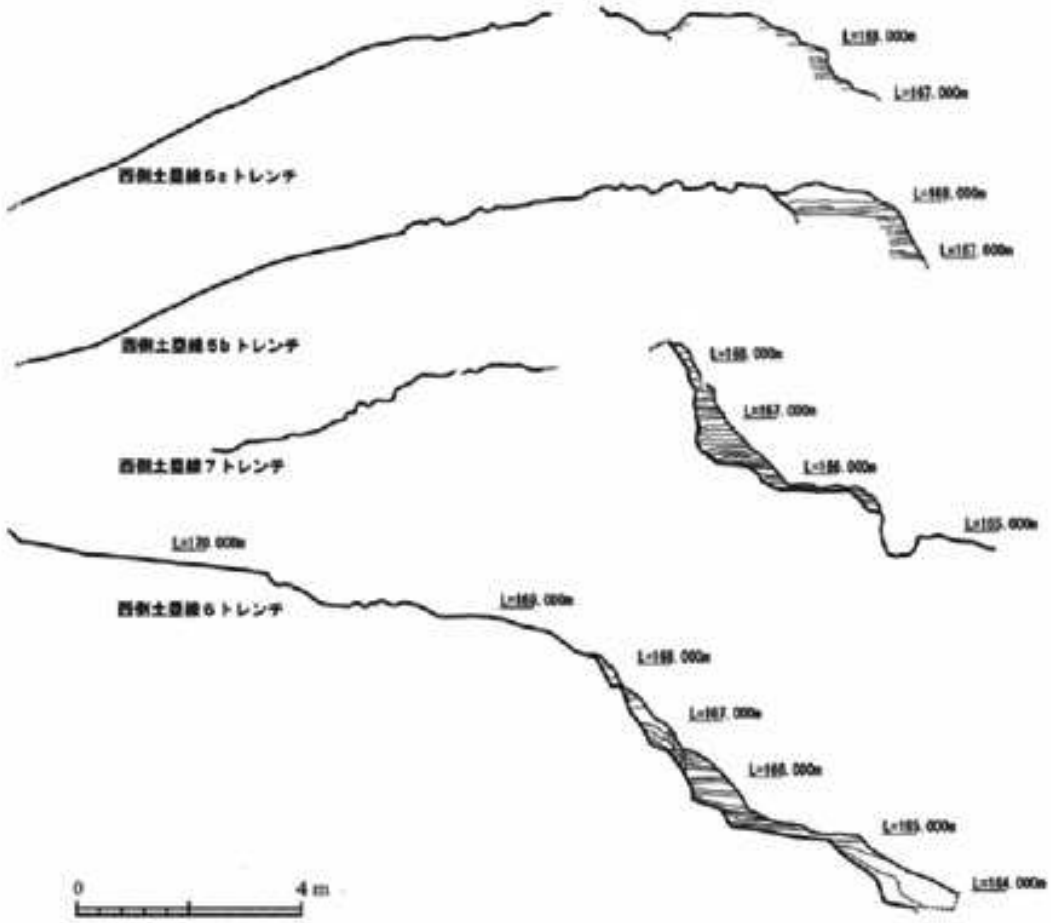



図８　西側土塁線断面

～三十mに及び、阿蘇溶結凝灰岩の切り立った崖を形成しており「屏風岩ライン」と呼ばれる地点も含んでいる。

また、西側土塁線上は、長者原地区の西端（標高百五十五m）から北方向に延び、標高百五十m～百七十mの丘陵頂部に位置し、総延長約五百mの区間である。土塁線は馬の背状の尾根が、通称「灰塚」、「涼みヶ御所」、「佐官どん」といった頂を繋ぐように連続し、南から北に徐々に標高を上げていく。発掘調査では「佐官どん」で版築土塁が確認されている。

## （四）貯水池跡

長者原地区の東側、米原集落の西に所在する谷部から、平成八年（一九九六年）に調査に着手し国内の古代山城では岡山県の鬼城山（史跡鬼城山跡・岡山県総社市）と鞠智城でしか確認されていない城内に所在する貯水池を確認している。調査の結果、鞠智城では総面積約五千三百㎡に及び、池跡からは後に触れるが多彩な遺物も出土している。

古代山城における貯水池は、全赫基[3]氏により古代山城の類例から古代朝鮮の山城における「集水遺構」と類似遺構であるとし、池跡からの出土遺物の特徴とも合わせ、そのルーツは古代朝鮮の築城技術の一つとして捉えられている。

また、貯水池跡の調査では、堤防状遺構の断面から「敷粗朶工法」とみられる低湿地における地盤を強化する技術も確認されている。この技術は鞠智城に先行して渡来系官人の指導により築城された記録の残る水城（特別史跡水城・太宰府市ほか）で用いられ、軟弱地盤上に大堤が築かれている。

## （五）建造物等

鞠智城の長者原・上原地区では合計七十二棟の建造物を確認しているが、うち二か所で八角形建物跡を四棟確認している。北側の30・31号建物では、心柱を中心に八角形状に配された柱が二重に巡り、掘建柱から礎石への建て替えが確認されている。また、南側では、心柱を中心に八角形状に配された

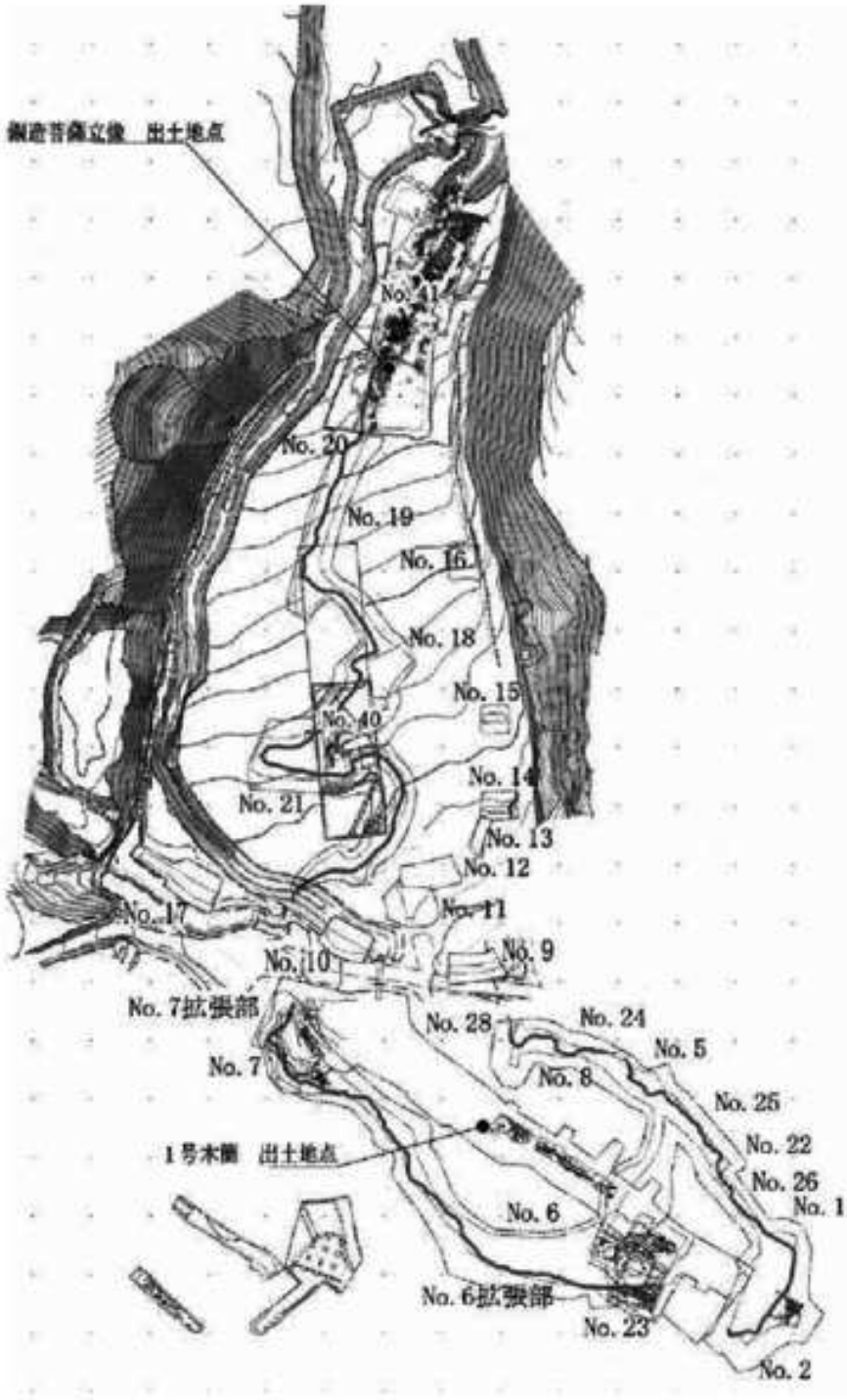

観音菩薩立像　出土地点
No. 41
No. 20
No. 19
No. 16
No. 18
No. 15
No. 40
No. 14
No. 21
No. 13
No. 12
No. 11
No. 17
No. 9
No. 10
No. 7拡張部
No. 28
No. 24
No. 5
No. 7
No. 8
No. 25
No. 22
1号木簡　出土地点
No. 26
No. 1
No. 6
No. 6拡張部
No. 23
No. 2

図９　貯水池調査区

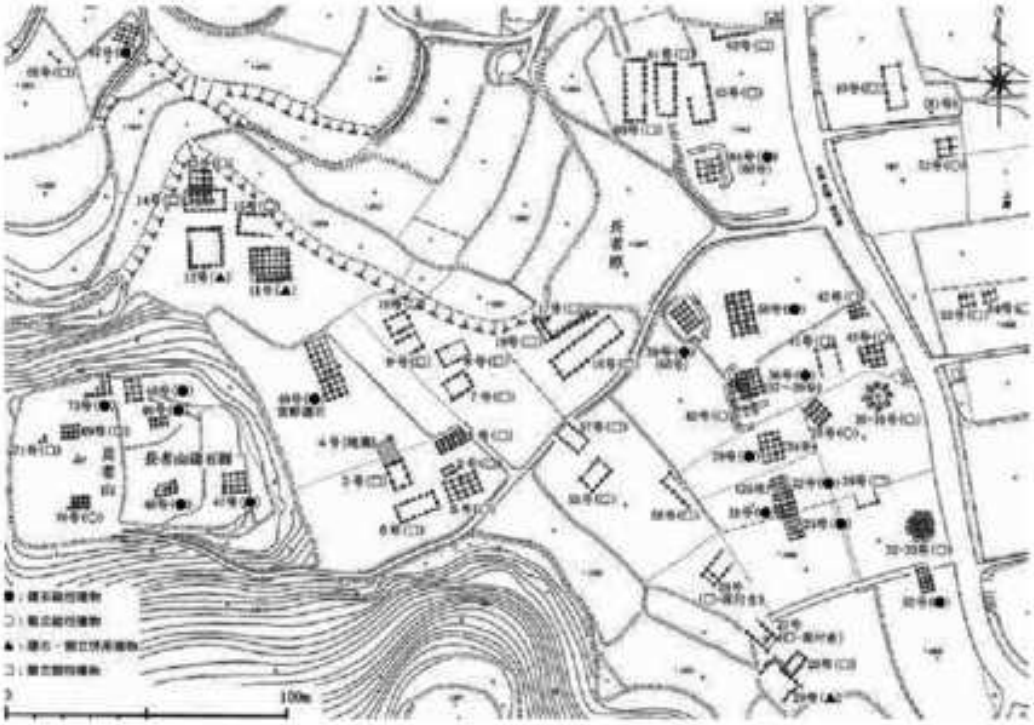


図 10　長者原地区遺構配置図

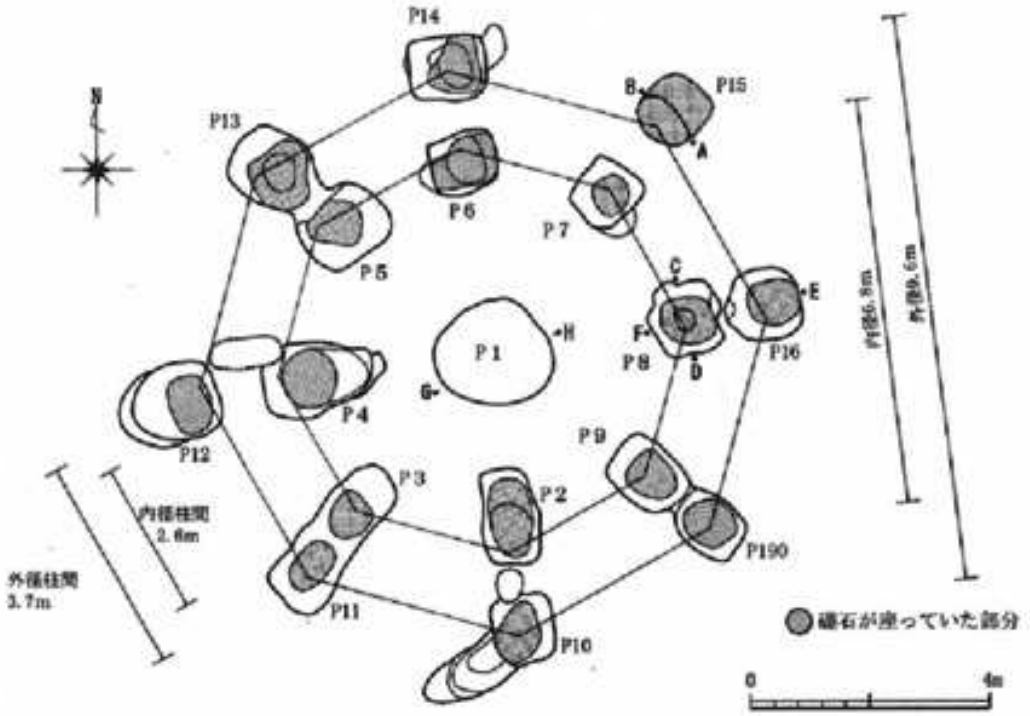



図 11　31・32 号建物

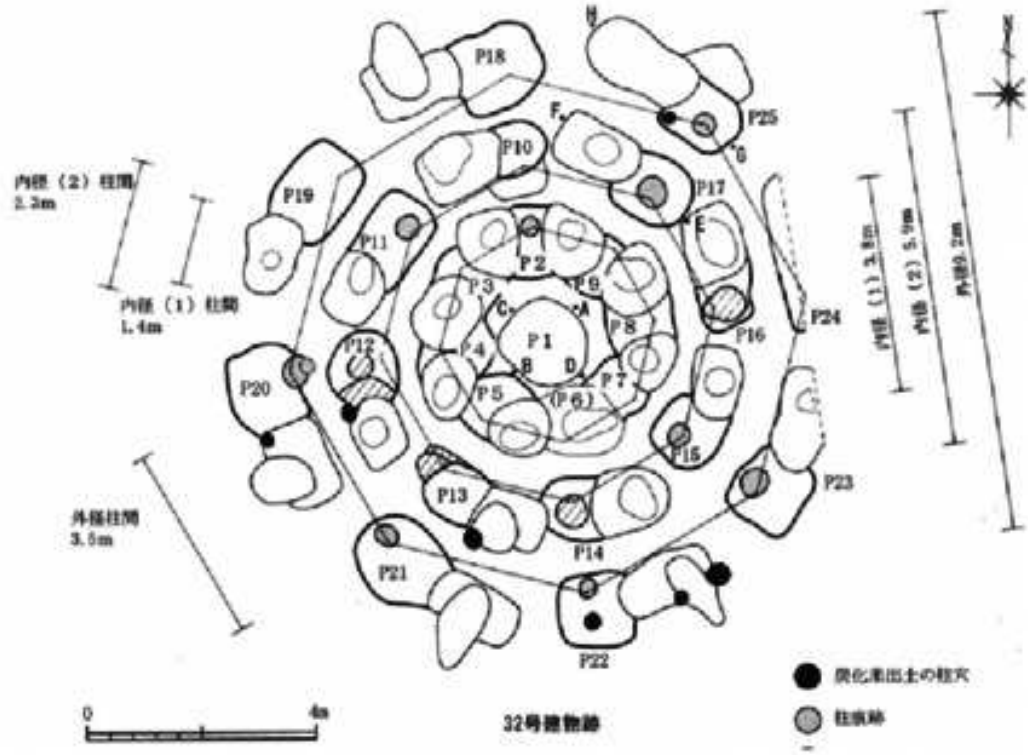



図 12　32 号建物

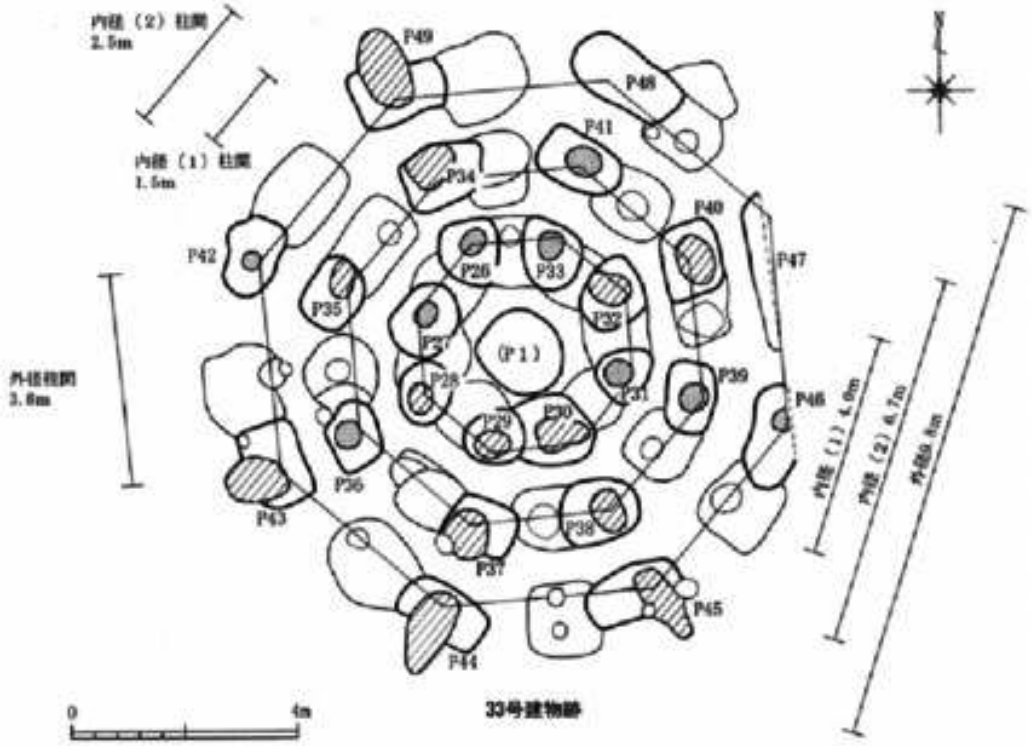



図 13　33 号建物

柱が三重に巡り、こちらも掘建柱から礎石への建て替えが確認されている。八角形建物は八世紀前半、鞠智城第Ⅱ～Ⅲ期に位置づけられ官衙的役割を持つ建物群が立ち並ぶなど、当初の城としての機能から役所的機能へと変化する時期に属すると考えられる。近年、多角形建物は国内の官衙的性格を持つ遺跡等から複数の検出事例があるが、古代山城からの検出事例は鞠智城に限られている。

## （六）出土遺物

### ①　瓦

鞠智城では、軒丸瓦・丸瓦・平瓦の三種類の瓦が、大小の破片を含めて合計一万九百点余り出土している。軒丸瓦には、「単弁八葉蓮華文」と呼ばれる蓮の花をかたどった文様が施されているが、これは朝鮮半島の瓦文様の影響を受けたものと見られる。

### ②　銅製菩薩立像

銅製菩薩立像は、貯水池跡の池尻部から出土した。柄（下部の突起部分）を含む高さ十二・七cm、幅三・〇cmで、横から見ると体部がS字曲線を描いている。顔の表情は丸みを帯び穏やかで、三面の宝冠、肩まで垂らした垂髪、両肩にかけられた天衣などもよく表現されている。また、舎利容器とも考えられる持物を、へその前で両手で抱えるように持っている。

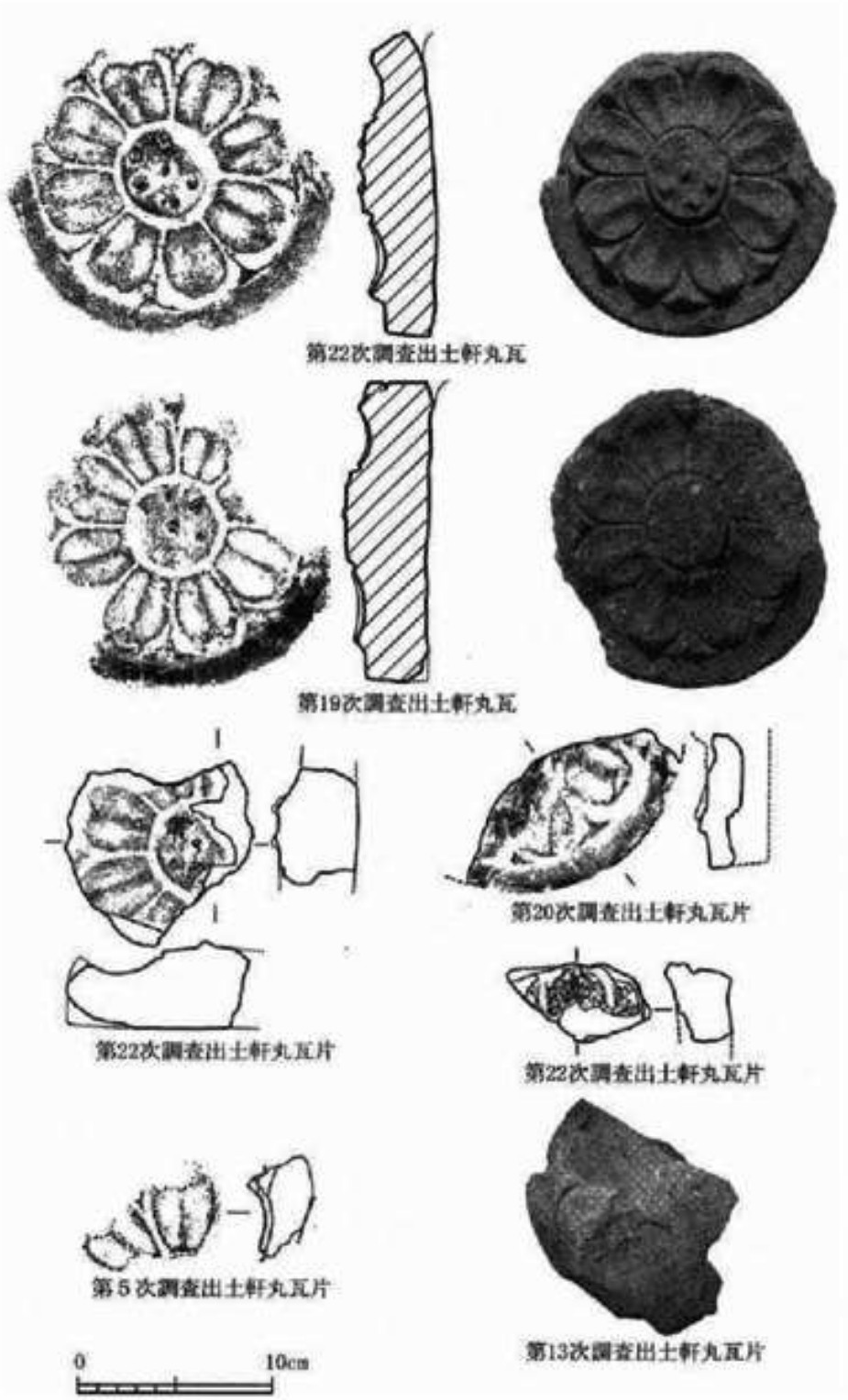

第22次調査出土軒丸瓦
第19次調査出土軒丸瓦
第20次調査出土軒丸瓦片
第22次調査出土軒丸瓦片
第22次調査出土軒丸瓦片
第5次調査出土軒丸瓦片
第13次調査出土軒丸瓦片
0
10cm

図 14　軒丸瓦瓦当

この仏像は、七世紀後半の百済仏の特徴を持つことから、朝鮮半島の百済でつくられ日本に持ち込まれた可能性が高いと考えられている。

③ 木簡

木簡は貯水池跡の水分が多く、粘性の高い土中から出土した。短冊状の木の板に墨で「秦人忍□（米カ）五斗」という文字が書かれており、古代に秦人忍（はたひとのおし）という人物が税として納めた米に結び付けられていた荷札であると考えられる。上部には左右から切り込みがある。この切り込みの形状は九州の木簡に多く見られる形態を示している。

## 二　発掘調査から見えてきた鞠智城に遺る渡来系技術

鞠智城に用いられている築城技術並びに出土遺物には多くの渡来系技術が存在することがこれまでの調査・研究から分かっている。特に鞠智城には国内の古代山城にはない八角形建物やこれも事例の少ない貯水池跡の存在などが認められるので、まだ研究の余地を多く残す古代山城であるといえよう。

図 15　貯水池跡出土木簡

最後に、本県では、現在、海外から世界的な半導体受託製造大手の菊陽町進出が決まった。これほどの企業がなぜ、進出先として熊本を選地したのか。今回の事例が、これまで鞠智城がなぜ現在の山鹿市・菊池市に跨る米原台地を築城先として選地したのかに大いに考えさせられるきっかけを与えてくれた。

現在、半導体製造大手の進出先周辺は北側に大分方面と九州縦貫道とを結ぶ高規格道路の交通インフラの整備が進み、また、熊本県・周辺市町村が長年整備してきた工業団地及びそこに進出している国内関連メーカーの存在など、他地域に比べ進出すべき条件が整っていたことが熊本の地が選地された理由であると考える。

この在り方は、七世紀代に鞠智城が現在の山鹿市・菊池市に選地され、築城された経緯とも重複すると考える。車路など官道の整備、菊池川を中心とする河川交通の整備など大宰府との連携を目途としたインフラの整備が整っていたこと、また、これは今後の課題になるが鞠智城が築城される七世紀代に周辺に鞠智城と連携を図る官衙的存在があったことが、鞠智城がここに選地された要因である可能性が高いと考える。

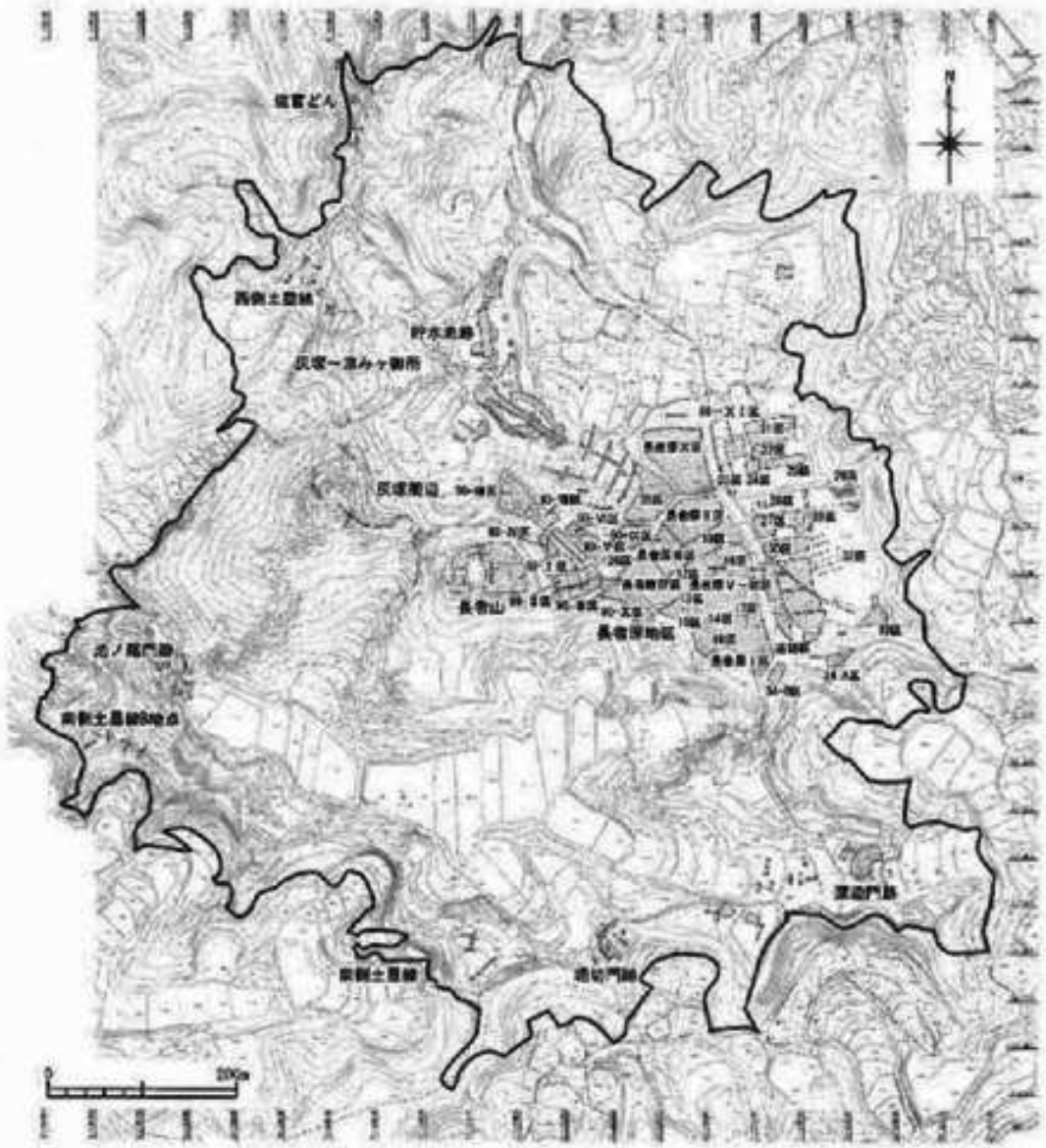



図 16　鞠智城城域及び遺構配置

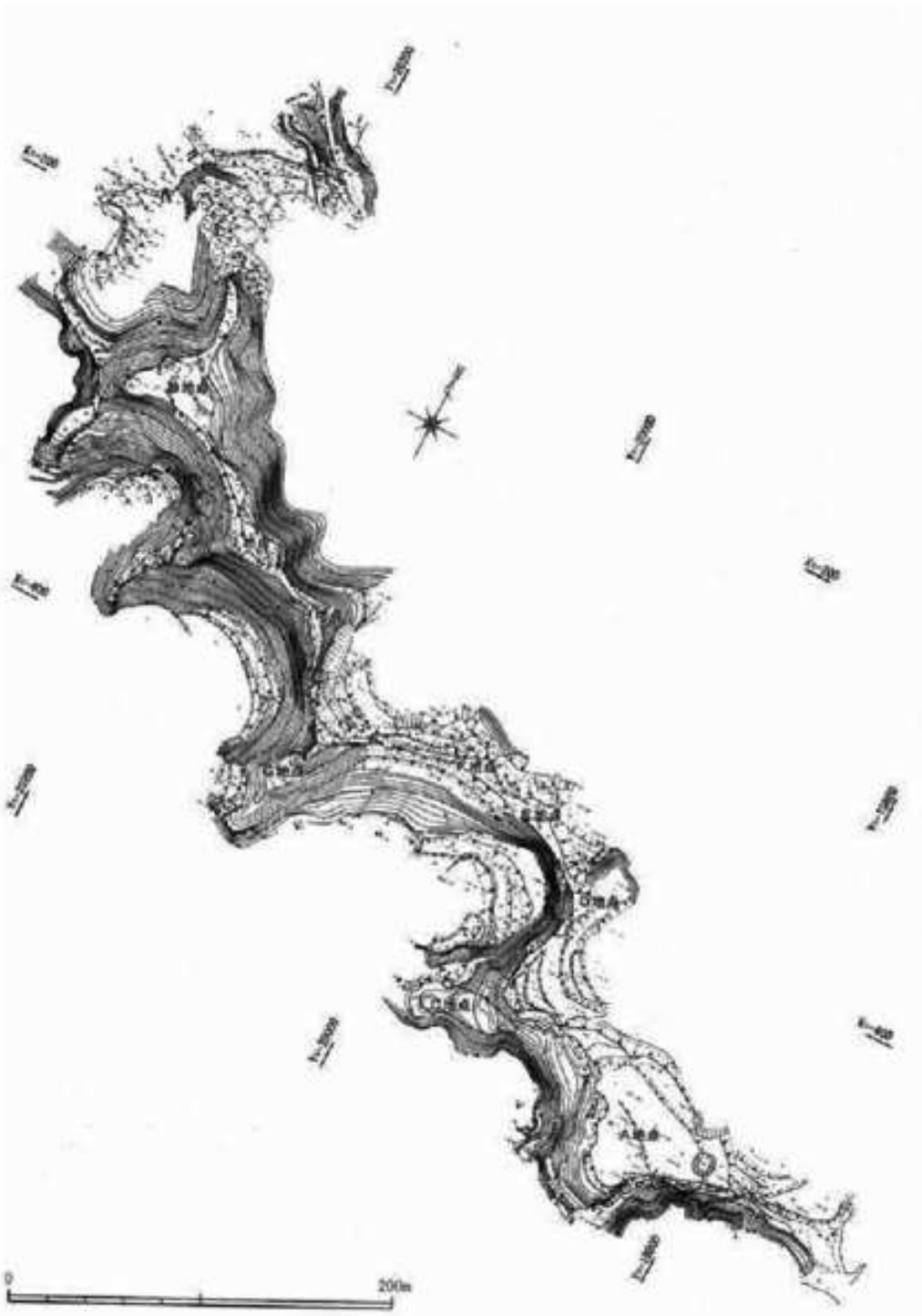



図 17　南側土塁線

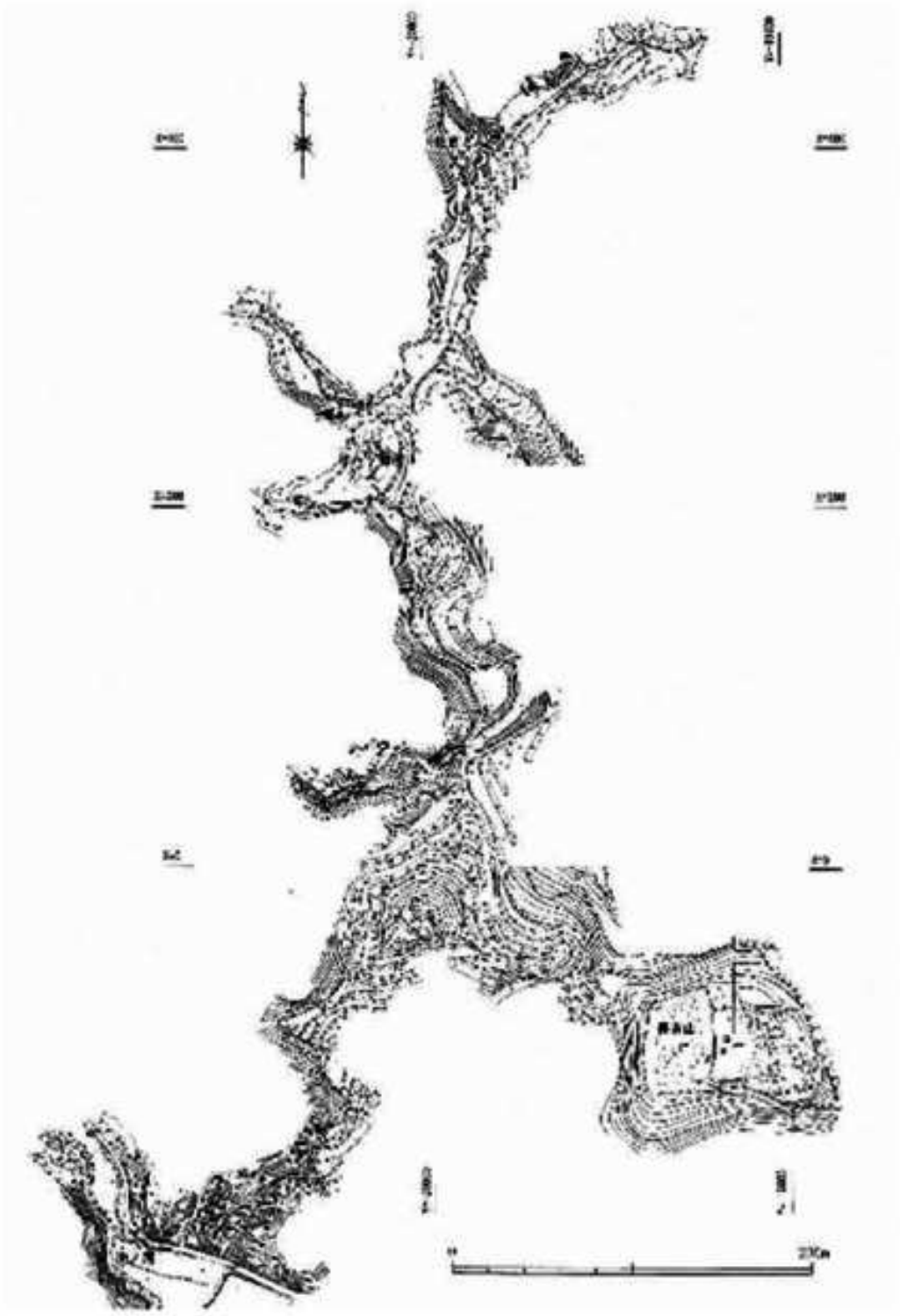


図 18　西側土塁線

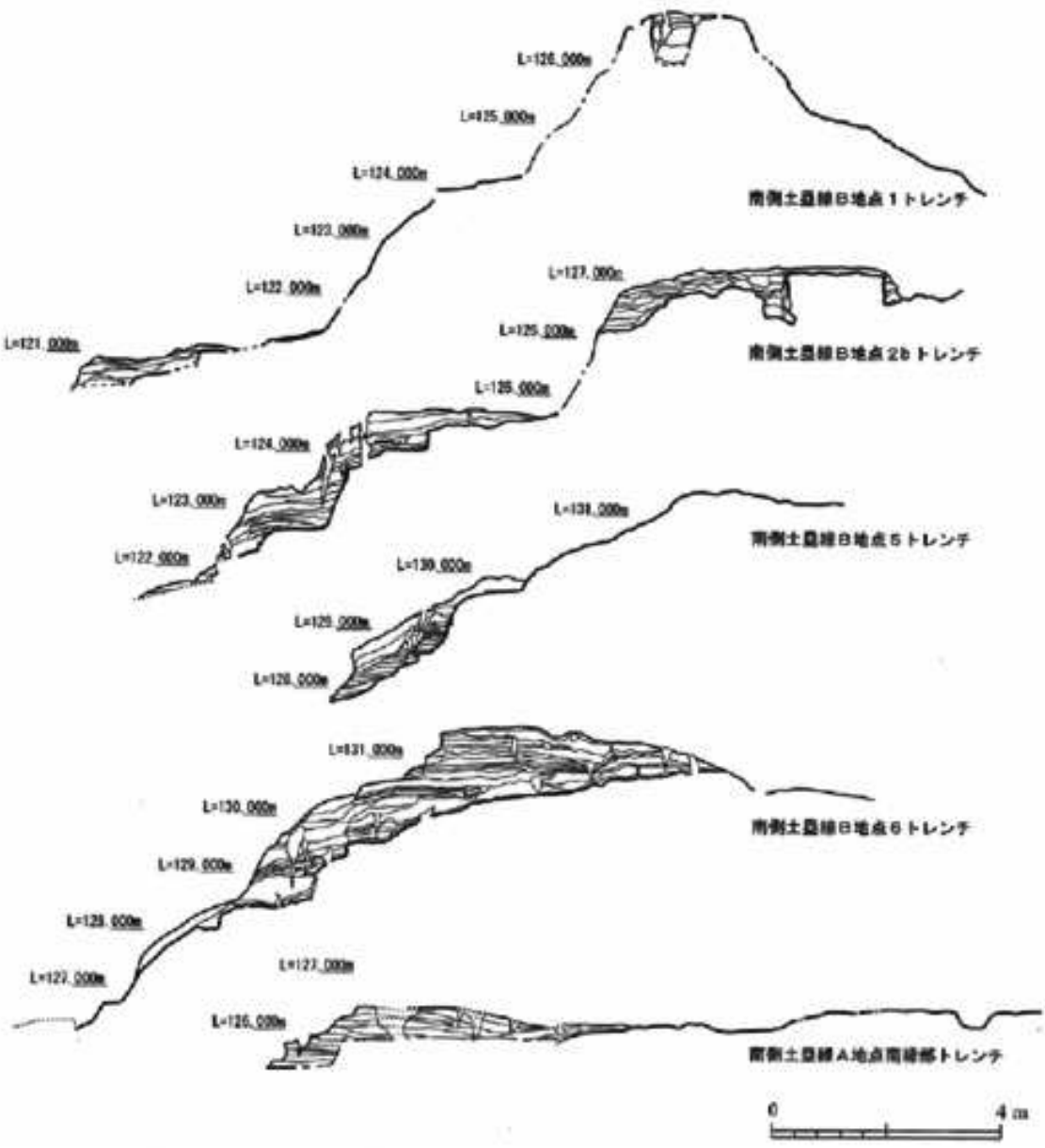



図 19　南側土塁線トレンチ断面

【引用文献】
1　濱田耕策「朝鮮古代史からみた鞠智城」『古代山城 鞠智城を考える』鞠智城東京シンポジウム報告書（二〇〇九年）熊本県教育委員会
2　岡田茂弘「古代山城としての鞠智城」『鞠智城を考える』二〇〇九東京シンポジウムの記録（二〇一〇年）山川出版社
3　全 基「韓国の古代山城の集水施設からみた鞠智城の研究課題」『鞠智城と古代社会』第十号（二〇二二年）熊本県教育委員会

【参考文献】
・『史跡鞠智城跡保存管理計画書』（二〇一五年）熊本県教育委員会
・『第三次鞠智城跡保存整備基本計画』（二〇一六年）熊本県教育委員会
・『鞠智城跡Ⅱ－鞠智城跡第八次～第三二次調査報告－』（二〇一二年）熊本県教育委員会
・『鞠智城と古代社会』第一号（二〇一四年）～第十号（二〇二二年）熊本県教育委員会
・『築城技術と遺物から見た古代山城』－発表資料集－（二〇一六年）熊本県教育委員会
・『鞠智城とその時代－平成十四～二十一年度「館長講座」の記録－』（二〇一一年）熊本県教育委員会
・『鞠智城とその時代－平成十四～二十一年度「館長講座」の記録－』二（二〇一四年）熊本県教育委員会
・『鞠智城跡Ⅱ』論考編一（二〇一四年）熊本県教育委員会
・『鞠智城跡Ⅱ』論考編二（二〇一四年）熊本県教育委員会

# 報告②　渡来系の土木技術とため池・山城

講演者紹介

小山田　宏一（こやまだ　こういち）
同志社大学文学部文化史学科卒業。大阪府教育委員会文化財保護課考古学技師、大阪府立弥生文化博物館学芸課長、大阪府立狭山池博物館学芸員、奈良大学文学部文化財学科教授を歴任。現在、大阪府立狭山池博物館館長。専門は考古学。

# 「渡来系の土木技術とため池・山城」

大阪府立狭山池博物館　館長　小山田宏一

## はじめに

皆さんこんにちは。紹介いただきました小山田宏一と申します。関西、関東では一般に「おやまだ」と読みますが、私は九州鹿児島「かごんま」の出身で、「こやまだ」と読みます。

大阪府立狭山池博物館に勤務しています。六一六年頃に誕生した狭山池の土木遺産を継承して活用する博物館です。今回は土木技術つながりで、このシンポジウムに参りました。

鞠智城は、東アジアを代表する文化遺産、そして激動の東アジアの生き証人で、すぐれた歴史的価値と意義をもっています。これまで、その価値を高めて利活用を促進する学際的な研究が進められてきました。今回、私は鞠智城で貯水池が復元されている谷筋を取り上げて、その空間計画の土木技術の一端に迫ってみたいと思っています。

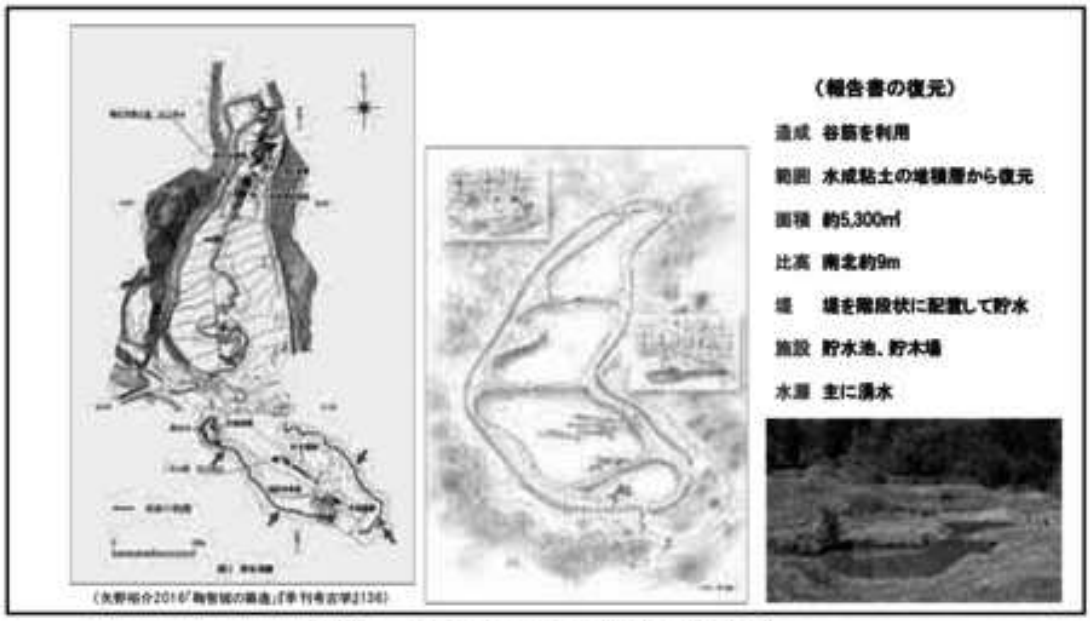



図１　これまでの鞠智城の貯水池

先ほどの開催前行事で、ころう君をはじめて生で見て、感激して携帯に撮りました。ころう君の夢は、鞠智城がもっと有名になることです。私もその夢に少しでも協力できればと思っております。

さて、本日の話の要点は五つあります。鞠智城の歴史的価値にふれたあと、二番目で鞠智城の貯水池の谷筋を私なりに再検討します。三番目は、貯水池の築堤の敷粗朶工法に少し触れます。そして、四番目、五番目で貯水池が復元されている谷筋の開発思想と空間計画について、私なりの考えを述べます。それでは、よろしくお願いします。

## 鞠智城の貯水池

図1は谷筋の全体図と、これまでの貯水池の推定復元図です。貯水池の範囲は、流水あるいは滞水の作用で堆積した水成粘土の範囲から復元されています。ちょうど

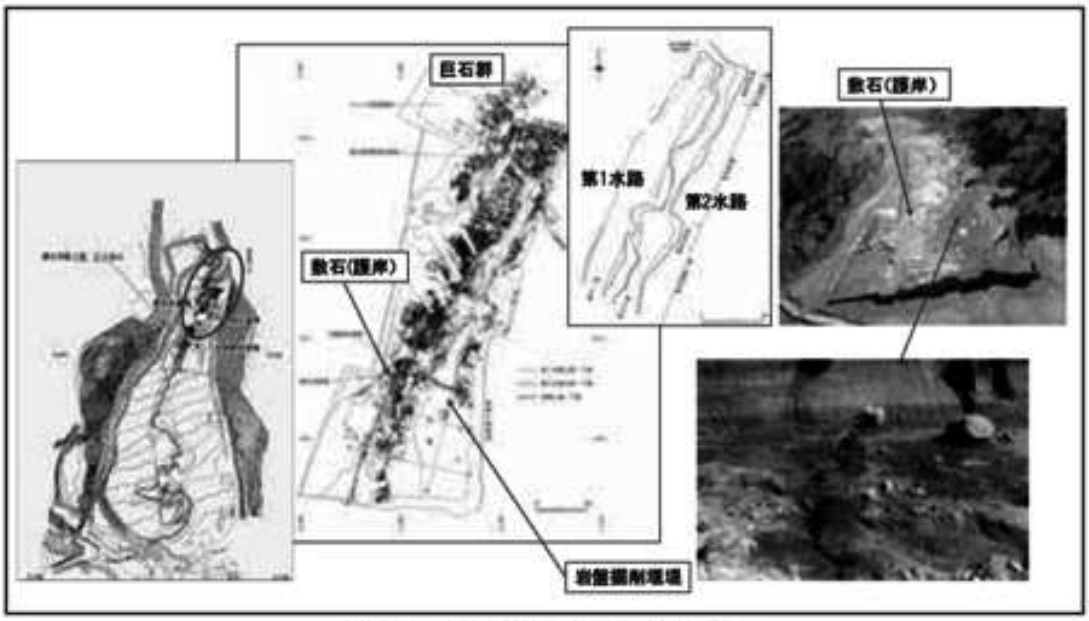



図2　池尻の排水工・減勢工

矢印を打っているラインが水成粘土の範囲になっています。貯水池の面積は五千三百㎡、上流側と下流側で南北九mの比高があり、水を貯めるため、所々に堤を造って水位を調整していたと復元されています。つぎにこうした復元について、少し検討を加えてみたいと思います。

## 排水工と減勢工

まず下流域の池尻と呼ばれている地区を検討します(図2)。岩盤を削り出した堤、護岸、そして水路が見つかっています。水路部分の拡大図を載せています。水路では次の二点に注目しています。第一点は水路の形状です。第1水路が埋まった後、第2水路が開削されていますが、第2水路は幅が狭いところと広いところがあり、水の流れを緩和する働きが見て取れます。また岩盤を削り出した堤ですが、高さが四十cm程と復元されています。単純にこの四十cmで水を溜めるのはなかなか難しく、こ

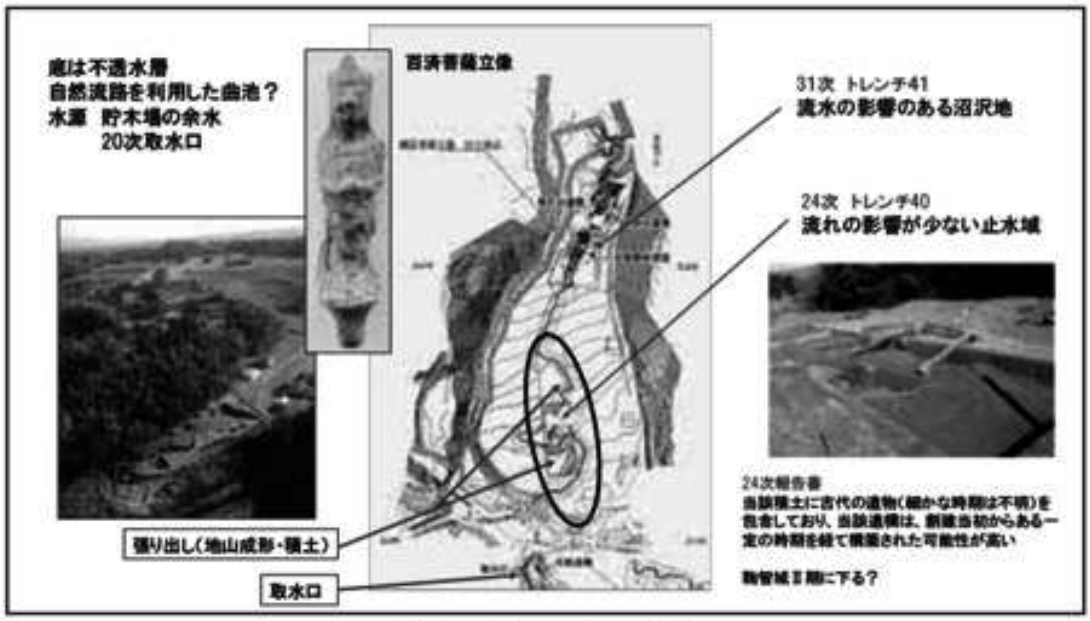



図３　浅い水域―曲池

の堤も水の流れを緩和する働きがあるのかも知れません。そういう意味でこれらの施設を減勢工と呼ぶことにしました。整理すると、この池尻地区の水路は、上流から流れてくる水の勢いを緩和する減勢の装置であると考えることができます。

## 浅い水域

次に、その上流側を検討しましょう（図３）。上流側に行きますと、発掘調査の自然科学分析によって水辺環境が明らかになっています。24次トレンチ40は、流れの影響が少ない止水域で、水が溜っていることは間違いないですね。ただし、それがどういう意味なのかが問題です。そこで注目するのは、張り出している岸の形状です。岸の形状は先ほどの水成粘土の輪郭と一緒ですけれど、報告書によると、地山を削って、その上に盛土し岸の凹凸を造っていると言います。人為的に凹凸を造る理由は

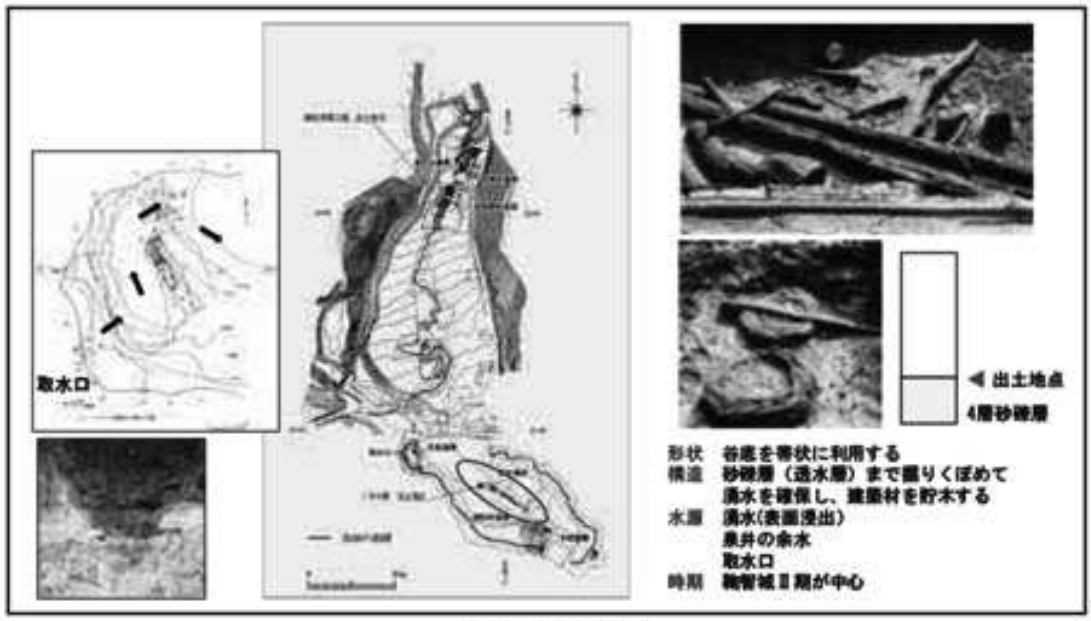



図４　貯木場

何でしょう。これはなかなか難しい問題で、これからの発掘調査に期待していますが、ひょっとしたら浅い水域は岸が人工の凹凸であることを重視して、貯水池ではなく、苑池のような施設ではないかと想像します。

報告書によりますと、この張り出し部分は、盛土の中に古代の遺物が入っています。つまり、この浅い水域は鞠智城が造られた当初のものではなく、少し年代が新しくなるようです。鞠智城の編年では、鞠智城Ⅱ期に相当する可能性が高いものと思います。

池尻の31次トレンチチから百済製の菩薩立像が出ています。ひょっとしたら菩薩立像はこの苑池から流れてきたのではないでしょうか。

## 貯木場

浅い水域の上流で、貯木場が発見されています（図４）。写真にあるように、建築材あるいは紐、榀（こまい）と

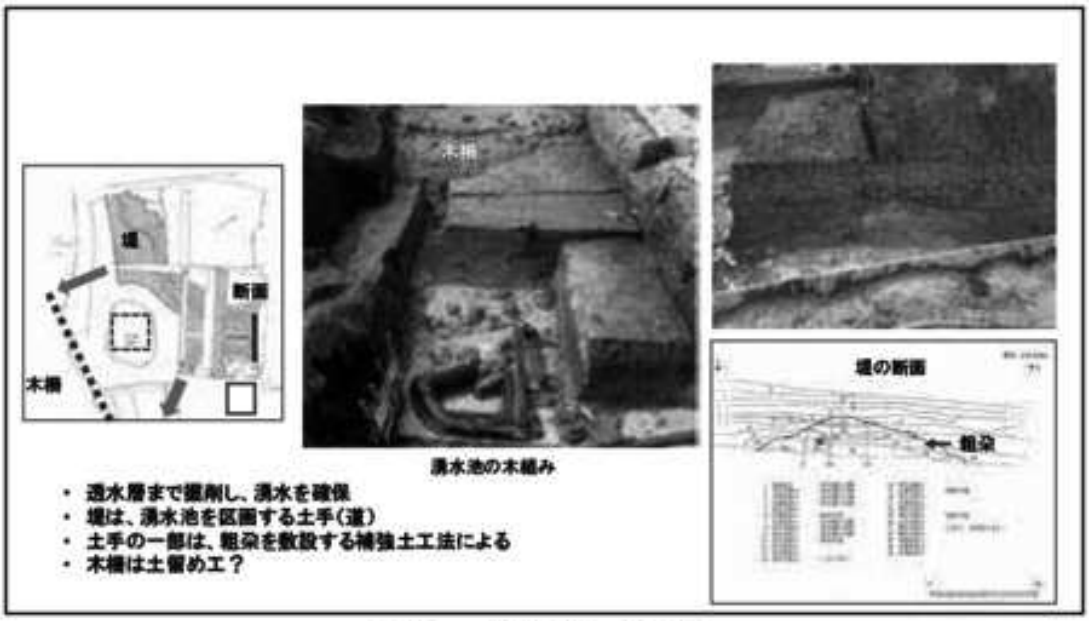



図５　水汲み場（泉井）

いったものが見つかっています。考古学の場合、それがどういう層位から出ているのかを調べます。そこで出土層位を見てゆくと、これらの建築材は砂礫層の上から見つかっていることがわかります。ということは、ここは元々、谷底ですからいろいろな土が堆積しているわけですが、その堆積土を取り除いて、わざと水が出る湧水層まで掘り下げて池底を作っているのです。これまで貯木場の範囲は、水成粘土の輪郭から復元しています。しかし湧水層を確保しようとするならば、貯木場は谷底に帯状に広がっていたと推定できます。

## 泉井　湧水の水汲み場

貯木場の上流で、湧水の水汲み場である泉井（せんせい）が見つかっています（図５）。そこでは、写真のように木組みで、水を汲む場所を囲っています。

この水汲み場を貯水池としていますが、どうも一般の

溜池と雰囲気が違うぞという違和感を持っていました。なぜかと言いますと、谷に堤を造って水を溜める堤は、原則、谷筋に直交して谷筋を締め切る、塞ぎ止めるわけですね。ところが、鞠智城跡の堤は不定形に広がっている。報告書の堤の断面図や平面形から堤が、どの方向に伸びていたのかが推定ができます。結果、矢印をつけた南と西に伸びそうだ、と考えました。実は太線の四角い部分に木組みの水汲み場があります。すぐ近くの点線の四角い部分には、後の時代にも井戸がありました。と言うことは、この辺りは井戸を掘れば水が取れる場所であったと言えます。そうしますと水汲み場の堤は、谷を締め切る堤ではなくて、水を汲む場所に向かう道のような性格であったと解釈することができそうです。

何か所で堤の断面調査をしています。ちょうど図の中で太線を引き断面と注記した箇所では、盛り土の中に粗朶を入れて軟弱地盤を固める工法が確認されています。しかし別の場所では、このような痕跡は見当たらず、粗朶を入れて軟弱地盤を固める工法は限られた場所で使われているのです。

水汲み場の南西には木柵があり、溜池を囲んで管理していたと言われています。私が気になるのは、木柵の位置です。木柵は範囲を限る施設だと考えることもできますが、斜面の途中にあることを思えば、流れ落てくる土砂を留めて、泉井の水が濁るのを防ぐ土留めの役割があるように思います。

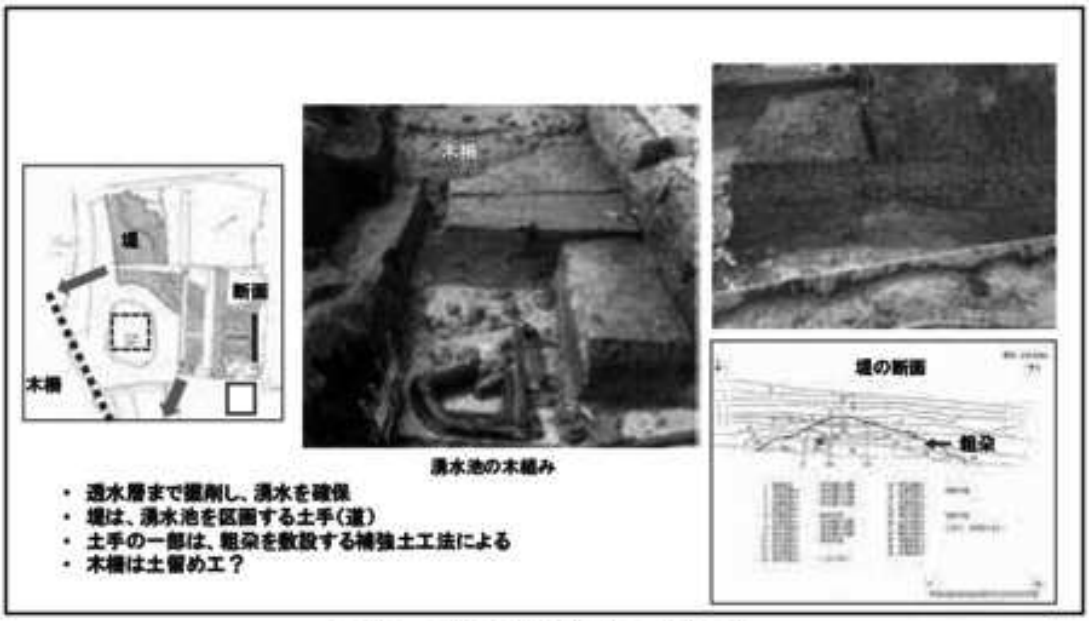



図６　鞠智城貯水池の再検討

## 鞠智城貯水池の再検討

以上のことを踏まえて鞠智城跡の貯水池を再検討しましょう（図６）。

下流側には排水工・減勢工、その上流には浅い水域があります。浅い水域は苑池と考えていますが、岸が人工的に曲がっているので曲池と呼べるものと思います。さらに上流には貯木場があり、一番上流には水汲みの泉井があります。

このように整理すると、谷筋全体を一つの溜池とするよりは、それぞれの地形の特性を活用して、いろいろな施設が造られていると理解できるのではないかと思います。これらの施設はそれぞれに目的や機能があるのですが、大雨が降って時などは、それぞれの施設で谷筋を流れ落ちる洪水の勢いを緩和する働きが、つまり諸施設を階段式に配置することで治水効果を期待したのであろうと思うのです。谷筋の一番下流側には飛渡（とばたり）

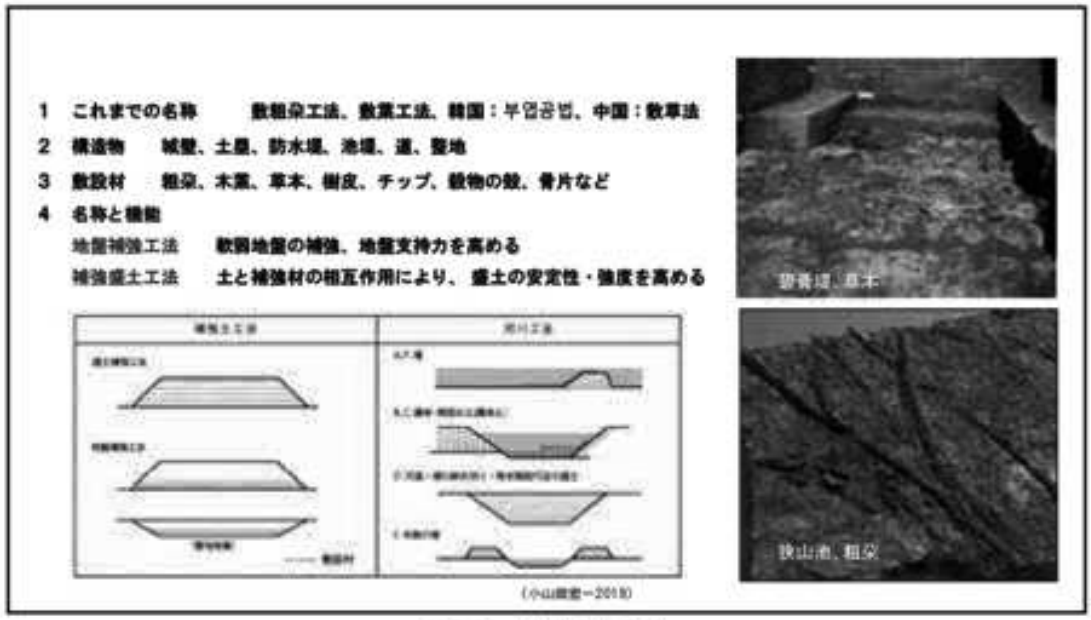



図7　補強土工法

に北門が推定されますが、多分そこを最終ゴールとして治水効果を期待していたと理解できます。

このように階段式に配置された諸施設からは、谷筋全体の治水を意識した空間計画が読み取れると考えています。今後、この空間計画が朝鮮半島ではどうなのかが一つの課題になってきます。そして粗朶を敷設する土木技術がどう関係するのか、ということも気になります。

## 補強土工法

ここで盛り土に粗朶を敷設する工法について、少しご紹介したいと思います（図7）。

粗朶とは木の枝です。盛り土に粗朶などを入れる技術は、昔から注目されてきました。福岡の水城では敷粗朶工法、大阪の狭山池では敷葉工法、中国の有名な溜池である安豊塘では散草法と呼ばれています。狭山池の敷葉工法は、単に木葉だけを敷設しているのではありません。

発掘調査の時に、粗朶の木の葉が非常に緑鮮やかであり、敷葉工法と命名されたと言います。韓国では狭山池の影響をうけて敷葉工法（부엽공법）と呼んでいます。

ところがこの土木技術、発掘例が増えてきますと、粗朶だけではなくて、草本、樹皮、チップ、あるいは穀物の殻、骨片、そして木簡など、じつに様々なものを混ぜて敷設していることが判ってきました。そして敷粗朶工法あるいは敷葉工法といった名称で、これらの工法を総称するのは非常に難しくなってきたわけです。特に韓国は敷葉工法が一般的名称として定着していますが、材料を敷設する層を敷葉層と呼んでいるので、何を敷設しているのか、この表現からはわかりません。また、中国の散草法の草は、アシ・ヨシと呼ばれているものなのか、あるいは柴のような枝なのか、それもよく判りません。

そこで私は地盤工学の補強土工法という名称を使っています。補強土工法は、盛土と地盤の境に敷設材を敷き込み軟弱な地盤を補強する地盤補強工法、そして盛土の中に敷設して盛土を補強する盛土補強工法の二種に分類できます。今回の鞠智城跡貯水池の事例は、敷設層が地盤に近いので、地盤補強工法にあたります。ただし、ややこしいのは、よく似た構造が川の小規模な土手にも見られることで、これを敷粗朶あるいは敷葉工法と呼ぶ人もいます。しかし私は川の土手については、流水の洗堀から盛土を守る河川工法として区別してその技術系譜を調べています。

図８　古代東アジアの補強土工法

## 拡散する補強土工法

図８は、東アジアにおける補強土工法の分布地図です。時代は古代に限っています。一番古いのは、中国の江南地方の良渚文化期、紀元前二千年代に登場します。そして江南から朝鮮半島に伝わります。朝鮮半島には大きく二つの波があります。第一波は紀元前四世紀ぐらいに起こります。この年代は、全羅北道益山にある黄登堤という堤の事例からから判明した年代です。第二波は、四世紀から五世紀ぐらいです。この波は、江南の六朝から百済にやってきます。忠清北道堤川の義林池（溜池）の堤、それから全羅北道金堤の碧骨堤（防潮堤）などに確認できます。これらの施設は古代国家の重要な社会基盤であり、当時の百済が中国に要請して提供を受けた技術で築造されたと推定しています。半島ではこの第二波以降、補強土工法を用いた土構造物が増えてゆきます。

日本列島では五世紀から事例が確認できます。大阪の

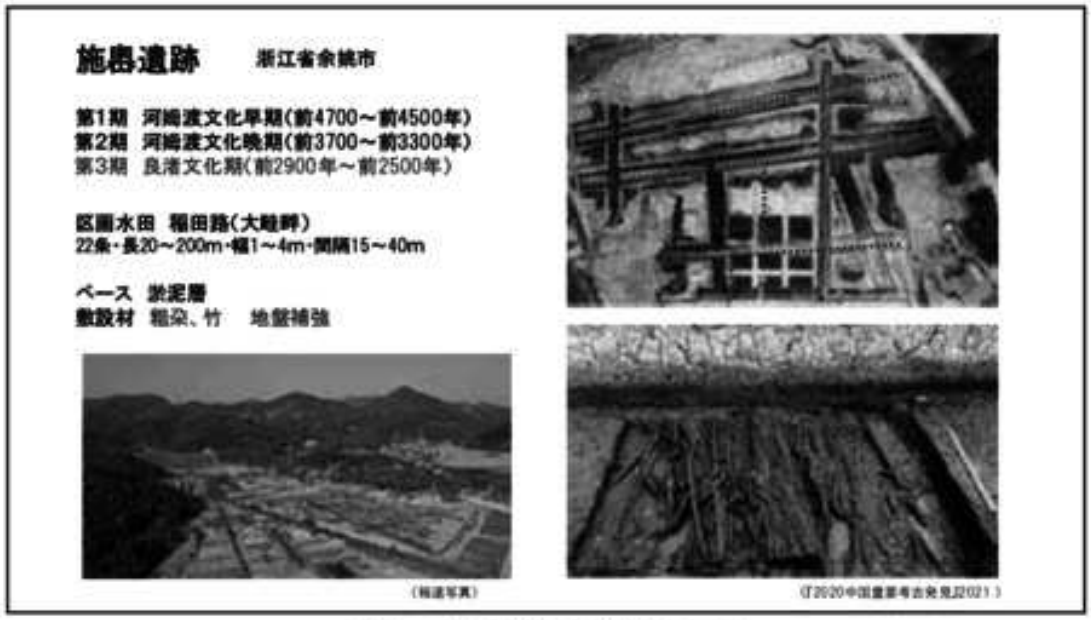



図9　施愚遺跡の補強土工法

亀井遺跡では五世紀の後半から六世紀の初めの堤、それから群馬の三ツ寺遺跡では五世紀の後半の豪族居館で見つかっています。この第一波は類例とか出てくる土器を見れば朝鮮半島の西海岸から南海岸、つまり百済から伽耶が有力な故地になります。七世紀には第二波がおとずれます。その中に鞠智城も入っています。有名なのが福岡の水城で、亡命百済官人が指揮したとすれば百済系土木技術です。六一六年頃に誕生した狭山池も、私は百済系土木技術と考えています。このような土木技術の拡散をみるにつけ、鞠智城の補強土工法の背後にも、東アジアの歴史が広がっていることは確かです。鞠智城は、それだけ重要な遺跡なのです。

## 東アジアの補強土工法

最新情報をご報告していきます。図9は、中国の浙江省余姚市の施愚遺跡の写真です。河姆渡文化期の早期に

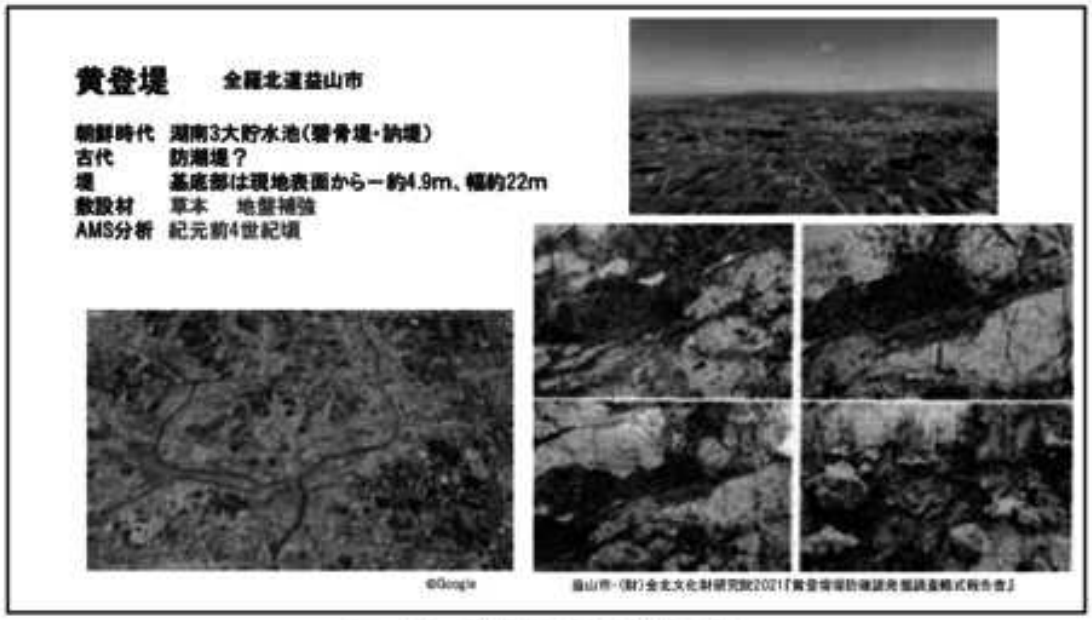



図 10　黄登堤の補強土工法

はじまり、良渚文化期で補強土工法が確認されています。施設遺跡の近くには、河姆渡遺跡や田螺山遺跡などの古代中国の稲作で有名な遺跡があります。

右上の写真の中の点線は、水田を大きく区画する大畦畔です。本来はその中に小区画があったのでしょう。報告では、この大畦畔を稲田路と呼んでいます。この大畦畔では、軟弱地盤の淤泥層の上に粗朶とか竹を敷設して地盤沈下を抑えています。

図10は、韓国の全羅北道益山市の黄登堤の写真です。最近の調査事例です。正式な報告書は出ていませんが、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代は紀元前四世紀なります。私自身もびっくりしています。朝鮮時代の黄登堤は有名な溜池ですが、古代は防潮堤の堤であったと考えています。韓国では、四・五世紀以降になると、百済、新羅で補強土工法の事例が増加してきます。

## 六・七世紀の新羅・百済の補強土工法

新羅で有名なのは、慶尚南道密陽市の旧位良池、慶尚北道尚州市の恭倹池、蔚山広域市の薬泗洞堤防などの溜池で、堤には地盤補強工法が見られます。それから、山城にも補強土工法が見られます。釜山に近い慶尚南道咸安郡の城山山城、それからソウルに近い京畿道利川市の雪峰山城です。これらの山城では、城壁の背後の盛土造成に補強土工法が見られます。

百済で有名なのは、忠清南道扶余にある扶余羅城で、扶余を取り囲む羅城の土塁に補強土工法が使われています。羅城の東門付近は土塁で丘陵間の低地を結びます。雰囲気が水城に似ています。水城の場合は、亡命百済官人が大野城などと一連の土木工事で造ったとすれば、百済系の要素が非常に高いと思います。実は岡山の鬼ノ城の麓には小水城のような土手があります。その土手も粗朶を敷設しています。今後注目していきたいと思っています。

## 新羅山城谷筋の利水と治水の空間計画

先ほど谷筋の空間画の話をしました。図11は、ソウルのすぐ南側、京畿道安城市にある竹州山城という山城の図面です。竹州山城は、上流から下流に向かって石組みで囲んだ貯水池が並んでいます。これらの貯水池は、単に水を溜めるだけではなく、順番に水を落としていくことで水を浄化する浄水施設で、砂を沈める沈砂池あるいは沈殿池と呼んでもよろしいと思います。このように階段式に配置

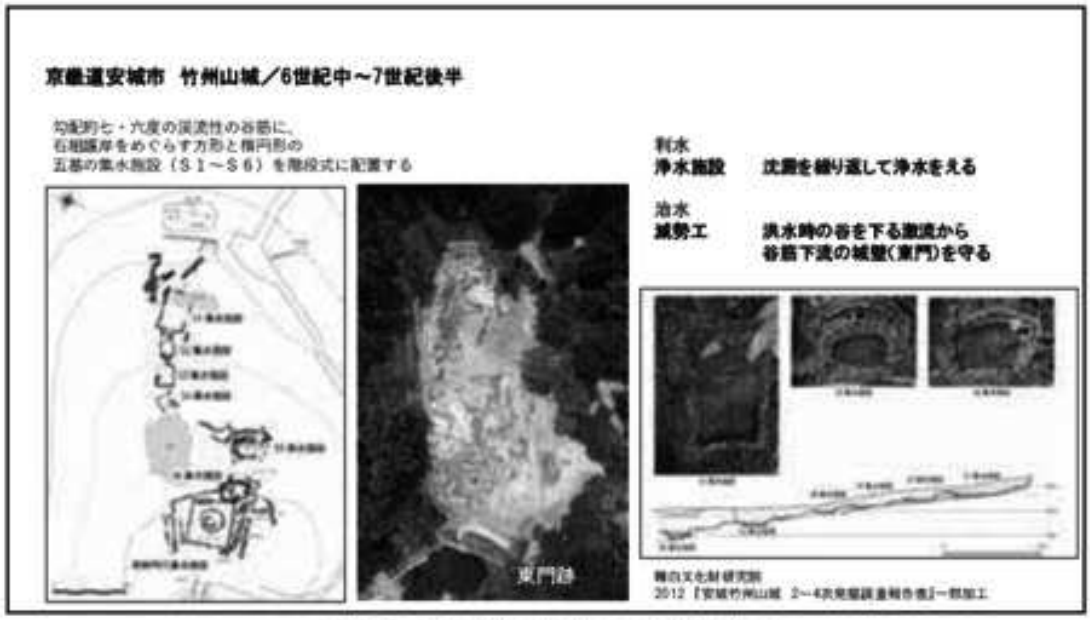



図 11　新羅山城谷筋の空間計画

した沈砂池には、大雨時の洪水を緩和する減勢工の役割があり、貯水池の下流になる東門付近を守っているものと思います。鞠智城の谷筋の構造も、このような空間計画に関係するものと思います。

全赫基先生は、韓国の集水施設と鞠智城の貯水池を比較して（全赫基「韓国の古代山城の集水施設からみた鞠智城の研究課題」『鞠智城と古代社会』）、平壌の平壌大城（大聖）山城にも類似した構造を読み取っています。平壌大城（大聖）山城の一番東の谷筋には、多くの溜池が集まっています。全赫基先生は、これらの溜池にも治水効果があると考えています。私はそれに加えて、南門上流の二股にわかれる谷筋にある溜池（美川湖・東川湖）の治水効果を重視したいと思います。この溜池は公園化の段階で復元されているようですが、元から水を蓄えていたものと推定しています。このような平壌の山城をみるにつけ、新羅にしても百済にしても、やはり高句麗か

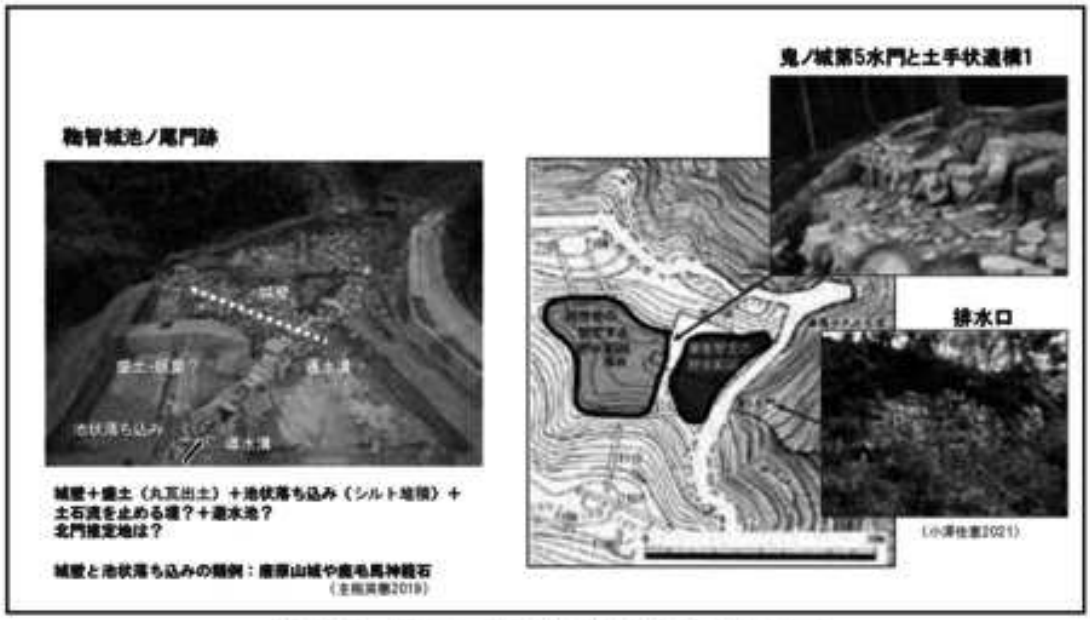



図 12　倭国古代山城水門付近の治水工

らの影響が大きく、谷筋の空間計画についても高句麗からの流れで理解できそうです。

## 倭国古代山城水門付近の治水工

ここで鞠智城の池ノ尾門跡を取り上げます（図12）。鞠智城の池ノ尾門は、谷を塞ぐ城壁が走ります。その手前には蓋をした通水溝、さらにその手前には露出した導水溝があります。これらの施設によって城内の水は城壁を通り抜けて城外へ排出されます。実はこの城壁の手前に盛土遺構があります。それほど高くないかもしれませんが、版築状と報告されているので、しっかりと丈夫に造っているようです。

この盛土遺構から、城壁の手前側には盛土の帯があったと復元できます。そして、その手前に池状落ち込みがあるわけですね。この池状落ち込みは、礫とかの堆積がなく、微細なシルトが溜っているのが特徴です。

ここは谷筋なので上流から水が流れてくれば、当然、礫とか石とかも混じってきます。それがここに溜っていないっていうことは、上流側で堰き止められている可能性が大きい、つまり池状落ち込みの上流側には、土石流を堰き止める堤があった想像します。その堤で砂礫は堰き止められ、流れが緩和され水だけが下流に流れてきた結果、シルトが溜まったと復元してもいいのかなと思います。

類似したものが岡山の鬼ノ城にあります。ここは私も現地を訪問し、この第5水門の上流側の土手状遺構をじっくりと調べました。報告では、この土手状遺構の裏側には水を貯める貯水池を復元しています。また、小澤佳憲さんは、第5水門の排水口は結構高い位置にあり、この高さまで水を溜めないと水を出せないということで、土手状遺構と城壁との間に貯水池を想定しています（小澤佳憲「山城で水をつかう―古代山城の水資源―」『大宰府史跡指定100年と研究の歩み』）。この二つの指摘について、すぐには結論を出すことはできませんが、両者の考えで共通するのは、土手に砂防の役割があると考えていることです。池ノ尾門跡のある谷筋についても、砂防ダムのような堤が土砂を止めていた可能性が出てまいります。

韓国の城山山城と雪峰山城はどうでしょうか（図13）。城山山城は城壁の背後に盛土があって、そこに補強の盛土工法があるわけです。雪峰山城も城壁を保護する盛土が見られます。城山山城の方ですけれども、航空写真を見ますと東門付近の城壁がこれに相当します。この城壁には、外側に断面三角形の石積み、新羅の山城に特有な外護の補強の石積みがあります。この内側に盛土があって、ここ

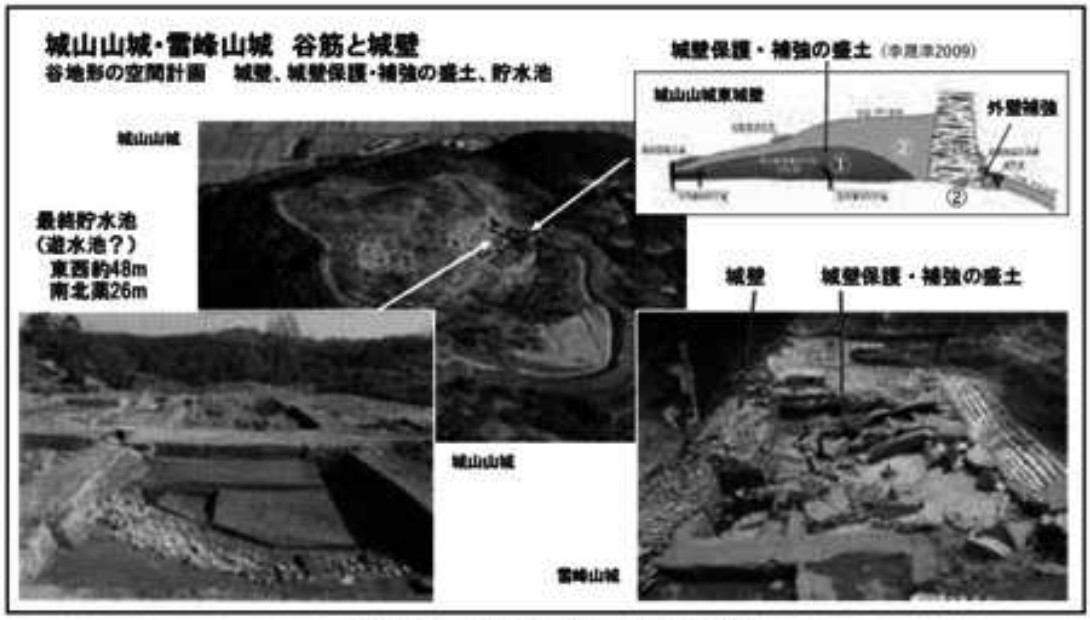



図13　城山山城と雪峰山城

から大量の木簡が見つかっています。その木簡は、山城を造るにあたり新羅の領域から運ばれた物資についていた荷札が出ております。この盛り土の背後には、貯水池と呼ばれている窪みがあります。大きさは、東西約四十八m、南北約二十六mです。ただし、朝鮮半島の山城の貯水池でこんなに大きいものはありません。私は第一の目的は、洪水を溜める遊水地ではないかと考えております。

## おわりに

これまで貯水池と復元されていた谷筋の資料を見てきました。この谷筋自体を大きな貯水池と考えることも可能だとは思いますが、それぞれの施設を分析して、地形環境に応じて造られた施設のその集合体が貯水池と呼ばれている範囲であると考えたいと思っています。例えば、上流では湧水層まで掘っていますので、湧き水を利用す

る泉井と貯木場が造られる。下流では粘土で流れを止めています。透水層を底にしているので、水を溜めていたわけです。この水域は曲池になると考えていますが、平城の左京三条二坊の庭園はその参考例になります。この庭園は、長屋王邸のすぐ南側の方にあり、写真のようにくねくねと曲がっています。

曲池の造られた時期が、鞠智城跡Ⅱ期だとすれば場内整備が進んだ時期にあたります。また国内そして国外から訪問者が増えてきます。曲池は、そういう人たちをもてなす饗応の池になるのかも知れません。韓国では、百済の池は基本的に四角、新羅は慶州の雁鴨池のように岸が曲がっています。この特徴からみると曲池は新羅系になるでしょう。しかし曲池の情報が中央政権から伝わったのか、あるいは新羅から直接伝わったのか、あるいは新羅情報を選択したのか、このあたりの問題は非常に微妙で、これだと断定する証拠はありませんが、鞠智城跡Ⅱ期に出現する八角形の鼓楼は、参考になるかも知れません。つまり八角形の建物が新羅系だとすれば、この曲池の造形も新羅からもたらされたという可能性が出てきます。空間計画については高句麗、新羅の山城とよく似ています。

これまで駆け足で鞠智城の谷筋の開発の考え方、そして空間の計画について、検討してきました。そこには半島三国時代の各種情報が見られます。各種情報の整理から得られた土木技術の系譜が、当時の国際関係にどのようにかかわっているのか、これからの課題です。

これで話を終わります、ご清聴ありがとうございました。

おもな参考文献（鞠智城の報告書は割愛）
小澤佳憲「山城で水をつかう―古代山城の水資源―」『大宰府史跡指定100年と研究の歩み』（二〇二一年）九州国立博物館・福岡県立アジア文化交流センター
小山田宏一「古代日韓補強土工法の俯瞰的整理」『纒向学研究』六（二〇一八年）桜井市纒向学研究センター
全 赫基「韓国の古代山城の集水施設からみた鞠智城の研究課題」『鞠智城と古代社会』十（二〇二一年）熊本県教育委員会
主税英徳「日韓古代山城の水門構造からみた鞠智城」『鞠智城と古代社会』七（二〇一九年）熊本県教育委員会
西住欣一郎「鞠智城跡貯水池跡について」『鞠智城跡Ⅱ』論考編一（二〇一四年）熊本県教育委員会
矢野祐介「鞠智城の築造―貯水池・土塁を中心に―」『季刊考古学』一三六（二〇一六年）雄山閣
李 晟準（土田純子 訳）「咸安城山山城発掘調査の意義―韓国最大木簡出土遺跡の研究―」『大阪府立狭山池博物館研究報告』六（二〇〇九年）大阪府立狭山池博物館
『安城竹州山城 2～4次発掘調査報告書』（二〇一二年）（財）韓白文化財研究院

『咸安城山山城Ⅲ』（二〇〇六年）国立昌原文化財研究所
『利川雪峯山城 4・5・6次 發掘調査報告書』（二〇〇六年）檀国大学校埋蔵文化財研究所

# 報告③　古代建築と渡来系技術

講演者紹介

海野　聡（うんの　さとし）

東京大学工学部建築学科卒業。東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程中退。（独）国立文化財機構奈良文化財研究所を経て、現在、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻准教授。専門は日本建築史・文化財保存。博士（工学）。

# 「古代建築と渡来系技術」

東京大学大学院工学系研究科 准教授　海野　聡

## はじめに

皆さんこんにちは。私は、東京大学の建築学専攻で建築の歴史を専門としている海野と申します。今日は鞠智城が具体的にどういうものかというよりも、古代建築と渡来系技術との関係性を中心にお話をいたします。七世紀から八世紀にかけて渡来系の技術がどのように古代建築に見られるのか、あるいは現存建築で分かること、それだけでは分からないものを現在どのように研究しているのか、そういったところへのフォーカスから入りつつ最終的に鞠智城の話をしていきたいと思います。

世界的に見て日本というのは非常に古い現存建築の多い地域です。特に、八世紀以前の建物が二十棟以上残っているというのは非常に珍しいことです。恵まれた地域であり、研究資料にも恵まれている

ということは確かなのです。けれども、残っている奈良時代の建物は基本的に奈良にしかないのですね。ということは、その当時の普遍的なもの、全国各地の一般的なものを示した状況では決してないわけです。このような資料的な制約というのが多い中で建築史の研究というのは進んできているわけです。

一方で東アジアについて見ると、実は中国には日本以上に古いものは残っていません。木造建築でいうと、日本では世界最古の法隆寺というのがよく知られておりますけれども、中国には八世紀後半の南禅寺大殿が残っています。唐の時代に下っても四棟程度であり、非常に限られてきます。天台庵はかつて唐代の建築かと言われていたのですが、最近の研究では少し時代が下って五代と言われています。さらに、仏光寺大殿は比較的、大規模ですけれども、それ以外の建物はそれほど大きなものではないので、当時の中心的な建物を示しているわけではありません。ロケーションも、いわゆる長安・洛陽などのかつての中国の中心地ではなく、基本的に山西省ですとか河北省でも少し外れた、ローカルなエリアに残っているのです。こういった状況の中で、なかなか中国の方でもその時代時代の最先端技術とはどういうものかというのを研究するのは難しい状況なのです。ただし、それを補完するものとして、磚積塔の一部に描かれた線刻画や墓の壁画、磚積みの塔、あるいは木造建築を模した石窟といったものがたくさん残っております。こういったものを絡めながら研究が進んでいるというのが現状です。

こういった限られた状況の中で渡来系の建築技術というのはどのように日本に入ってきているのかというところについて、計画やプランニングといった、設計のレベルで考えるものと、実際に個別箇所の加工の最終調整をする、手元でやるような仕事といったところで考えるものに、大きく分ける必要があると建築史の分野では捉えています。

## 一　建築の設計・技術と技術者・統率者

### 建築の設計と技術

建築あるいは文化財建造物の保存の分野では、技術と技能と言葉を使い分けたりします。これは建築の工程とも関わりがあります。現在の建築の工程、あるいは建築の教育を受けていると、作っていくプロセスをある程度理解し、その順序を考えます。けれども、はい造りましょうといって造れるわけではなくて、やはり「これを造りましょう」という声上げをするというのが最初にあって、その次に場所を決める選地が行われます。そして具体的な建築の設計という行為が起こってくる。では、設計したらすぐ施工できるかというと、そもそもの労働力や材料を確保しなくてはいけない。さらに遡って言えば、建築にたずさわる者たちが、基本的に農業なり生産的なところに従事しなくても済むような安定的な社会が必要です。今であれば社会的な体制が整っておりますので、ある程度資金を用意し、入札、といった具合にプロセスが進みますが、古代の建築の造営でも、こういったところまで

考えが広がっていくわけです。

今日の話は建築の設計を中心に話をしていきたいと思います。現代は比較的大量生産がなされていますけれども、基本的に前近代の建築は個別の設計が基本になります。個別の設計に応じて、必要な材木の量や作業に関わる労働力を算出していく事務的な作業もセットで動いていくわけです。さらに言えば、これらの木材等に関しても、運搬経路やインフラ整備まで必要になってきます。これらのもろもろが設計から施工にかかるまでにまず必要になってきます。施工に関して言えば、実際に設計あるいは工事をいわゆる現場監督のような立場として全体を統括しながら見る技術的な存在と、一方、手元でやる技能者の両者が両輪となって動いています。こういったところが建築のプロセスとして必要になってくるわけです。

## 技術伝播

この技術伝播のプロセスを見ていくと、中国あるいは朝鮮半島など大陸で造っていた建築を「では日本でも造りましょう」といった時に、建物そのものをすぐに持ってくることができるかというと、なかなかそれは難しいわけです。これは美術史の方とお話すると、仏像等であれば向こうからも持ってくるというのはよくあったりするのですが、建築を持ってきた例は江戸時代建立の長崎の崇福寺第一峰門がありますが、基本的にはありません。基本的には海を越えて建物を持ってくることは難しい

という中で、どのように技術を移転させるか。こういったところが課題になってきます。

一つの方法としてはデフォルメがあります。要は紙ですとか、あるいは模型ですか、こういった持ち運べるような形に建築を情報化する方法。そしてもう一つが、技術を持った人が移ってくる方法、という二つがあります。こういったところが基本的に大きな流れなのですけれども、この技術伝播というところにおいても「そのままコピーをしましょう」という今のコピー機のようなものかというと決してそうではありません。受容する段階で、例えば、デフォルメをした場合には情報が失われてしまいます。また、誤読や情報の取捨選択があります。意図的に取捨選択する場合もあります。こうしたプロセスを経て技術伝播がなされています。限られた情報の中で技術伝播がなされて、渡来系の技術というのが日本列島に渡ってきているという前提としてあるわけです。

もう一つ、奈良時代に入ると、比較的建築の技術や形が画一化されてきます。平安時代以降にも継続し、地方でも画一化が進みます。その背景には、奈良時代になると官が組織立って技術者を掌握・統括するようになるからです。木工寮から各現場に技術者を派遣して、短期的に大規模な宮殿や寺院を造ってきました。こうしたシステムが出来上がってくると比較的、建築の技術や形も統一化されてくるのでしょうが、それ以前の七世紀には、状況が異なります。これが今日の話のバックグラウンドになります。

### 渡来系技術者と統率者

渡来系技術者の統率者について、最初期の寺院を例に見てみます。飛鳥寺は最初期の寺院として知られています。飛鳥寺が造られた頃には、百済から寺工や鑪盤博士、瓦博士などが送られてきました。技術者は朝鮮半島経由で日本に来たのです。古代山城に関しても、朝鮮半島の系譜の人がやってきていますが、中国系では、八世紀段階の怡土城などでは、唐から帰国した吉備真備など、中国からの系譜が語られます。

## 二　全体計画にみる大陸からの影響

### 飛鳥時代の伽藍配置

さて、技術と技能について飛鳥時代の伽藍配置という全体計画から見ていきたいと思います。

伽藍配置というのは、寺院の中の建物配置のことです。古代の飛鳥、奈良時代の寺院の伽藍配置では、塔と金堂という二つの建物を中心に見ます。金堂は寺院の本尊を祀る最重要建物の一つです。そしてもう一つ、塔が古代寺院では非常に重要です。三重塔や五重塔といった塔は、もともとインドでストゥーパと言われ、仏舎利を納めた施設で、精神的に非常に重要な建物です。そのため飛鳥寺では伽藍の真ん中にあり、塔を取り囲むように三金堂が置かれ、四天王寺では伽藍の中軸線上に塔と金堂が置かれています。いっぽう法隆寺西院伽藍では、現存する五重塔と金堂を併置していますが、やは

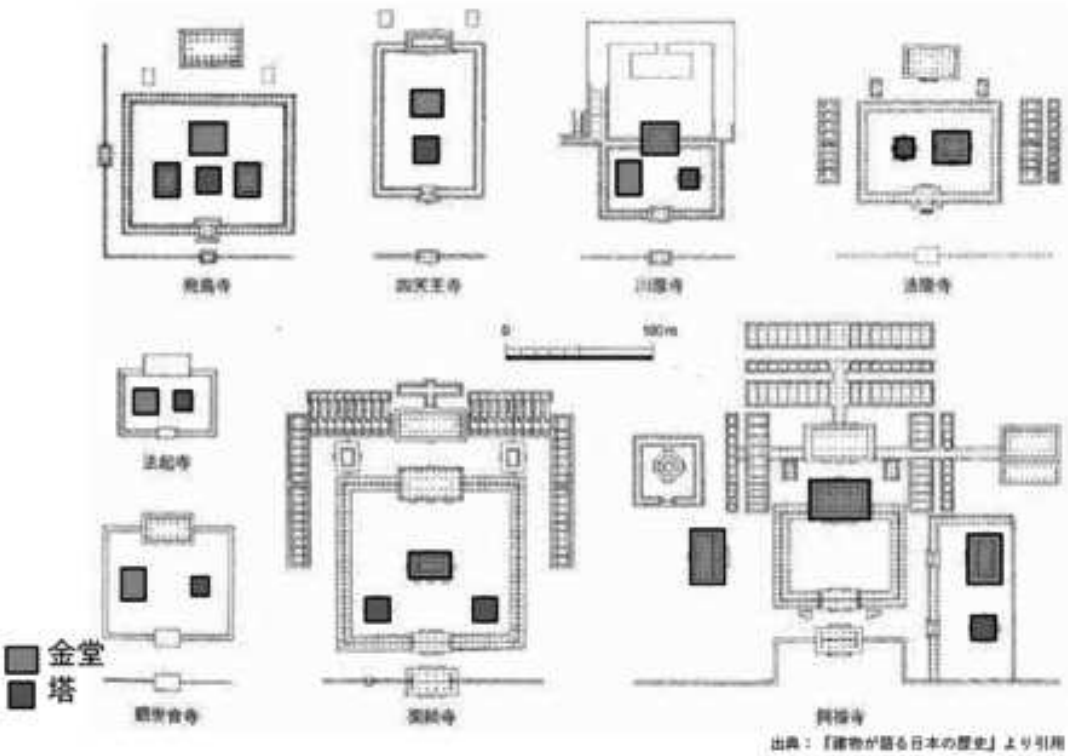
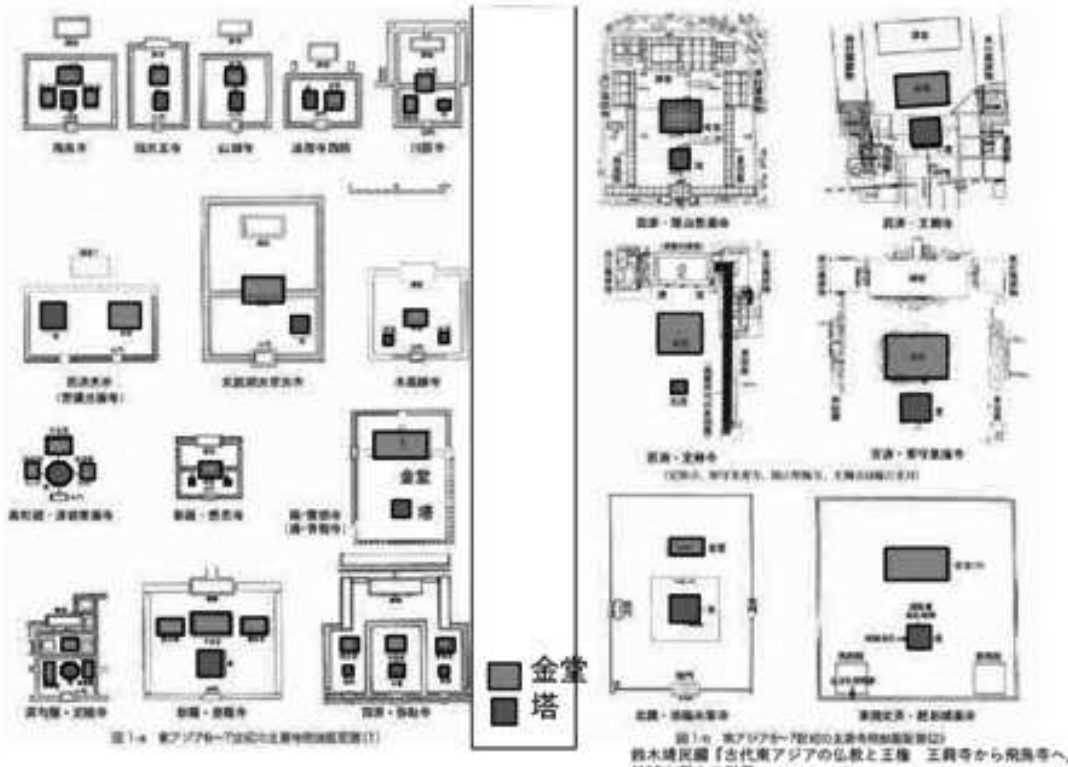



図1　飛鳥時代の伽藍配置

り中枢部にあります。

飛鳥時代の寺院はこれらの伽藍配置が知られていますが、大きな画期となるのが薬師寺です。平城京の薬師寺の伽藍配置を見ると、二つの塔を並べています。それ以前にも金堂が複数あるものもありますけれども、塔は一つです。この薬師寺のような形式を「双塔式」、二つの塔と言いますが、これが七世紀後半の東アジアの中でも非常に大きな変化なのです。

ちなみに八世紀以降には塔は伽藍の中心の金堂周辺から外れてきます。これは伽藍の中心にある金堂の前の広場で儀式をするようになると塔が邪魔になってくる、という事情があり、塔が金堂周辺から別のところに移るわけです。さらに時代が下って東大寺などにな




鈴木靖民編『古代東アジアの仏教と王権　王興寺から飛鳥寺へ』
勉誠出版より引用

図2　飛鳥時代の寺院と東アジア

ると、塔の周りに回廊を回して一角を別個に造る、と変化していきます。

とはいえ、飛鳥時代の伽藍配置に関しては、この二つの塔の存在が一つの重要な変化になります。

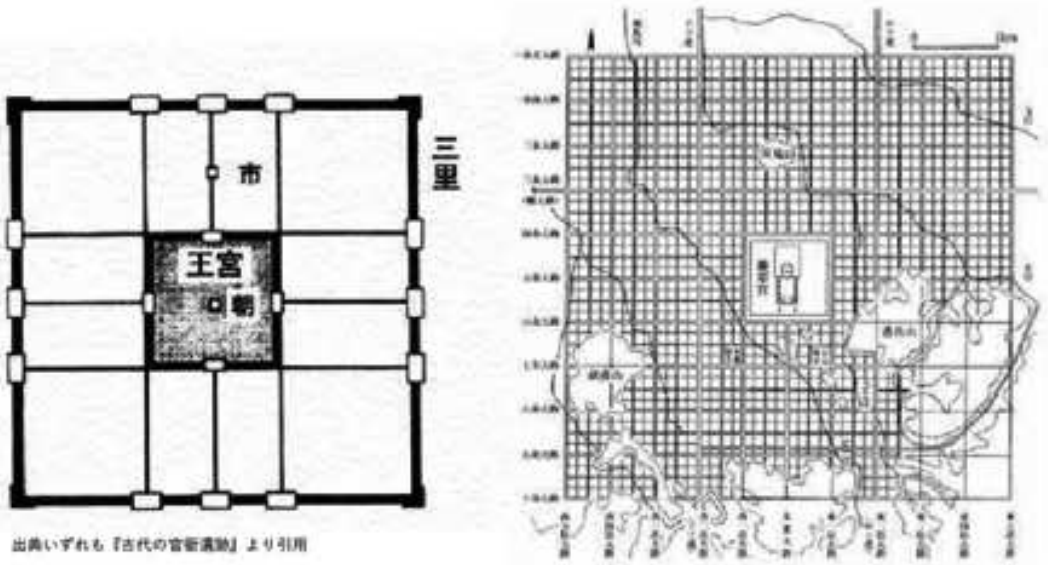
## 飛鳥時代の寺院と東アジア

では東アジアの伽藍配置を見てみましょう。朝鮮半島の寺院を見ると、軸線を通して塔の背後に金堂を置く形が多く見られます（図2）。ちなみに高句麗には中央に八角形平面の塔があってその三面を金堂が囲む伽藍もあり、同じ朝鮮半島でも幾つか違いがあります。この関係では双塔が並ぶ伽藍として新羅の感恩寺が、一つの例としてあげられます。現存する薬師寺東塔は平城京にありますが、

藤原京の時代にも薬師寺が造られており、これを本薬師寺と呼んでいます。この本薬師寺には塔跡が残っており、ここも平城京の薬師寺と同じように双塔があったと分かっています。この双塔と東アジアの関係について少しお話をしていきたいと思います（図1）。

まず四天王寺の伽藍では、塔の後ろに金堂を置く形式をとっています。けれども、朝鮮半島の伽藍配置を見ると、弥勒寺では塔が三つ並び、その後ろに仏堂が並ぶ形です。定林寺でも同じような形が確認されていて、この辺りに東アジアと日本の伽藍配置における影響関係がうかがえます。

そして日本における渡来系の技術という点では、東アジアの関係性が重要になってきます。七世紀後半には、百済が滅亡し、その遺民が倭国にやってきます。その一方で、唐や新羅と緊張関係にある中で、大陸の情報がどのようにもたらされるのか、も課題となってきます。先ほどの双塔式伽藍で言うと、その系譜が必ずしも明確ではありませんが、本薬師寺のような双塔の形式が新羅の慶州の寺院に見られています。この点を踏まえると、本薬師寺が建てられた六八〇年前後には、新羅は唐と戦争を行っていて、倭国とも緊張関係にあり、公的な情報交流は活発ではありません。こういった状況の中で、倭国は双塔のような情報を大陸、朝鮮半島などから情報入手していたわけです。このような関係性をみれば、国と国との公的な表のつながりとは別に、大陸とのつながりも想定しなくてはいけないわけです。さらに、この情報伝達のスピードの速さというのは、大陸からの情報入手のためのつながりの結果とも見えてきます。




出典いずれも『古代の宮都遺跡』より引用

図3　周礼考工記（左）と大藤原京説（右）

## 藤原京と周礼考工記

さて、一方でこの時代の都はどうでしょうか。藤原京の都の形は、平城京や平安京のように一番北側に宮殿を置く北闕型のスタイルとは異なる形です。多くのご年配の皆さんと同じで、私も学生時代には藤原京も北側に宮殿があると習いました。しかし、現在では発掘調査などを根拠として藤原宮が藤原京の真ん中にあったとする大藤原京説というのが考えられています（図3）。七世紀後半の長安は北闕型でしたから、最新の都の形ではないのですが、この背景には七世紀後半には唐との交流が希薄という点があります。藤原京の都の真ん中に宮殿を置くスタイルは、古い資料である周礼考工記と似ていると言われます。ここでは真ん中に王宮を置き、その四周を囲む形を理想の都の形としており、これが藤原京の形と類似しています。

つまり先ほどの話とは逆になりますが、宮殿や都城に関しては大陸の最先端の情報をきちんと入手できていなかっ

たのではないかということがうかがえるわけです。これは遣唐使が送られて以降の平城京では一番北側に宮殿を置く北闕型のスタイルに切り替わっていることと比べて対照的です。この藤原京は、短命でしたが、中国の中でも古い都の形をとっていることになります。一方で双塔式の伽藍配置の情報は大陸からちゃんと入ってきています。ここからも、この時期には技術伝播において、入ってきている情報と入ってきていない情報が混在するという状況を理解しておく必要があるわけです。

## 三　七世紀の多様な技術と技術伝播のルート

### 古式な法隆寺の特徴

次に、この七世紀の多様な技術や伝播のルートは実際にどんなものなのか、というところについて話を移していきたいと思います。

ここで対象となるのは、やはり七世紀後半に建てられた法隆寺です。法隆寺には、飛鳥時代の金堂や五重塔、大講堂といった建築を中心とする西院伽藍の一角と、夢殿などを中心に構成される東院伽藍という一角があります。今日のテーマの時代に深く関わるのは西院伽藍の方ですが、法隆寺には実は中近世の建築等を含めて国宝、重要文化財が約四十棟と非常に集まっている寺院でもあります。

この法隆寺金堂が、七世紀後半に建てられましたことは先にも話しましたが、聖徳太子が建てたと言われることが多いかと思います。しかし、現存する金堂に関しては、一回焼失をした後に再建をさ

れた六七〇年以降の七世紀後半に建てられたものと考えられています。

## 金堂の建築的特徴

さて、法隆寺金堂が七世紀後半の最先端の建築だったのか、まずはこの点を問う必要があります。例えば、二〇二二年の建設の建築だからといって、時代の最先端の建築とは限りません。それは法隆寺も同じです。例えば七世紀後半には本薬師寺のような東アジアの最新の情報を含むものが建てられています。それに対して法隆寺金堂は、細部を見ていくと、どう見ても、七世紀後半よりも古式な形がたくさん含まれていることが判っています。戦前から朝鮮半島の高句麗壁画なども用いた比較や議論がされています。例えば、雲斗、雲肘木と言われる特殊な組物形式は、その後の奈良時代以降の建築では基本的には用いられません。また、高欄に入る卍崩しやその下の人字栱も基本的に日本の建築では用いられません。この人字栱に関して言うと、中国の唐では人字栱が非常に多く用いられています。それに対して、日本では人字栱という形はあまり好まれなかったようで、ほとんど用いられていません。このように、受容する日本の側で明らかな選択をして、使わない、という判断がなされているのです。ちなみに金堂上層の隅に立っている龍の彫刻の柱は、当初のものではなく、江戸時代の工匠が補強で加えたものです。つまり、必ずしも現在、見えている建築の姿が建築当初の姿そのままではないということも踏まえなくてはいけないのです。

さらに細かいところを見ていくと、大斗の下部に皿斗が付いています。大斗という大きな組物の部材の下に盤のように皿斗が付いているのですが、これも後の時代になると基本的には使われない技法です（もっとも、中世になると大仏様が入ってきて、再び付くのですが）。やはり少し古い時代に用いられた技術と言えるでしょう。つまり法隆寺金堂には、その当時の最先端ではないもの、少し前の時代のものがまだ受け継がれているのです。逆に言えば、その後の時代に、取捨選択の中で使われなくなってくる技術がこの法隆寺の建築には見えるわけです。

## 金堂の意匠

技術の関係性から金堂の意匠を見ていくと、法隆寺の建築は中国や朝鮮半島のどこかオリジナルのものがあり、それをそのままコピーのように持ちこんだとは考えにくいわけです。例えば、中国でも北斉や隋といった古い時代、あるいは朝鮮半島でも百済あるいは高句麗も含めて、色々な地域からの情報が集まって入ってきているようです。こうした東アジアレベルでの技術伝播の様相がこの法隆寺一つをとっても見えるわけです。

すなわち、どこか一つの法隆寺の建築の根源を求めて、そこから、そのまま持ってきた、という単純な話では決してないのです。あちらこちらから、部分部分を摂取してきて、それらをミックスしてできているのが法隆寺金堂、とも言えるわけです。

七世紀後半という時期には、本薬師寺や川原寺など、少し時代が下ってくると大官大寺など、先進的な寺院建築の技術や情報も入ってきています。けれども法隆寺では先進的ではなくて、もう少し古式なものを使っているわけです。これは日本建築全体を通してですが、すべての寺院が技術革新の最先端を追うということでは決してなく、前身を規範としてそれを継承することに意義を見出すことがあります。興福寺はその典型ですが、前の時代のものや形式であっても、それを尊重し続ける行為も見られるのです。もし、当時のすべての建築が残っていたとしても、それぞれで取捨選択がどうなされているのか、それが時代の先端の建築なのか、対象をピックアップする必要があるという課題があるわけです。

## 山田寺の発掘調査と金堂の特殊な柱配置

現存建築は法隆寺のみですが、同様の情報を持つものに山田寺の発掘調査の例があります。少し建築の細かい話になりますが、基本的に日本の古代建築では外周の柱が長方形に並んで建物が造られています。この身舎という部分が基本になります。この建物の奥行きを大きくするにはどうしたらいいか、というのが中世ぐらいまで長年の課題として、日本建築は発展してきます。その一つの方法として、外側に廂という差し掛けを付け加えて奥行きを増やす方法がとられます。例えば、正面側に廂をつけてあげれば面積が少し増え、背面側にもつければ二面廂という形になります。さらに増

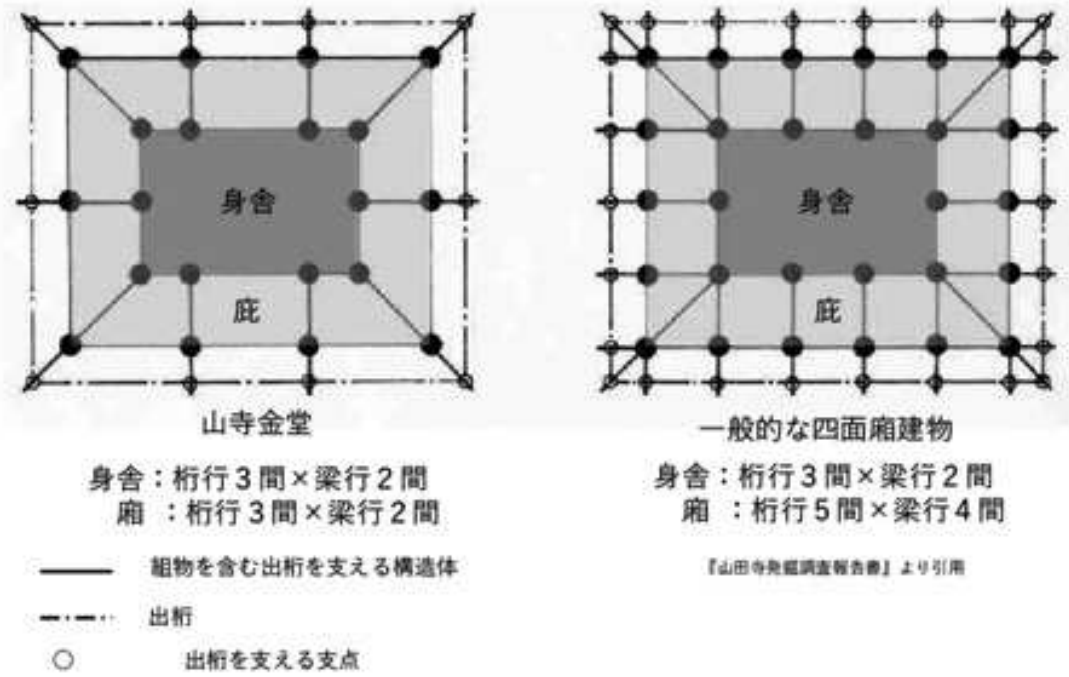



図４　山田寺金堂の特殊な柱配置

やして、三面、あるいは一番大きい形の四面廂と拡大していきます。このような方法で、本体（身舎）に廂を付加する形で、建物を大きくしていきました。ここでは身舎の梁という部分がキーポイントになります。例えば、ホールや体育館のような大空間に梁を掛けるには、大きな梁が必要になります。これは経済的にも技術的にも非常に大変なわけです。それに対して、廂をつけるのであれば、外周にさらに柱を立てれば簡単です。このように平面的に建物を大きくする形では、柱の筋が基本的に揃ってきます。

これに対して山田寺金堂は、特殊な柱配置となります。

一般的な四面廂建物の柱配置とは異なり、山田寺の場合には放射状に柱配置という特殊な形をとっています（図４）。これは上部構造とも関係するので

出典：『建物が語る日本の歴史』より引用　　出典：『発掘遺構から読み解く古代建築』より引用

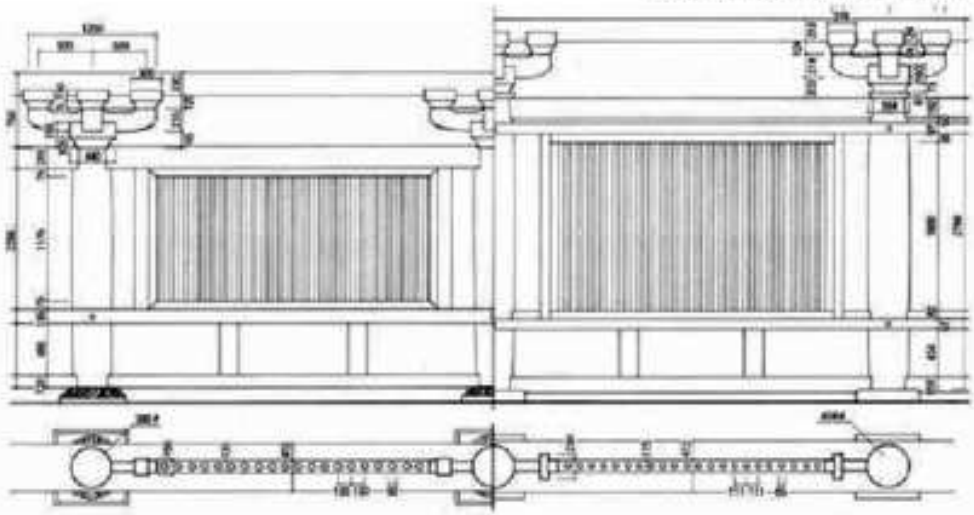
図５　山田寺東面回廊の出土建築部材

すが、屋根の斜めの方向を用いる隅木を支えるため、組物の部分も同じように斜めに出す必要がある、そのため柱配置も放射状にしなくてはならない、という方法と考えられています。この山田寺金堂の柱配置は、法隆寺金堂や唐招提寺金堂などの古代の現存建築を見ても存在しない特殊な形です。やはり、この柱配置を見ても、画一的に入ってきた、あるいは画一化された八世紀以降の建築とはちょっと違う建築技術がありそうだ、ということが山田寺の柱配置から見て取れるわけです。

## 山田寺の出土部材と七世紀の建築技術

山田寺にはもう一つの特徴があります。発掘調査で見つかった金堂も重要ですが、第六次発掘調査で地下から建築部材が出てきた東面回廊が非常に重要です（図５）。出土した建築部材は、再度組み上げられるほど精度の高いもので、現存建築と同じぐらいに豊かな建築情報をもっていま

出典：『山田寺発掘調査報告書』より引用



・胴張りのある柱
・大斗を皿斗としない
・肘木に笹繰をもつ（舌あり）
・垂木は丸断面で反りのある一軒
・藁座を用いて扉を吊る。地覆石に軸穴を穿つ
・頭貫を欠き込んで大斗をのせる

・胴張りのある柱
・大斗は皿板が付いて皿斗とする
・肘木に笹繰をもつ（舌なし、金堂あり）
・垂木は角断面で反りのない一軒
・扉を吊る部材は長押
・頭貫の上辺は柱天と同高

図6　山田寺回廊（左）と法隆寺廻廊（右）

す。これを現存する法隆寺廻廊と比べてみました（図6）。

山田寺回廊は法隆寺西院伽藍の廻廊よりも古い時期のものになりますが、それぞれを見ると、共通する点としては柱が少し膨れる形があります。これはギリシャのエンタシスと関係があるとかつて言われたりしました（現在は否定されています）。あるいは、肘木に笹繰という、笹葉状に上端を削る部分があります。胴張りのある柱も笹繰も後の時代では見られなくなりますが、山田寺と法隆寺ではこの二つが共通して見られます。

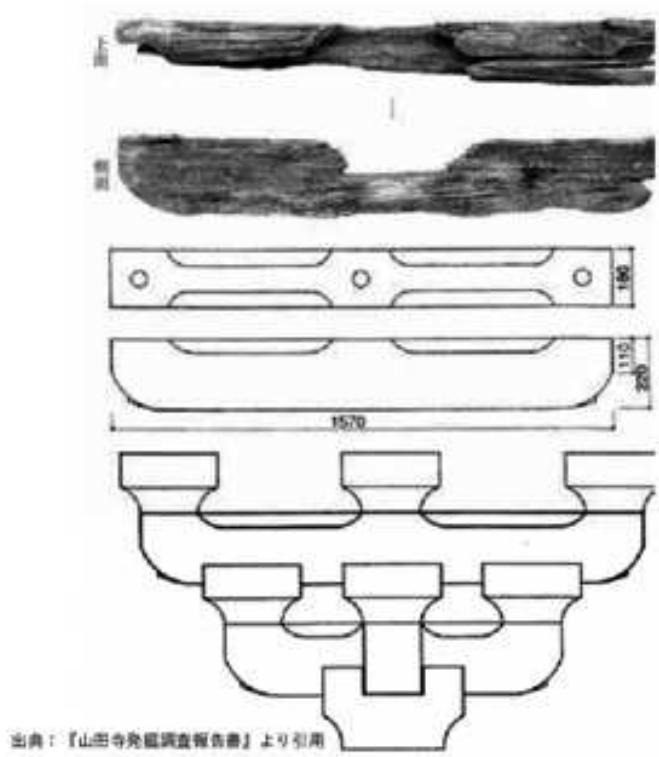
一方で、法隆寺の大斗には皿斗が付く古い形式ですが、山田寺では皿斗を使っていません。垂木も法隆寺では角の四角い断面ですが、山田寺では丸い断面です。さらに扉の吊

り方にも違いがあります。扉の取り付け方では軸穴のつけ方がキーポイントになります。古代日本では長押という横木に軸穴をあけて扉を吊るというのが一般的な方法です。中世以降になると、藁座という穴を開けた部材を付けて、そこに扉の軸を挿せば簡単に扉を取り付けられます。この方が、例えば軸穴が壊れても藁座だけ取り替えればよく、合理的なのです。しかし、古代では藁座は基本的に使われていません。少なくとも山田寺の部材が出てくる以前には、現存建築を見る限り、使わないと考えられてきました。山田寺の発見以前は法隆寺が七世紀の建築情報のほぼすべてでしたが、山田寺では法隆寺とは違う方法を使っているというのが見えてきたわけです。

## 山田寺の出部材に見える特殊な方法

さて藁座というのは横から打ち付け、その軸摺穴に扉板の軸を嵌め込むのに対して、法隆寺廻廊では長押という横材を打って、その軸穴に扉の軸を入れています。この藁座という方法は、現存建築で見た日本建築史では、中世の大仏様以降の技術、とずっと考えられてきました。確かに中世以降のものを見ると藁座は多くみられ、禅宗様という技術でもよく使われます。しかし、古代の現存建築には見られません。この山田寺の出土建築部材の発見によって、実はもっと古くから日本でも藁座を用いていたらしい、ただし八世紀以降には使われていなかった、と見えてきたわけです。ここでも、技術は入っているけれども、その後も継続的には使われていないものもある、ということが判ります。

さらにもう一つ、肘木という組物の部材の話をいたします。例えば平三斗という組物に用いる肘木の長さは、一般的に肘木の上に乗る斗が三つ並んだくらいの長さです。これに対して山田寺では、非常に長い肘木が出土しました。では、この長い肘木をどのように使ったのでしょうか。想定される姿は二段重ねた肘木で、その上段の肘木が長いと考えられます（図7）。ただし古代の現存建築では、こうした肘木は確認できません。ただし中世以降になると、禅宗様という技術では長い肘木を使います。これは中国の南方系、福建省と言われていますが、こうした中世以降に見える建築の技法が、どうも山田寺では入ってきているらしいということです。先ほど言ったのと同じように、奈良時代以降に唐から入ってきた技術とは別系統のものが、この山田寺の出土建築部材、この部材一つ一つから見えてくるわけです。



出典：『山田寺発掘調査報告書』より引用

図7　山田寺の特殊な長い肘木

## 山田寺の技術と東アジア

この山田寺について東アジアとの関係を踏まえ、少しまとめましょう。東アジアレベルで見ると、藁座が、大仏様や禅宗様のような中世以降に見られる技術導入よりも前に、既にあったらしいということが判ります。ただし、古墳時代以前の高床倉庫などでも、この藁座で扉を嵌める方法もあったりします。この辺りの技術伝播や技術継承の関係性の詳細は検討課題です。ただし少なくとも山田寺には藁座の技術があったというのは確かです。そして、横に広がる肘木は、禅宗様の組物と共通するので、もしかすると中世以降に見られる中国の南方系の技術が七世紀に既にもたらされていた可能性があるのではないか、という点が、東アジアレベルでの技術伝播を考えるうえで、重要になってきます。

## 古代建築研究の可能性

もう一点、古代建築の特殊性として、山田寺金堂の特殊な柱配置があります。この方法は全国で少例ですが、他にもいくつか確認されていて、二重の屋根の建物を建てるための技術ではないか、と考えられています。

さらに、発掘調査で出土した建築部材から、現存建築に匹敵する建築技術を分析できる、その可能性がある、という点も大きなポイントです。特に、現存する法隆寺と発掘された山田寺を比較する

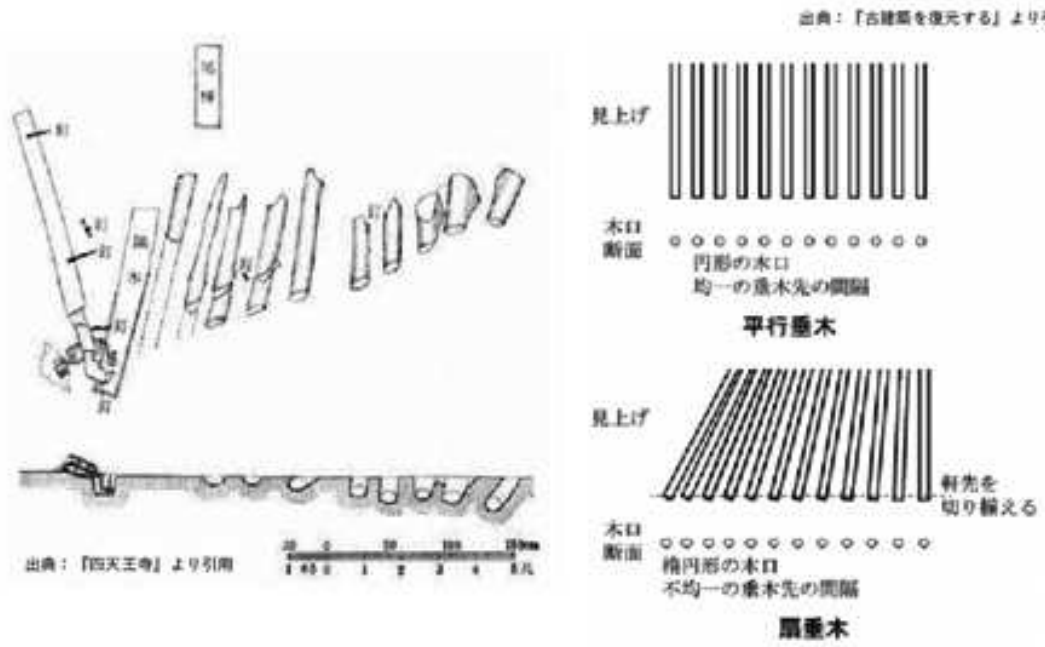


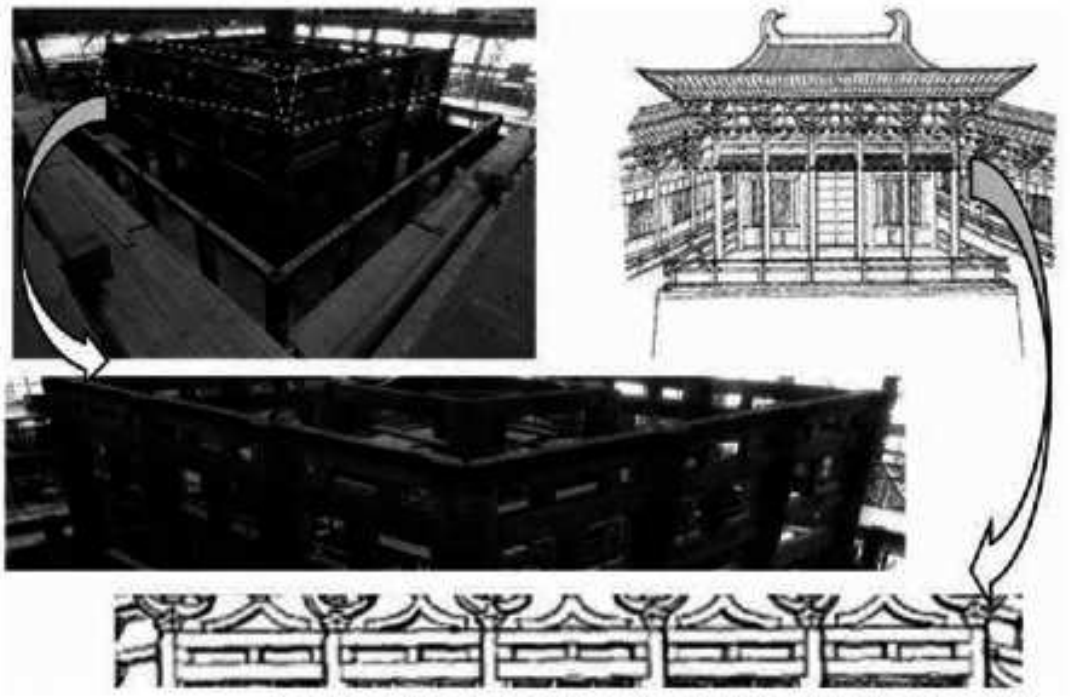

図8　四天王寺の扇垂木

と、確実に技術伝播に二つ以上の違うルートがあることが見えてきます。さらに言うと、現存建築というのは、かつて存在した数多くの建築のごく一部だけが、偶然に残っているに過ぎず、普遍性を示すものではない、ということが山田寺と法隆寺の事例からも見えてくるわけです。

## 四天王寺の扇垂木と薬師寺東塔の両層繁額

次に四天王寺の話をしたいと思います。

四天王寺の発掘調査では屋根を支えている垂木という部材が隅木と一緒に出土しました。そして、この垂木が放射状に並んでいることが判りました（図8）。四天王寺の垂木の発見までは、飛鳥時代や奈良時代の垂木は、たとえ隅木が斜めに置かれても、垂木は平行に並べる、と考えられていました。けれども、この四天王寺で出土した垂木では扇状に並ぶという方法が確



上左　奈良県文化・教育・くらし創造部文化財保存事務所編『国宝薬師寺東塔修理工事報告書』同発編、2021年、第15図
上右　傅熹年主編『中国古代建築史』第2巻、両晋、南北朝、隋唐、五代建築、中国建築工業出版社、2001年、p.379、図3-1-19

**図9　薬師寺東塔と描かれた唐の両層闌額**

認されたのです。この扇垂木という形式は、中世以降の方法と考えられていましたが、どうも、この方法も古い時代から日本にあったらしいということが考古学的な成果から判ってきました。すなわち、この扇垂木も、現存建築からの研究のみでは、いかに画一化されたものしか見ていないのか、という視点の不足を示すわけです。そして、失われたものの中に、どれほど多様なものが過去に存在していたのか、ということを示す一つの例です。

次に私も修理現場に従事していた薬師寺東塔の例ですが、これまで唐から日本に入っていないと思われた技術が発見されました。両層闌額という、頭貫という部材の下にもう一つ横架材が入る形です。薬師寺東塔では、解体修理する前にはこの部分が瓦に覆われていたので、下の

部材が見えなかったのですが、解体修理で瓦を外してみたところ、下方にももう一本の横架材が入っていることが判りました。中世以降、貫といって柱と柱を貫通させる貫という技術がありますが、ここでは部材はそれぞれ柱ごとに部材が分かれた方法であることも判りました。

この発見の何が重要かというと、実は中国の壁画では両層闌額を用いた建築が多く描かれています（図9）。これまでも壁画から両層闌額の存在は知られていて、なぜ日本では用いられなかったのであろう、と言われていました。けれども、この薬師寺東塔の例を見ると、両層闌額もきちんと日本で用いられたらしい、ということが見えてきました。逆に言うと、この両層闌額は、薬師寺東塔より後の古代の建築では、ほとんど用いられませんから、やはり日本では受容されなかったものであったわけです。むしろ十一世紀になると、中国寧波の保国寺大殿などで、束は入ってないですけれども両層闌額は綺麗に残っていて、現存建築でも確認できます。

このように薬師寺東塔の両層闌額から、唐からの直接的で強い影響があったということが見えてきます。現在の平城京の薬師寺東塔と、藤原京の本薬師寺には、数十年の時期差がありますので、両者の塔が同じ形かどうかわかりませんが、もし本薬師寺も薬師寺東塔と同じ形であったとすると、ここに唐の技術が入ってきているということになります。もちろん新羅経由かも知れないですが、唐の技術が入ってきた可能性も十分に想起されるのです。そうなると先ほどの藤原京との齟齬が出てくるので、取捨選択したのか、あるいは、国家中枢の都城や宮殿ではなく、寺院などの情報はある特定の

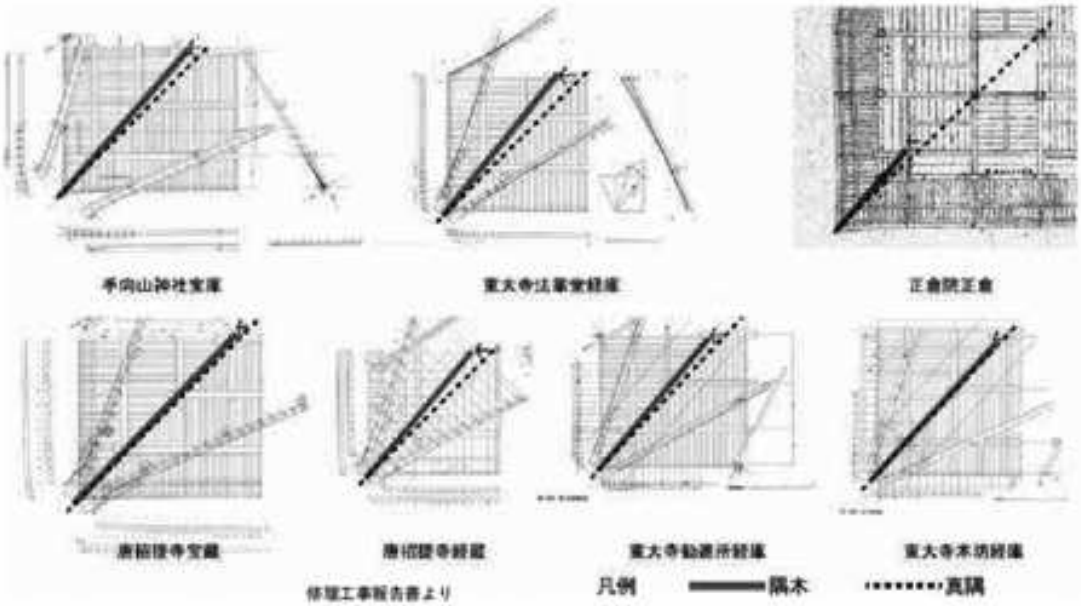



図 10　校倉の振隅

ルートから情報が入ってきたのか、現在、これらを考える素地が揃いつつあるわけです。

## 校倉の特殊な技術

もう一つ、東アジアの建築技術を考えるうえで、校倉を取り上げたいと思います。

校倉というと正倉院正倉を思い浮かべるかもしれません。けれども、校倉の最大の特徴は横木を積層させて造る点にあります。通常の仏堂などでは柱を立てていくので、基本的な柱位置を決める設計方法となります。これに対して、校倉は横木を積層させていくので、横木の長さを基本的な設計単位として考えていきます。すなわち、仏堂の設計方法とは全然違う設計基準が校倉にはあるわけです。

屋根の架構を見ると、校倉の内部中には柱を置かないので、母屋桁を支える束踏みを置く技術が特殊な方法と

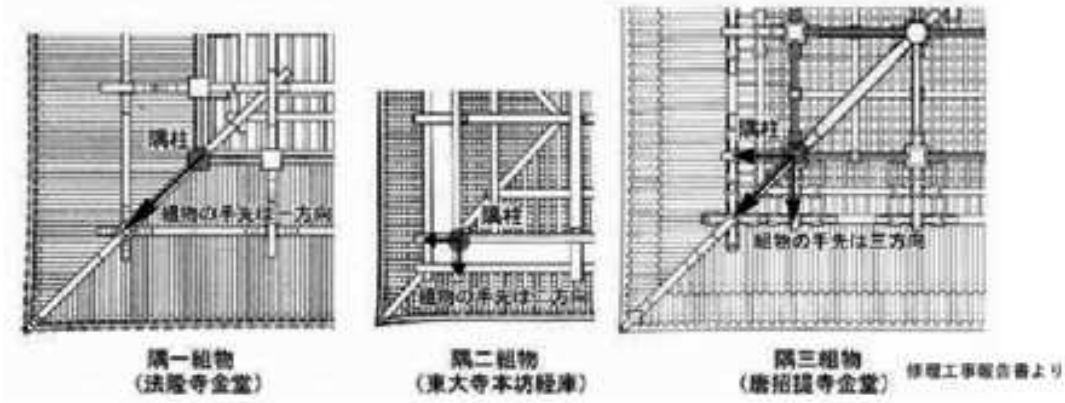



図 11　隅一組物・隅二組物・隅三組物

して使われています。また、校倉は非常に小規模のものが多く、寄棟造とするので、大棟を長く見せるために屋根の隅木を少し外側に振る振隅という特殊な方法も用いられます。振隅という技術は、少なくとも古代の建築では校倉だけに見られる技術であり、金堂や講堂といった一般的な仏堂とは全く異なる技術を使っている、ということが見えてきます（図10）。さらに振隅の校倉は、組物も隅二組物という特殊な組物を使っています（図11）。

以上を踏まえて、校倉に特有な技術には、以下の五点があります。まず総間完数制という全体の総長で設計する考え方、次に妻梁・束踏みといった小屋組みの特殊性、三点目も小屋組みですが、入母屋造・寄棟造で母屋桁の位置が柱筋から独立していること、そして振隅という棟を長く見せる工夫、最後に隅二組物という特殊な組物です。これらを組み合わせて考えていくと、寺院の金堂や宮殿などの主要建築とは全然違う設計体系で造られていることが判ります。

では、校倉の技術はどこから来たのか、というところに話を移

関口欣也「朝鮮三国時代建築と法隆寺金堂の様式的系統」『江南寺院の源流、高麗の発展』中央公論美術出版、2012年、243p、図163
刘敦桢主編『中国古代建築史』第1章、原始社会、夏、商、周、秦、汉建筑、中国建筑工业出版社、2003年、p.638、図5-212

図 12　大陸における校倉の描写・造形

していきましょう。これもいくつかあり、一つは高句麗の壁画に描かれている正倉院のような倉、もう一つが雲南に似たような横材を積層させたものもあります（図12）。この技術が雲南から中国の北側を回っていったのであれば、高句麗で一緒になります。ですが、雲南から南側を回ってきているとすると、ここにもまた別のルートが存在した可能性というのが見えてくるわけです。百済と南方系とのつながりも指摘されていますが、ここを経由するか否かも課題です。さらに、現存する倉は校倉ですが、正税調などの記録には甲倉（校倉）の他、板倉、板甲倉、丸木倉など、多様な倉の存在が記されていますから、技術的な重層性もうかがえます。

以上、東アジアにおける建築技術についてまとめていくと、校倉の技術や、南方系の山田寺の技術、既往の朝鮮半島経由の大陸系からの技術がある状況で、重層的かつ複数の伝播ルートが想定されるわけです。こうした中で、古代山城がどのようなルートで入ってきたのかという点が、建築でも非常に興味深いところとな

ります。

## 四　古代山城の渡来系技術の課題

### 古代山城と遺構

最後に古代山城の問題について、建築の視点から触れていきたいと思います。

一つ目に、やはり古代山城同士で、それぞれの中枢部の比較が困難であるというのが最大の問題になってきます。これは鞠智城の問題というよりは、他の山城に期待したいところでもあるのですが、やはり全体像が見えてくると、建築の基本や規格が見えてくるので、そこから特殊なものを考えるきっかけになっていきます。逆に比較するものがないと、なかなか考えるスタートにも立ちにくいわけです。

もう一つが、総柱の遺構についてです。校倉の総長設計でも話しましたが、寸法の規格が重要になってきます。朝鮮半島の山城との関係で言いますと、地下の倉庫、いわゆる木槨庫という貯蔵施設が発見されています。この地下貯蔵施設がどういった機能を持っているのか、鞠智城で検出している倉庫群の機能と同じなのか違うのか、あるいは、中枢部に対して補完関係にあるのか、機能面から考えることも多くあります。そして、どのように施設運営をするのか、機能分散させるのかといった点も関わってくる課題です。

## 鞠智城の八角形遺構

さて、最後に八角形遺構の話をしましょう。

八角形の建築は、日本中でも実はそんなに残っていません。古代のものでは法隆寺夢殿や栄山寺八角堂が残っているのですが、少なくとも奈良時代の寺院建築の理解では、八角形平面の建築は人の廟所という性格を体現しているとされます。興福寺北円堂、法隆寺夢殿、栄山寺八角堂は、いずれも人を祀っています。通常の建築とは別の建築の形とすることで、建物の機能が廟所であることを示す一つのシンボル的なサインであったと考えています。

一方で、これらの八角形の建物が全部、同じ技術かというと、そうではなく、法隆寺夢殿と栄山寺八角堂では柱配置から違います。鞠智城鼓楼のように放射状に出てくる柱配置は法隆寺夢殿には見られますが、栄山寺八角堂では見られません。こういった技術的な違いもあるので、一概に平面の形から機能と直結させることができず、これも一つの難しい点です。

## おわりに

上野邦一さんが日中韓にベトナムを含めた地域の八角形建物を比較検討して、祭祀に関わる遺構ではないか、と指摘しています。もし、そうだとすると、朝鮮半島、特に新羅等の八角形遺構との関係は一つ考えておく必要があると思います。逆にもし、八角形遺構が古代山城の軍事的な機能に関係が

あり、軍事的に必要な施設であれば、他の山城でも発見されなければなりません。そのため、特に望楼とか鼓楼など、古代山城として必要な機能や施設を想定したうえで検討して、遺構ごとに形態と機能を一対一対応しているのか、あるいは別の形の建築でも、機能さえ補完していればいいのか、こうしたところまで含めた検討が必要でしょう。その点で、中枢部の発掘が進み、全容の検討をしている鞠智城はフロントランナーと位置付けられると思います。

また日本に入ってきた段階で、古代山城の技術伝播のルートというのが直接、鞠智城に入ってきたのか、あるいは中央や大宰府などに入っているのかという点も課題となります。そして、その技術も選択的に取り入れているのか、そういったことも含めて考える必要があります。すなわち、特に七世紀の段階では単一のルートで、どこか一箇所から入っているのではなく、重層的に、色々なところから、色々な技術が入ってきているので、その中で、倭国・日本列島の側が主体的に選んでいるのか、あるいは主体的ではない結果として、そのルートしかなく入ってきたのか、この重層性を踏まえて考える必要があります。

古代山城の建築技術に関して言うと、構造・意匠を含めた建築設計のような高次の技術レベルと加工などの技能レベルの両面を考えておく必要があります。鞠智城に限らず、古代の建築を考えるうえでは、これらの技術と技能の二つの重層性という問題も重要です。

いずれにせよ、古代山城に関しては鞠智城以外の古代山城でも中枢部の調査が広まることで、古代

山城あるいは古代建築の技術がどういうルートで大陸から入っているか、日本列島で技術が伝播しているのかを解明する重要な手がかりになると期待しています。古代建築の技術伝播の解明が進むことで、古代山城、そして鞠智城が、東アジアの中で位置付けられ、より価値を増すであろう、と考えております。

今日はこれで終わりたいと思います。どうもありがとうございます。

（本発表は科学研究費補助金基盤研究B「古代東アジアにおける建築技術体系・技術伝播の解明と日本建築の特質」課題番号18H01618の成果を一部含む）

# 報告④　渡来系技術の導入と古代山城

講演者紹介

吉村　武彦（よしむら　たけひこ）
東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。東京大学文学部助手、千葉大学専任講師・助教授・教授、明治大学文学部教授を歴任。現在、明治大学名誉教授。専門は日本古代史。博士（文学）。

# 「渡来系技術の導入と古代山城」

明治大学名誉教授　吉村　武彦

## はじめに

### 渡来系移住民の役割

ただ今、ご紹介に預かりました吉村と申します。もう退職してから相当時間が経ってきているのですが、研究を続けています。昨年に続き今回も報告させていただきます。

さて、私のテーマは、「渡来系技術の導入と古代山城」です。このテーマを、渡来系技術の導入、大宰府と鞠智城、そして肥後国と百済といった順にお話しを進めたいと思います。しかし、二週間前に日本考古学協会の大会に参加するため、九州大学伊都キャンパスを訪れ、かつて韓鍛冶の木簡が出土した土地に立ち、「あぁそうだ、やはり韓鍛冶の問題とか、そうすると才伎の問題等もやらなくてはいけない」ということに気が付きました。最初にその話からさせていただこう

と思っております。

今までは渡来人という言い方をしていますが、私は出自よりも移住、移民という面を重視・強調した方がいいという考え方をもっていますので、渡来系移住民、あるいは朝鮮系移住民と言っています。渡来系移住民というのがなぜ重要か、関晃さんは、種種の技術とか知識とか文物によって、社会と文化の発展で決定的な役割を果たしたからだ、と言っています。それからもう一人、石母田正さんも日本文明の転換には渡来系移住民の貢献なくしては考えられない、とおっしゃっています。これが石母田正さんとの写真ですが、この横にいるのは私です。今から想像できないような頭の姿。これ千葉大学時代です。明治大学が人をこき使うのがいかにひどいのか、今はこんなふうになりました。（笑）それでは補足資料を見て下さい。

## 東アジア世界論

最初に「東アジア世界論」です。中国と朝鮮諸国、それから日本、ベトナムの四地域を、東アジア世界論という捉え方をすればどうなるのかという問題です。この東アジア世界は、漢字文化圏と言った方がわかりやすいでしょうか。西嶋定生さんは、漢字、政治思想のもとになった儒教、政治制度の律令法、それから漢訳仏典に基づく仏教を指標として挙げています。

ただし、私は西嶋説をいろいろ検討する中で、儒教の評価を律令法と並ぶような礼制の問題として考えなければ駄目じゃないかと思いつつあります。また、西嶋説では、渡来系技術という問題は説明できないんじゃないかとも思います。もちろん漢字を介している技術はわかるのでしょうが、技術の移転には人の移動が必要ではないか、と今回準備する中で思いました。

## 五世紀における開発

このところ、五世紀における渡来系移住民による開発というのが、ずいぶんと評価されてきております。特に大阪にあたる河内地域の開発ですね。この河内湖とその周辺で、朝鮮式土器とか韓式土器とか呼ばれる朝鮮半島から来た土器が多く発掘されています。渡来系移住民たちがたくさん来ている、文字とおり移住して来ている、という場所になるかと思います。最近、埴輪の研究も進んできておりまして、明治大学にいる若狭徹さんが、渡来系の人たちの埴輪を抽出する、といった面白いことやっています。須恵器とか韓鍛冶とか馬飼集団、これは河内地域を考える場合には非常に重要だということが一つであります。

それから地元肥後で考えますと、この冠帽、実は江田船山古墳から出てきているものですね。韓国でも、ほぼ同じもの、それも冠帽だけではなく耳飾りや沓など、百済の地域と共通するものがいっぱい出てきているわけです。やはり、この肥後と百済はかなり古い時期から関係があることは事実だと

思うのです。そういう交流関係がどう継承されたか、あるいはされなかったかという問題も立てる必要があると思います。

## 「才伎」の渡来

それで考えたのが、才伎、手末才伎と呼ばれる人たちです。才伎を技術者というふうに考えておきますと、日本列島の文明化に非常に重要な役割を果たしたということになると思います。そして、才伎について文字史料が非常に限られているので、考古学や建築学などの知識に基づいて考えていかなければならないと思っています。今回はこれを、戸令没落外蕃条の大宝令条文と養老令条文が違っているところから考えてみたいと思います。才伎とは何か、律令における才伎・長上の才伎についての当時の議論が、『令集解』に書いてあります。

まずは『日本書紀』でどのように書いているかっていうと、百済の場合が「今来の才伎」とか「手末の才伎」とか具体的にいくつか書かれています。これによると例えば、陶部とか鞍部、それから画部、絵描きの方ですね、それから錦部とか訳語があります。「手末の才伎」の場合にも、これは漢織・呉織・衣縫といった布製品の製作技術者が出てきます。あと『類聚三代格』ですと、舞の先生とかも出てきます。歌謡とも関係してくるのでしょうか。このような特殊な職能の持ち主を才伎と言っているのです。実はこれ中国の唐令には無いんです。飛鳥浄御原令はちょっとわからないんですけど、唐

令に無くて、敢えて大宝令に入れたっていうのはどうしてなのか。おそらく七世紀後半における渡来系の人達が列島に来た役割というのを、大宝令の編纂者が認識していたからだと思います。『類聚三代格』、これは資料を一ページに収めるために、必要な箇所だけです。全文は入っておりませんが、資料に入れさせていただきました。

## 筑前の「韓鉄」木簡

さて、二週間前に気がついたのが「壬辰年韓鉄」木簡です。壬辰年は六九二年、持統六年です。歴史学の問題として非常に重要なのは、出土した地域である志麻郡の郡大領が肥君猪手だということです。これはやはり、肥君の問題として、肥後とも結びつきますし、韓鍛冶などの技術の問題として考える必要もあるように思っています。志麻郡の場所は皆さんの方が詳しいと思いますけれども、「地図をみて」このあたりですよね、渡来系と関係する「韓良郷」があります。「からかち」という地名があります。

古くは、卑奴母離という役職があったと思われます（魏志倭人伝）。渡来系移住民については、筑前の方は大宰府もあり比較的説明しやすいかと思います。豊前の方では亀田修一さんがずいぶんと渡来系移住民のことを研究されています。ところが残念なことに、肥後では史料が少なくちょっと説明しづらい。こういう韓鍛冶の問題というのは、肥君猪手のような人物がいなければ別かもしれません

が、七世紀後半から八世紀の初め頃、肥君一族と筑紫の肥君との関係が一体どうなっているのか、という問題に関係してきます。そして技術的問題を解く手がかりになっているのが、大宝令の没落外蕃条の才伎なのです。

## 技術者の渡来

養老令には記されていないのですが、『令集解』戸令没落外蕃条の中に大宝令の注釈書である「古記」に問答があります。これは今の法律問答と同じで、民法百問百答なんていう発想と同じです。その『令集解』に「問う。若し才伎有らば、奏聞して勅を聴け」と書いてあります。大宝令には「才伎」の言葉があり、渡来してきた人たちの中に技術を持っている人がいたら報告しなさい、と規定されていたのです。その規定は養老令には書いていないし、唐令にも存在しないのです。残念ながら、大宝令の前の飛鳥浄御原令ではちょっと内容がわかりません。また、大宝令の次の養老令に規定されていないのは、時代が変わったのでしょうが、あるいは日本的小帝国意識があって渡来系の才伎の規定は削ったのだろうといわれています。

七世紀後半、特に白村江での敗戦以降、渡来系の人たちが多く来ており、その影響があった可能性があります。大宝令段階では、渡来系の技術や技能を持っている人である才伎の掌握を重視したのですから、渡来系技術者はかなり重要だったのでしょう。そうすると、大宝令は白村江敗戦以降の百済

系技術者の来日と関係するかもしれません。なぜ海外の才伎を登用せざるを得なかったのかを考えれば、今日のテーマである古代山城の造成とも関係するかもしれません。そういう問題を韓鉄の木簡から発想して、急遽、お話しに入れさせて頂きました。

## 一　渡来系諸技術の導入

### 横穴式石室

それでは最初から始めます。渡来系諸事業の技術導入で、前方後円墳における横穴式石室の築造の問題に触れたいと思います。古墳とは何かとか、肥後式石室がどうのこうのということではありません。朝鮮式山城を造るということが、例えば水門にしても石塁にしても、倭国的な技術の前提として前方後円墳や横穴式石室を造るという技術があったのではないかということです。例えば水はけの問題、水門の問題とかですね。山城を造る基礎的な技術の問題を考えたということであります。

さて、白石太一郎さんの「横穴式石室誕生」（『横穴式石室誕生』二〇〇七、近つ飛鳥博物館）という横穴式石室のまとめから説明します。石室は元々竪穴式です。古墳の埋葬施設が竪穴式石室の場合、上部が開いており、ここに蓋をしますので完結した空間になります。したがって被葬者は、必ずしも一人とは限らないにしても、閉じられた空間になります。ところが、埋葬施設が横穴式石室になると、追葬が可能となります。

九州には、九州系横穴式石室という、竪穴系の施設に横口部を付けたものがあります。この様式から出てきたのが肥後式石室で、方形の石室に仕切りや石障があります。こういう横穴式石室の世界観とは何か、ということもあります。竪穴式石室の変容型として捉えられている九州式横穴式石室が玄界灘沿岸にあって、それが肥後に入って、さらに独自の発展をしているということでしょうか。肥後というのは、このような発想ができる地域で、これは面白いと思っています。

ヤマト王権の中心地域では、五世紀後半になると巨大な前方後円墳にも横穴式石室が採用され、それを畿内型横穴式石室といっています。大仙陵古墳＝現仁徳陵は、横穴式石室ではないようですが、その後はヤマト王権も追葬可能な埋葬施設を採用するところとなります。このように石室を作る技術と、石墨を造る山城との関係は一体どういうことになるのか、こういった問題関心になるわけです。

## 寺院建設と渡来系移住民

文献からみますと、百済寺には大匠として書直県、彼は倭漢氏のようですが、渡来系ということになります。そして、飛鳥寺には、寺工、瓦博士や画工らが百済から来日しています。その一塔三金堂の伽藍配置には、現在のところ、高句麗の影響があったとみていいと思います。当時、聖徳太子、つまり厩戸皇子の先生と称されているのが高句麗のお坊さん慧慈ですし、蘇我馬子も高句麗系の還俗した人を師としています。ですから高句麗の影響も考えていいだろうと思います。飛鳥寺の性格として、

百済系とか、いや高句麗系とかだけで一方的に決め付けない方がいいように思います。

八世紀半ばには、東大寺大仏を国中連公麻呂が造っています。公麻呂の祖先は百済国の人で、近江朝廷の世に本蕃の喪乱によって帰化した、要するに白村江敗戦により日本列島にやってきたのです。大仏鋳造時、手を挙げる人がいなくて、私がやると公麻呂が言ったと書かれています。やはり東大寺大仏を造るに際しても、百済系の渡来系移住民が重要な役割を果たしたということになります。

## 百済からの上番と移住

百済からの上番と移住は、『日本書紀』には秦氏系の弓月君伝承や王仁の伝承があります。王仁は諸の典籍を教えたとあります。文系の人物で、書首らの始祖とされています。それから王辰爾の伝承もあります。船連の祖とされています。これら三つの伝承が、『日本書紀』に残されているということです。

六世紀の初めから半ばにかけて、百済と倭国とはかなり往来がありました。百済は倭国に軍事的支援を求めましたが、一方の倭国は百済に五経博士ら諸博士を求めるというものです。最後になる欽明十五年（五五四年）の時に大勢の博士らが来ましたが、どんな人が来たのか比較的詳しく書かれています。さて、問題はこの博士たちが、倭から百済への軍事的支援と引き換えのバーターとして来ていることです。その構成は、五経博士・易博士・暦博士とか医博士、それから薬関係の人物もいます。

朝鮮古代史で有名な末松保和さんは、段・高・王・馬とか、こういう姓名は南朝系梁の姓であるということを指摘しています。その後、平野邦雄さんもこの説を継承しています。平野さんは、確か全員ではないかもしれないと言っています。『梁書』を見ていきますと、百済と南朝梁との関係もわかります。百済に渡った南朝系の人たちが、ずっと百済に居住していたのか、南朝梁に戻ったのか、その辺はよくわかりません。しかし、梁の人が百済に行って居住していることは間違いない。そして、その人たちの一部が倭国に来る、という関係になっています。

そうしますと、東アジア世界において、わかりやすくいえば漢字文化圏における人々の往来問題というのを考えていかなければなりません。つまり中国南朝と百済、そして百済と倭国との関係を考えていかなければならない。『隋書』百済伝には、「其の人（百済人）、新羅・高麗・倭等雑りて有り。また中国人有り」とあります。ここには百済のなかに、いくつか外国人が住んでいると書いてある。中国の人もいるということですね。ましてや、八世紀ぐらいになると中国だけじゃなく新羅も含め、お互いかなり行き来していることを考えていかなければならないでしょう。

歴史的に有名なものとして、前方後円墳が朝鮮半島からも見つかりました。倭人が半島に移動している問題と関係するかもしれません。それから白村江の敗戦以降になりますと、天智四年（六六五年）には四百余人が近江に移されます。翌年には男女二千余人が東国に移住している。移住して来た人物には、百済王氏もいます。古代史の方では、百済王氏の場合は、ヤマト王権が百済王権を包摂したと

いう評価をしています。百済とは関係が強いので、百済郡というのも摂津国にあります。ところが、高句麗系の人々の場合の高麗郡、新羅系の場合の新羅郡は、八世紀に入って武蔵国、つまり東国に設置されます。今は埼玉県になります。高麗郡は消滅しましたが、高麗神社が著名です。新羅郡は後に新座郡に改称されています。このように、百済と高句麗、新羅とでは、対外関係に影響されて移住して来た人たちを配置する場所も違っています。百済郡のほか、百済系の人々は近江国の移住が多くみられます。

ここでひとつの問題になると思うのは、百済の人たちが列島に来るときに百済の官位を持っているのですが、それを倭（日本）の官位に切り替えています。百済からの人たちが、どのような技術を持っているのかということは、天智十年（六七一年）の叙位の時にわかります。名前が記されているのは、小山上（正七位上相当）までです。比較的多いのが「兵法に閑う」です。やはり兵法に強いのです。ここに山城築城と関係する、憶礼福留や答本春初が出てきます。あとは薬関係や五経関係者ということになります。

さて、百済の官位は佐平がトップ、二番目が達率ということになりますが、実は山城を造る時に百済系の官人の名前がわかる場合だけではなく、わからない場合も想定する必要があります。どうしてかといいますと、一つの仮説にしか過ぎませんが、『日本書紀』や『続日本紀』に記載されるのは一定の官位以上の人です。ふつうは五位以上なのですが、こうした一定の官位を持つ人しか書かれませ

んので、書いていないからといって、たとえば山城に派遣されなかったということにはなりません。天智十年の記事でも、小山下の場合は、百済の達率にもかかわらず、名前が記載されていないので、どのような人物がいたのかは不明です。かつての百済における官位が一番目・二番目の官人でも、倭で与えられる官位は低く扱われていることがわかります。

## 二　大宰府と鞠智城

### 古代山城の築城

いわゆる朝鮮式山城と神籠石系山城は、ほぼ同じ時期に造られたことは、学界でほぼ意見が一致してきていると思います。しかし、特に筑紫・周防・吉備・伊予は総領制との関係で解けるように思いますが、東国総領との関係、時期も違うということもありますが、まだ問題点も一部では残っているかと思います。

それから、白村江の敗戦のあと西日本防衛ラインという、狩野久さんが使っている言葉ですけれども、築かれます。日本の場合、対外戦争として白村江の敗戦がやはり非常に大きいでしょうし、それから国内戦争においては壬申の乱が非常に大きかった。つまり、国は滅びるものだというのが、白村江の敗戦で理解できて、国内においては王権は勝ち取るものだということを壬申の乱で経験したというように思います。この間の出来事になりますが、白村江の敗戦によって、水城とか山城が造られて

います。また、近江遷都も、おそらく敗戦後の危機感と関係あるだろうと思っています。

西日本において古代山城を築城した地域は、海岸沿いのルート、そして山陽道や南海道という古代の駅路との関係で内陸にできるルート、この二通りがあると亀田修一さんが言っておられます。僕もその通りかと思います。

これを北九州に当てはめると、鞠智城の場合は道路との関係がある程度言えるようです。筑紫に関する古代山城については、天智三年から対馬の金田城から造り始めたということですが、先ほど言いましたように憶礼福留とか四比福夫が築城に来ています。この名前がない山城についてはどうかということになります。

大宰府から鞠智城までは六十二km、これは直線距離ですから実際はもっと長いかと思います。鞠智城が出てくる文武二年（六九八年）の段階では、大野・基肄・鞠智の三城を一体として大宰府は考えていると理解できるでしょう。僕がよく使わせていただく赤司善彦さんの山城の変遷説、これは山城の変遷を出土土器から示した説です。もちろん、土器というものは、山城を造ってから作るというよりか、それまでの古いものを使っているわけですから、ちょっと遡ってもそれは致し方がないという具合に思います。一方、こちらの稲田孝司さんの変遷説は、どういう形で石塁その他ができるかというところから出発して変遷を示しています。最初の築城の時期ははっきりしますが、いつまで続くのかという終了時点まではよく解らない部分があります。出土土器から示した赤司説と適合する部分も

ありますが、合わないのもけっこう出てきます。これが稲田説です。

## 筑紫山城と百済系官人

憶礼福留という人物は天智二年（六六三年）に倭国に来て、それから「兵法に閑へり」ということで叙位され、その後に石野連を賜姓されています。また四比福夫は、泗沘城の「泗沘」という地名と関係があるのではないかと思います。この人は、神亀元年（七二四年）に椎野連を賜姓されている。「連」というどちらかといえば旧いカバネで、大化前代でいうところの伴造です。そういう伴造系の連のカバネをもらっています。

筑紫城を半島の山城と比較するとなると、やはり泗沘城ということになります。どちらかと言えば逃げ城とされている扶蘇山城に、私は五、六回は行っています。比較するのは、この地域と大宰府ということになります。ただし、同じような形をとっていないのは、河川の流れなどが異なるからでしょう。泗沘城の立地や選地のしかたを応用しながら、この大宰府の設計をしたということも、十分考えられるわけです。扶蘇山城の役割を大野城が担っていたかどうか、というような課題も出てきます。

大宰府周辺には阿志岐城も見つかりました。もっと研究を進めなければならない。私自身は、南朝系の文化人・技術者たちが百済に行き、その人たちが日本列島の倭国に来たという末松保和さんの説でいいかなと思っています。実は小田富士雄さんも、同じような考え方をしておられます。小田説は、

百済の泗沘都城と南朝の建康都城、そして大宰府都城の古段階を対比しています。小田説をみると、大宰府も白村江以降で間違いない、と私は思います。なお、南朝と百済、そして畿内地域の宮都を考える人も少なくなかったのですが、むしろ大宰府で考えていったらどうなるか、と思います。

さて、亀田修一さんが日韓の山城の比較をされています。向こうには多くの土城・石城がありますが、大規模なものとなれば日朝はほぼ同じくらいです。数としては百済の山城は多いのですが、小規模な城が多い。百済と日本の大規模な山城を比較すると、むしろ大規模な古代山城というのは日本の特徴である、という言い方が可能かと思います。そういう日朝の違いも理解しておかなければならないでしょう。

## 三　肥後国と百済

### 大化前代の肥後と百済

最後に、肥後・熊本と百済との関係はどうかということを考えてみます。古く敏達十二年（五八三年）の記事にある日羅という人物。この人は火葦北国造阿利斯登の子どもで、百済での官位は達率です。『書紀』の記事として載るぎりぎりの官位かもしれませんね。肥後の国造は、火国造・阿蘇国造・葦北国造そして天草国造がいます。私もこれまで気がつかなかったのですけど、葦北国造の地域には前方後円墳がないのです。こうした地域は、北陸の越の方にもあります。つまり、国造になったから

前方後円墳を造るということでは必ずしもないのです。この考えは、栃木の小森哲也さんのお考えですが、国造支配地域に必ずしも前方後円墳があるわけではないのです。

そのような例が少数だけありますが、これをどう考えるかということです。国造になるということと前方後円墳という葬送儀礼を受けるということは、基本的には共通して考えていいと思うのですが、違う例もあるということをどうみるか、ということです。前方後円墳のない火葦北国造と関係する日羅が、百済と関係しているという記事が敏達十二年（五八三年）にあります。

それから遡って、江田船山古墳の場合ですが、銀錯銘大刀では獲加多支鹵（雄略天皇）です。銘文には、書者が張安とあります。おそらく南朝系の渡来系移住民ではないでしょうか。そして作刀者は、倭人です。つまり、刀を作るということは倭人ができる、しかし書く能力というのは渡来系移住民しかできない、という時代です。出土品を見れば、江田船山古墳の被葬者は百済と密接な関係がある。肥後の北の方にある勢力です。ところが葦北国造は、南の方ですね。その辺をどう考えるかということがあります。

それとこの記事と関係があるかどうか、本当はよくわかりませんが、筑紫火君が百済と関係あるということが欽明十七年条に出てまいります。「百済本紀」にありますから、かなり信憑性がある記事ではないかと思います。それからもう一つ、筑紫大宰との関係でいうと、おそらく有明海との関係もあるかと思いますが、推古十七年（六〇九年）に百済から来た人たちが肥後の葦北津に泊ったという

記事があります。百済から来たのは、やむを得ずに来たのか、意図的にそうなったのか、その辺を詰めていく必要がありますが、何かを示唆する記事です。

## 古代山城と渡来系移住民

古代山城はどのようにして造るのか。この問いに、最初は渡来系の人との関わりが非常に強いということを葛原克人さんが主張されています。葛原説では、百済部・加夜（加耶）・漢部などの名称、そして幡多（秦）・高麗池などの朝鮮三国との関係がある人・地名が出てきます。亀田修一さんは、山城を造る場合、どういうように築城するのか、そのモデルを示されています。発注者がヤマト王権で、その次にくるのが百済の亡命官人ですね。今回のシンポジウムとの関係から言えば、この亡命官人がすべて記載されているかどうか、です。『日本書紀』『続日本紀』の記事には、記載基準の問題から書かれていない例もあるのではなかろうか、という問題になってきます。

具体的にいえば山城を築城するときに、設計する前の構想、設計作業、そして選地がやはり重要かと思います。全体としては、築城に対する知識というものがどうであったのか、ということと関係します。瀬戸内海沿岸では、渡来系の人たちがかなり重要だったということは言われるとおりですが、残念ながら鞠智城を造る際は、肥後国における渡来系人物の状況がよくわかりません。明治大学古代研究所では墨書土器データベースを構築していますが、あまりいい結果はでていません。肥後国でも

墨書土器の悉皆調査をして、データ集成をしたうえで研究していかなければなりません。けれども、鞠智城では、そう簡単に良い史料がありそうにありません。

## 大宰府と鞠智城

大宰府との関係で、鞠智城をどう考えるか。これまでにもいくつかの提言があります。坂本経堯さんが指摘された鞠智城論に、三つの役割があります。①大宰府の支援、②有明海方面の防御、③九州南部の夷狄対策です。九州南部の夷狄対策については、否定的な意見も多いし、有明海方面の防御も否定的な意見が強いように思います。けれども、基本的には三つの役割もあるのではなかろうか、というように思っています。というのは、西日本防衛ラインというのは、八世紀に入ってから大宝元年（七〇一年）八月で停止されます。しかし、少なくとも大野城・基肄城そして鞠智城では続きます。その理由を考えないといけないわけです。鞠智城にはこのような特殊性というか、特別な役割を付与されている。大野城と基肄城はやはり大宰府と強い関係がありますから、鞠智城もそうした関係にあるとみるのかどうかです。

その場合、対外的な防御を行なう場所や渡来系の人たちの上陸地点が、博多湾沿岸だけでいいのかどうかです。有明海を含めてもいいのではないか、という問題が生じます。防御となると軍団や兵士が問題になります。肥後国の軍団の問題では、軍団は残念ながら、益城軍団以外は未だよくわかりま

せん。ところが、「韓鉄」の木簡をみていますと、六九二年（壬辰年）の年時です。後には志麻郡韓良郷があり、志麻郡は肥君猪手が郡大領をしている郡です。博多湾沿岸に渡来系の人たちの郷・韓良郷があり、そこに肥君が郡大領です。かつて肥国の方から移って来ているわけですね。そうした地域で鉄製品が造られることは、どういう意味を持つのか持たないのか、ということも考えなければなりません。

また、大野城・基肄城の二城の場合、百済系の憶礼福留と四比福夫の名前が出てきます。ただし、鞠智城の場合は記載がありません。名前が書いていないからといって、派遣されなかったとは、少し考えづらいのではないでしょうか。推測に推測を重ねて言うことになりますが、官人は派遣されたけども、位が低かったので『日本書紀』『続日本紀』には記されなかった、ということはありえないでしょうか。歴史学の常道ではありませんが、なにぶん史料が少ないので、想像をたくましくして考えることも、少しは意味があるように思います。

最後は駆け足になりましたが、ご清聴ありがとうございました。

# パネルディスカッション

## コーディネーター

佐藤　信（くまもと文学・歴史館館長、東京大学名誉教授）

東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。奈良国立文化財研究所研究員、文化庁文化財調査官、聖心女子大学文学部助教授、東京大学文学部助教授、東京大学大学院人文科学研究科教授、大学共同利用機構法人人間文化研究機構理事を歴任。現在、くまもと文学・歴史館館長、横浜市歴史博物館館長、東京大学名誉教授。専門は日本古代史。博士（文学）。

## コメンテーター

亀田　修一（岡山理科大学特任教授）

## パネラー

小山田宏一（大阪府立狭山池博物館館長）

海野　聡（東京大学大学院工学系研究科准教授）

吉村　武彦（明治大学名誉教授）

長谷部善一（歴史公園鞠智城・温故創生館館長）

**佐藤信**　それでは、そろそろパネルディスカッションを始めさせていただきます。私コーディネーターを仰せつかっております、くまもと文学・歴史館の館長の佐藤信です。

今日ご参加いただいている皆様の中には、昨年以前にもお聞きいただいている場合があるかなと思います。一昨年はオンライン座談会の形式で開催したと思います。今回は、少ししぼって渡来系技術に焦点を当てて四名の報告者の方々からご報告をいただきました。非常に豊富な材料が出てきていると思います。まだまだ鞠智城について研究しなくてはならないテーマがいっぱいあるというところで、やや専門的かもしれませんけれども、お楽しみいただけたらと思っております。

一番初めに、朝鮮半島の考古学に詳しい岡山理科大学の亀田修一さんにコメンテーターをお願いしておりますので、今日の報告も含めて鞠智城と関係する渡来系技術についてコメントをいただきたいと思います。お願いいたします。

**亀田修一**　皆さんこんにちは。岡山理科大学の亀田修一でございます。よろしくお願いします。

佐藤先生からコメントをということだったのですが、ご報告をなさった皆さんは大先生ばかりで、僕からコメントするのはおこがましいので、感想を中心にお話をさせていただきたいと思います。

まず、長谷部善一さんが、鞠智城の全体像と朝鮮半島との関係、技術の関係をお話されました。その中で最初に発表された現在のインフラ整備と関わる話はとても興味深く思いました。と言いますのは、僕自身、考古学をやっているのですが、考古学は現在に通じると思ってやっておりますので、新しい半導体の工場がこの熊本にできるという出来事と同じような出来事が昔にもあったという話は、そのとおりだと僕も思いました。特に最近古代の交通路関係に僕自身も興味持っていますので、そのように思いました。ご発表の内容に関しましては、いろいろ渡来系の技術というのがあるわけですが、

この最初の選地の問題は、重要だと思いました。まず、日本列島の古墳時代以前には明確に城と呼べるようなものはありません。そして、日本の中世の山城は大体の場合は郭（くるわ）が尾根筋に並んで造られます。韓国、朝鮮半島は違います。そういう意味で、日本の古代山城の選地というのは、やはり古代日本の中からは出てきづらい、出て来ないのではないかと思っております。次に、版築ですね。この辺も今後もう少し細かく検討される必要があるのかな、と思い

ました。そして貯水池跡の話。これは今お話ししていいのかどうかわかりませんが、僕は以前から熊本県の方に貯水池をもう一度掘って欲しい、貯水池を掘ることによっていろいろな話ができるだろうと言っているんです。ただ、長谷部さんもおっしゃいましたが、本当に貯水池を掘ろうとすると、今後腹をくくって、お金のことも考えて、時間も考えて調査する必要があると思います。現在、城門を調査していますので、それが一段落したら貯水池を是非ともお願いしたいと思っています。といいますのは、やはり水気のあるところを掘ると木簡が出てくるのではないか、と思っているのです。年号を書いた木簡が出ないかと随分前から期待しているのです。こんなこと言っていいのかどうかわかりませんが、鞠智城築城頃の年号木簡がうまく出てくると特別史跡になるのではないかと期待しているのです。やはりそれだけのものをここ鞠智城は持っていると思います。木簡に書かれた文字資料の中には「秦人」も出ています。そういう話も含めて、渡来系の人達との関わりも見えるのではないかと思っています。

次に、小山田宏一さん、三〇年近く狭山池と土木技術との関係を研究されている第一人者ですが、特に韓国の新情報も踏まえて今日ご報告いただきました。その中で特に面白かったのが、いわゆる貯水施設とみんなが言っているものが、単にその意味だけではないのではないかというお話です。小山田さんは空間設計という言葉を使われていましたが、これはとても面白く思いました。そのような発想で見た方は今までいなかったのではないか、と思うのです。僕自身も基本的にはこういう貯水施設

があれば、その中に貯木場があったのではないかなどは思ってはいたのですが、空間的にどう見るのかというのは初めてで、とても面白く思いました。それから、小山田さんの報告の中で鬼ノ城の話が出てきて、その第5水門のところの貯水施設というか堤防状土手の話が出ました。それは、かなり立派なもので、ちゃんと土手になっていて、石垣があります。僕は岡山におりまして、鬼ノ城の発掘調査の時に何度かお邪魔しております。この貯水施設の中はやぶだらけで様子がよくわかりません。そして、さらにその上にも、もう一つ貯水施設があります。これはあまり知られていないかもしれませんが、この上の池にもおそらく堤防があって中の池の部分がL字に曲がっています。もしかしたら小山田さんがおっしゃったようなものがあるかもしれません。鬼ノ城にも、もしかしたらそういうものがあるかもしれない、と思いました。

それから、海野聡さんのお話もとても興味深く思いました。僕は渡来人をおもな研究テーマの一つにしておりまして、瓦も勉強しているのですが、先ほど海野さんがしきりにおっしゃっていた、実際に事業プランニングする人と技能者、作業する人の違いは、まさにそのとおりだと思います。以前、七世紀後半の法隆寺の建物が高麗尺を使っているというお話を伺ったことがあります。今日のお話を伺っていて、やっぱりそうなのだと思いました。つまり、全てが全て最先端のことをしているとは限りません、というお話、これもその通りだと思いました。それからもう一つ、この報告の中で注目しましたのが七世紀の多様性です。これも先ほどお話ししましたように僕自身瓦を勉強しています。そ

して、七世紀の瓦の多様性を実感しています。以前、近畿地方の瓦を検討する機会があり、朝鮮半島との関係について検討したことがあります。近畿地方の七世紀の瓦は、僕が「主流派」と呼んでいる、飛鳥寺の瓦、山田寺の瓦、川原寺の瓦などがある一方で、その流れとは別に渡来系の氏族達が使った別グループの、僕が「非主流派」と呼んだグループの瓦があることがわかりました。この「非主流派」の瓦が多様で面白いのです。一度、奈良文化財研究所の方にこの「非主流派」の瓦をテーマに検討会をやってもらいました。やはりかなり個性的でした。そして面白いことの一つとして、山城と河内の瓦のなかに当時の中心地である大和や飛鳥を経由せずにつながる瓦があることがわかりました。岡山の備中地域に秦原廃寺という秦氏関連のお寺だと言っているところがあります。ここの瓦は確かに京都の広隆寺の瓦と似た瓦を使っています。「渡来人ネットワーク」っていうものがあるみたいです。だから今回の海野さんの話、僕にとっては素直に納得できました。とても興味深く、とても嬉しかった発表でした。

そして最後に、吉村武彦さんのご報告です。吉村先生は皆さんご存知のとおり古代史の大家で、僕もいろいろお世話になっている方です。吉村先生のおもな研究対象は文献史料ですが、考古学の方にも凄く詳しくって、いろんな情報を仕入れられています。今回の御報告も横穴式石室などまさに考古学そのもののお話をされていました。

いつも本当に凄いなと思いますのは、今回もある面で佐藤先生からの無理難題かもしれないテーマ

を、きちんとこなしていただいていて、そしていろんな関係史料もずらりと出していただいています。まさに、これからのシンポジウムのベースになるお話をしていただいたものと思っております。特に有明海の問題であるとか、交通路の問題もそうですし、肥後の渡来系の人々の話が今後どうなるのかというところも出していただきました。最近、福岡大学の桃崎祐輔さんも述べられていますが、熊本県内で馬を埋めた穴、馬土坑というものが結構確認されてきていると思います。馬土坑に関しましては、長野県とか群馬県などが有名ですが、福岡でも筑後で確認され、熊本にもかなりありそうだということが分かってきております。熊本の馬、その馬関係にはおそらく渡来系の人が絡むと思いますので、その辺も今後の課題なのかなと思って拝聴いたしました。

さて、このようにいずれのご発表もとても勉強になったのですが、瓦の話はあまり出ませんでした。瓦の文様や技術は朝鮮半島との関係を解明する一つの手がかりになりますので、少しだけお話させていただきます。鞠智城跡の瓦は、以前から百済系だということになっています。僕もその責任の一端を担っていて、大宰府の、大野城跡の主城原地区で出た古い瓦に関しましては僕も百済系でいいんじゃないかと、もう四十年ほど前に言ったことがあります。熊本の島津義昭さんや鶴嶋俊彦さんたちがなされた鞠智城跡瓦の検討の中でも百済系となっていると思います。当時は破片が小さかったんですが、その後、全体像が分かる大きさの瓦も出てくるようになり、改めて検討されるようになりました。

まず、いつも揉めることではあるんですが、鞠智城跡の瓦はいつの瓦なのか、七世紀の後半のもの

なのか、あるいは七世紀末の修理された時のものなのかという問題があります。こちら（スライド1）の出土土器の図をご覧ください。真ん中に土器がありますね。2番、3番、4番、5番の土器は64号建物に伴っていて、この鞠智城最古の軒丸瓦がいっしょに出ています。これらの土器をそのまま見ますと、やはり、七世紀の終わり頃の土器が伴っていますので、鞠智城跡Ⅱ期になると思います。

スライド1

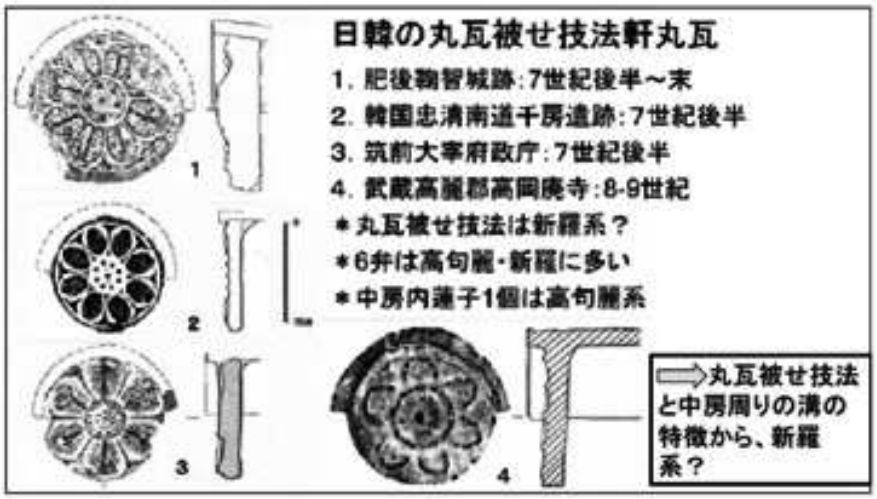
少なくとも建て始めた時の資料はよく判らなくて、瓦には七世紀末頃の土器が伴っていますねということになります。それから、これらの一番上、1番の土器が16号建物に伴っています。これはちょっと古いんじゃないかという考え方もあるのですが、見方によっては七世紀の中頃くらいまで下げることは可能なのです。つまり、この辺が創建段階でいいのかなと思っています。以前、木村龍生さんが鞠智城跡出土の土器について論文を発表され、僕はすごく喜びました。1番の段階の土器が少なくて、2番から5番の段階の土器がたくさん出ますので、これと同じように瓦を使った建物も鞠智城Ⅱ期、七世紀末の辺かなと思っております。

次に、瓦の系譜の話です。まず、スライド2の上二つの写真が

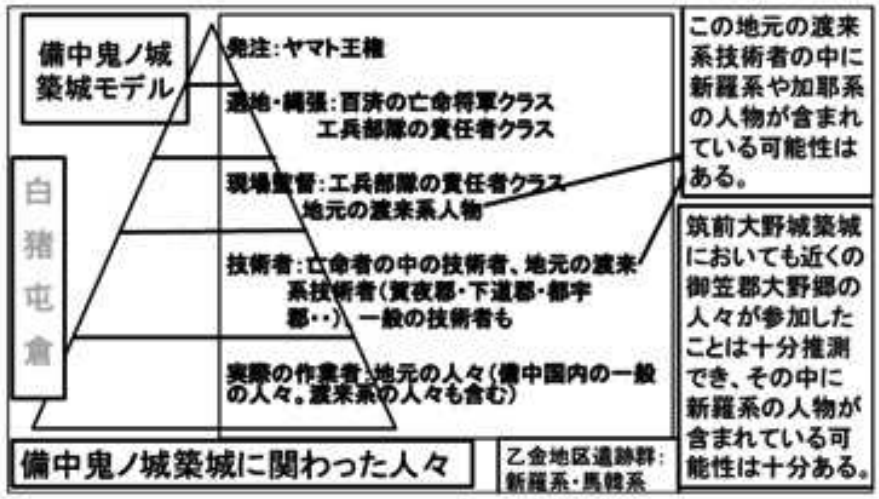
スライド２

温故創生館に展示されている瓦の写真です。特徴としまして、普通の軒先瓦には周縁といって瓦の外側に少し高い縁、外縁、このような縁が丸く巡るんです。しかし、鞠智城の瓦に関しましては、ご覧のように周縁が上半分しかありません。下半分にはないんです。この特徴はとても大事なことです。このような瓦は極めて特異です。韓国でもほとんど出ていなくって、日本でも四か所ぐらいにしかないんです。そんな瓦が鞠智城跡で出ています。大野城跡の一番初めの瓦だと言われているこの瓦（スライド２の下左）は、百済系かどうかまだ決まっていません。僕は昔、百済と思うと言ったんですが、最近は微妙かなという意見も出ています。それから、このスライド２の下列の右側三つが新羅の瓦です。スライド２の下列左から二つ目の瓦は百済地域だった忠清南道で出ていますので「百済の瓦」といわれることがあるのですが、このような瓦は百済の瓦の中では完全に浮いている文様でして、右側のグループ、つまり新羅の瓦だと思っています。かなり言い方がくどくなりますが、百済滅亡後に新羅の人達が百済地域に入ってきて、建てたお寺さんの瓦だ、と思っているのです。ここでは韓国で確認できる初期の瓦塔、焼き物のストゥーパも出て

います。それが日本にもまた入ってくると思っています。この千房遺跡の軒丸瓦は外縁が上半分しかありません（スライド3－2）。右端の月城跡の瓦は、外縁が全周する新羅瓦の一つで、中房のまわりに溝があります。この中房のまわりの溝は新羅瓦の特徴だと思っています。そういう意味で、鞠智城跡の瓦の中房のまわりにも溝がありますので、この瓦は新羅との関係が無視できないのではないかと思っています。スライド3の一番上に鞠智城跡の瓦がありますが、上半部を点線にしています。この2番の千房遺跡の瓦もそうです。これが今のところ瓦当の上部に丸瓦をかぶせたグループのなかで確認できる一番古い、おそらく七世紀の後半の瓦だと思っています。3は大宰府で出ている瓦です。出土点数は少ないんですが、大宰府政庁の付近などで出土しています。この瓦の特徴は六弁です。百済瓦は八弁が多いので、六弁だったら新羅系でいいんじゃないか、と僕は思っています。それからもう一つ面白いのがこの4番の関東の高岡廃寺の瓦です。時期は、八世紀後半から九世紀代のものと考えています。これも丸瓦が上にかぶるだけです。そして、この瓦の特徴は、真ん中の中房の中にぽつんと一個、蓮子があるだけです。このよ



スライド3




スライド４

うな中房の蓮子の表現方法は基本的に高句麗瓦の特徴です。そしてこの瓦が出ている場所は古代の高麗郡（こまぐん）、七一六年に東国の高句麗人千七百九十九人を集めてつくったという高麗郡の地域です。そこで出ているんです。そして、このような瓦は高岡廃寺だけじゃなくって、その周辺でも出ているようです。このように高岡廃寺の瓦は明らかに文様が簡略化し、かなり崩れていますが、丸瓦を上に被せる瓦です。このような珍しい瓦が鞠智城で出ている意味を考えるときに、やはりその多様な入り方は重要だと思います。

すいません。長くなって申し訳ありませんが、いよいよ最後です。以前からこういう話をしますと、なぜ百済系の朝鮮式山城で新羅なんだ？ってよく怒られるんです。でも、発注はヤマト王権で、選地などのプランニングは百済の将軍クラスでもよいのですが、実際に現場は誰がやるの？って話なんです。亡命してきた百済の人たちだけでできるわけがないんですよね。確かに、実際の現場監督は、百済の工兵部隊の責任者クラスの人物でよいと思います。しかし、その人たちだけで一つの山城を造ることができるかというと、そうはならないだろう、とい

うのが僕の意見です。スライド4の築城に関わった人々のピラミッド図は、岡山の鬼ノ城をモデルに作ったものです。現場監督や技術者のところに地元の渡来系人物って書いていますが、この鬼ノ城がある地域は、律令期に賀夜郡になります。「カヤ」郡です。僕、岡山に四十年ほど前に移ってきたのですが、その時から「賀夜郡」という地名が気になっていました。そしていろいろな発掘調査が進む中で、加耶系の考古資料が増加し、考古学的にも「加耶郡」で構わないと思うようになりました。少なくともこの地域の五世紀代の朝鮮半島系考古資料はほとんどが加耶系のもので、加耶の地域の人たちがこの吉備の地にやってきている。さらに五三二年や五六二年に加耶が新羅に合併された時にもこの地域に渡って来たのではないかと思っています。そのような渡来系の人たちの中に築城技術を持っていた人がいた可能性はあってもいいのかなと思っています。さらにその下の技術者の中にもいろんな渡来系の人が入っていたと思っています。吉備の場合ですと賀夜郡阿曽郷、それから下道郡とか都宇郡とかに渡来系の人々の名前が確認できます。そして同じようなことが、筑前の大野城でもあるんだろうと思っています。大野城市で大野城について講演させていただいたことがあります。そのときにこのような話をしましたら地元の方から、新羅が何で入るんや?と質問が出たんです。大野城の古代の地元の一つは御笠郡大野郷です。この大野郷は大野城の北・西側の地域で、近年の発掘調査で新羅系の土器がたくさん出ました。ですから単純に、古代山城は百済系だから百済人が造ったんだ、では済まないんじゃないかと思っています。それから、例えばこの鞠智城でしたら、菊池地域の人たち

が、関与するっていうのは当然あり得るし、その中にもしかしたら渡来系の人も入っているかも判りません。先ほど申し上げた馬関係の話も、熊本県内の北の方でもありそうですので、まだ分かっていない渡来系の人達の存在っていうのが、この辺で判れば、こういう話もできるのかなと思っております。ということで、この瓦に関しては絶対新羅だという気はございませんが、新羅的なものは無視できないんじゃないかということで、お話を申し上げました。すいません。

**佐藤**　ありがとうございます。今日の四人のご報告を踏まえた上で、瓦については、渡来系の瓦の多様性を考えなくてはならない。また、築城の造営過程についても、いろんなレベルがあって、トップに技術を持った百済からの貴族が来ていたとしても、その下で、例えば地元に古くから渡来してきていた人たちの中には必ずしも百済系でない人がいる場合がある、あるいはその中間の技術者にも多様なあり方があるのではないか、というお話でした。ちょっと亀田さんに確認させていただきたいんですが、鞠智城で出土した瓦は、かつては百済系というふうに私達も理解していたわけです。しかし、小田富士雄先生が高句麗系の百済系だと、高句麗百済系瓦だというふうにおっしゃった時には、私も驚きました。さらに、百済系の新羅系だという説もあるようですね。

亀田さんは、新羅系の可能性もあるとおっしゃったのですが、その辺をちょっと御説明いただけないでしょうか。

**亀田**　はい。高句麗百済系といいますのはちょっと複雑ですが、お話しします。瓦仙人って言われた藤澤一夫先生という瓦の大先生がおられて、古い百済の瓦の中には中国の南朝系の百済瓦ともう一つのグループの高句麗系のものがあり、それらが日本に来ているんだっておっしゃっていました。そして、畿内には、確かに両方の特徴をもつ瓦があるというのです。僕はそれを踏まえた上で、もう二十年近く前になりますが、奈良文化財研究所を中心に瓦の研究会をやってる時に、それだけでは説明できない瓦があるのではないか、ということで高句麗新羅系という言葉を使いました。なぜかといいますと、新羅は、古代寺院造営につきましては高句麗や百済より遅れます。新羅の古い段階のお寺と瓦は、高句麗系の技術と百済系の技術で作られています。ですから、瓦の文様も二通りあります。このような寺院造営関係のお話は、海野さんの世界なんですが、新羅の皇龍寺というお寺さんの塔を造るときに百済から工人が来たと書かれています。実際に、そういうことも起こっているのですね。瓦の作り方でいえば、まさに技術的な部分で、見て真似できるものと見ても真似できないもの、つまり見えないところの技術はやはり人が動かないとできないよねって思っています。日本列島最古の本格的な寺院である飛鳥寺で、片ほぞ状二回ケズリという特殊な軒丸瓦の作り方の瓦が見つかっています。

その作り方は百済のものであることを、学生時代に百済地域に留学したときに発見したのですが、同じような作り方のものが新羅にも入っています。つまり、百済の工人が新羅に行って作っているのです。文様も明らかに百済系です。このような瓦を見るとやはり百済新羅系と言わざるを得ないのかな、というお話を二十年前に奈文研で発表したことがありまして、同じようなことが、高句麗新羅系の瓦にも起こっているだろうと思っています。そう意味で区別はすごく難しいですという前提で、中山圭さんが鞠智城跡の瓦を百済・新羅系と書いています。中山さんも、百済と新羅の区別が難しい、とおっしゃっています。ただ少なくとも、新羅にもこのようなものがあるので単に百済系というだけではないでしょう、ということもおっしゃっています。さきほどの技術的な部分で、日本の中も韓国の中もそうなんだと思っています。つまり、高句麗と百済と新羅はその関係が結構ぐちゃぐちゃになっています。さらに近頃の瓦の研究では、中国の南朝の瓦は百済に行っていますが、どうも新羅にも入っているようだといわれ始めています。あの辺も単純ではないのでA、B、Cでパパパッと割り切れるか、といったらそうではないでしょうということです。分かりにくいかと思いますが、人の移住のことも含めて検討していきますと、そう簡単には割り切れませんね、という話です。

**佐藤**　ありがとうございます。丁寧に補っていただきました。

今日は時間があまりないので、大きく二つのテーマについて議論をしていきたいと思っております。

一つは、今お話があったような渡来系技術とは何か。今、何が百済系で、何が新羅系で、何が高句麗系で、何が南朝系かというのは、それぞれが混じっているというお話があり、南朝経由の百済系もあるし、高句麗がかなり影響力を南に及ぼしたときには百済も新羅も影響を受けていたわけです。だから新羅のものでも高句麗系のものもあれば、そうでない百済系のものもある、というような話なんですね。そうすると私達が一言で渡来系の技術や渡来系の遺物といっても、今日の話だと多様性があるということになる。そして、海野さんのご報告でも、いろいろな系譜があって一元的には言えない、というお話があったと思います。また、小山田さんのご報告の中でも、溜め池の技術について新羅系の雰囲気もあり得る、というお話がありました。ですから、初めに渡来系の技術とは何かということを最初に議論した上で、その次に鞠智城における渡来系の技術をどう捉えるかという、もっと長谷部さんのご報告に近づいた具体的なお話をしたいと思います。

それでは最初に、渡来系技術の重層性あるいは多様性といったことについて、もう一度小山田さん、今日のお話で、土木における渡来技術について大変勉強になるお話をしていただいたのですが、土木における渡来系技術の捉え方についてお話いただけないでしょうか。

**小山田宏一**　古代東アジアにおける補強土工法の拡散という地図をご覧いただきたいと思います。その中で古代日本に見られる補強土工法が渡来系情報なのか、という問題は、日本国内に在来的な技術

として存在していたのか否かということがポイントになります。そこで鞠智城の水汲み場の堤に見られる補強土工法ですが、大阪の亀井遺跡、関東地方の三ツ寺遺跡では、五世紀の後半から末頃に、堤（亀井遺跡）や盛土（三ツ寺遺跡）では草本、粗朶、樹皮を敷設しております。このことから、鞠智城の事例は国内の伝統を引いているという考えも当然成立するわけで、事例の比較だけでは単純に結論を出すことは難しいです。やはり、鞠智城の事例を考える場合、鞠智城がどのような歴史的な環境の中で出現したのか、鞠智城をとりまく歴史はどうなのかなどという要素がとても重要になってまいります。こうした理由から、当時の緊迫した東アジア情勢、それに対する倭国のいろいろな対応などを考えますと、やはり鞠智城の技術は山城の造営にともなって新しく入ってきた、導入された技術であると解釈できると思います。

**佐藤**　ありがとうございます。私も鞠智城の池ノ尾門の発掘調査を見た時に、城壁の下をくぐる水路の蓋石が並んだ様子を見て、古墳の天井石の並べ方とすごく似ているな、と思ったことがあります。そういう在来の技術もあるのかと思ったのですが、そういうこともあり得るということでしょうか。

**小山田**　はい。あり得ると思います。

**佐藤**　ありがとうございます。

では、海野さんいかがでしょうか。今話になっている渡来系技術の多様性を建築の方からお話しいただきたいのですが。

**海野聡**　建築に関しては、まず現存するものはどうしても数が限られてしまうというところで法隆寺の特殊性というのが際立っています。それが単に七世紀、八世紀という切り分け方だけではなくて、やはり八世紀以降のいわゆる律令的な技術の体系に対して七世紀というのを考える必要があります。もちろん八世紀以降にも唐の技術が入っているので、ここからの影響がないってわけじゃ決してないのですが、限定的で、たぶん渡来系の影響が強いというものは七世紀の段階での話になります。その上でやはり技術的な話で言えば、伝統的な技術に対して外来的な技術として取り込んでいるものがやはり渡来系の技術です。そして、渡来系のものというのも、例えば形も、構造的なものか、あるいはその形態が持つ意味、理念的なものなのか、という点も重要です。理念的なものまで含めて完全に模倣する、あるいは摂取をするという段階、そこら辺のところが渡来系技術と日本列島で模倣した技術の差となるでしょう。さらに言えば、そこから自身の中で理解をして再構築をするという段階になってくると、それが今度は倭国あるいは日本の伝統技術として昇華されていきます。そういうプロセスがある前半、初期の段階のものが渡来系技術と捉えられると考えています。

**佐藤**　どうもありがとうございます。八角形の建物についても、単一の入り方をしているか、重層的な入り方をしているか、というご報告がすごく面白かったです。もう一つは、建築の場合は必ずしも最先端の一番新しい工法を用いるかというと、そうでなくて伝統的な工法で建てる場合がある、というお話。それも考えなくてはいけないと思いましたが、八角形の建物に関してはいかがでしょうか。

**海野**　そうですね、まず八角形ということで言うと、やはり信仰性というものは強いと考えてます。それは現存する建築もそうですし、近年の菅原遺跡の円堂の発掘など、さらに言えば建てられなかった西大寺の八角塔なども含めて、やはりそういう精神的な中枢部で考えていく方が現実的ではないかな、と思います。

もう一つが、実際に建築が最先端かどうかというお話が今ありましたけれども、ちょうど七世紀の中盤から後半にかけてというのは、日本の中で中国的な宮殿といわゆる伝統的な内裏の関係でも、内裏は最先端の施設かという点を考える必要がある時期でもあります。いわゆる大極殿を代表とするような中国的な建築を導入して、律令国家の体制を整えていく、インフラ整備していくということが最先端として行われています。その一方で、やはり伝統的なものの技術、あるいは形態を継承していて、それにも価値を与えているわけです。こうしたものが同時併存している。その時点で、すでに重層している社会の様相がよく顕れている時代だと思います。

**佐藤**　確かに、奈良の平城宮やそれ以降の平安宮においても大極殿や朝堂院という公的な政務や儀式の場所は礎石建ち瓦葺きの大陸風の建物ですが、天皇が日常住んでいる内裏では伝統的な掘立柱で檜皮葺きの建物を建てるということですから、同時併存であることが普通にあるというのはおっしゃるとおりですね。

あと、鞠智城の八角形建物は二棟あったと思うのですが、高句麗でもそういった宗教的な意味を持つような建物が二棟セットである場合がありますよね。難波宮にも内裏の南門の両側に八角形の仏堂みたいな建物が二棟並んでいます。あれも儀式の場のように使われていると思うのです。二棟並んで、二棟あるのもそういう一定の儀礼との関係というのになるのでしょうかね。それは難しいかナ。

**海野**　ちょっと難しいご質問なのですが、鞠智城の八角形遺構、私も少し検討しましたけど、なかなか建物配置と遺跡内の軸線が明確に一致してこないんです。他の部分の、例えば倉庫群等の規格的な配置に対しても、ちょっとずれてくるところが引っかかるところではある、というところですね。

**佐藤**　これまでのお話を受けて、吉村さん、渡来系技術の捉え方について広い立場からお願いします。

**吉村武彦**　はい。実は今やっている議論はかなり重要な問題を含んでいると僕は思うのです。つまり、

在来系か渡来系かという時に、果たしてそういう二分法でいいかどうかっていうことですね。というのは、最近、国風文化論をどう捉えるのかというのが平安時代の方で非常に盛んになっていまして、単純に言いますと遣唐使の廃止以降、国風化するということなんですけれども、その国風化の内容はどうか、という議論があります。いろいろ論文を見ていきますと、実は単純な古い伝統ではなく、かつて、つまり渡来系の人が日本に持ち込んだ技術の再評価をして、また進めていくということらしいんですね。ですから、在来系か渡来系かという議論の以前に、在来系とは何かということもあるんです。ある意味で言うと、二分法で考える場合、渡来系というより最新の渡来系技術ですよね。それで、在来系といっても、本当に伝統的な手法なのかどうかです。

例えば古墳で言えば、前方後円墳では竪穴式石室は伝統的と言っていいんでしょうか。そこに横穴式石室が受容されます。この石室は、中国の地下式の影響があるかどうか、いろいろ議論があります。それが朝鮮に入って、やがて日本に入ってくる。その時に九州系の人達はすぐには理解できなかったようで、竪穴式と関係する横穴式になります。そして、百年ぐらい遅れて、近畿地方の人が大王墓とかに利用するようになるわけですね。だから伝統的技術という場合も、我々、伝統というと何か全て日本人的なものと理解しやすいのですが、はたしてそういうものでしょうか。

また、音楽なんかもそうですね。雅楽といいますが、本当に在来系というのは吉野の国栖儛とか、あまりないですね。だいたい向こうから入ってきた呉楽だとか、高麗楽だとか。それを日本人という

か当時の倭人は上手くこなして、日本的なもの倭国的なものを作る、ということかと思うんです。そういう意味からいうと、議論であまり在来系とか渡来系とかを単純に捉えない方が良いだろうと思います。それぐらいです。

**佐藤**　ありがとうございます。本日は渡来系技術から見たというテーマですが、これは古代山城を築いた時代の最新の渡来系技術というように普通は考えております。確かに日本におけるいろいろな技術は、大陸や半島から常に渡ってきていますから、どこまでが在来でどこからが渡来かというよりも、いつも渡来を受けとめて上手にこなしていったのが日本の文化の特徴というように考えた方がいいかな、と思いました。

今の渡来系の話につきまして、長谷部さん、鞠智城を調査しているお立場からいかがでしょうか。

**長谷部善一**　鞠智城に今年の四月に来たばかりで今ちょっと勉強している途中の身には非常に難しい質問ですね。でも、鞠智城が建てられた菊池川流域というのは装飾古墳が多く築かれている地域でもあります。鞠智城に見られるような版築というものは、装飾古墳の築造にも使われてきた在来系ともいえる技術でもあります。それが直接、鞠智城の渡来系と言われるものと結びつくのかは私の方もまだ、判断がつきかねます。そういった古墳の石室、石材を押さえるための版築状のものをしてきた地

域ではある、というところがあると考えています。

**佐藤**　ありがとうございました。

これまで、渡来系技術の多様性について考えてまいりました。その渡来系も、それぞれの時代での最先端の渡来系という考え方があるということ、そして渡来系という中でも、朝鮮半島で高句麗・百済・新羅がある時代、あるいは加耶がある時代、それぞれお互いに影響し合いながら日本列島に渡ってきているということで、それらをどう捉えるかはなかなか大変です。遺物を理解するのも、瓦の理解だけでも先ほど見たようにいろいろなとらえ方があるので、本当に大変なことになります。それだけ東アジアの世界が相互に交流しながら、密接に繋がりながら、お互いに影響を与えながら来たのだな、と思います。

また、渡来人あるいは渡来系移住民という意味でいくと、日本列島の人も朝鮮半島に渡っていて、加耶で前方後円墳が出てくるのはそういう人達だと思います。また、熊本の日羅という人は火葦北国造の息子でありながら百済で二番目の官位の達率をもらう高位高官にまで昇っていて、政策顧問として戻ってきてくれ、と倭国の大王が日羅に求める話が日本書紀にあるほどです。倭から向こうに行った渡来系住民、渡来人もいた。このように列島・半島間の渡来については相互に考える必要があると思います。

それでは、もっと鞠智城に焦点を当てた形で、鞠智城における渡来系の技術はどうかというお話にしたいと思います。

今日一番初めに長谷部さんのお話で、鞠智城においてこれまで渡来系技術と考えていたこと、版築のやり方だとか、それから貯水池のあり方だとかについてお話がありました。この版築や貯水池のあり方については、小山田さんのお話もありました。なお版築については、これまで亀田さんがお考えになっていたと思うので、その版築についてのお考えを伺いたいと思います。それからもう一つは石積みですね。これについても亀田さんが研究なさってたと思いますので、まず亀田さんから鞠智城の技術についてお願いしたいと思います。

**亀田**　まず版築ですが、実は、定義が最近また難しくなってきております。國學院大學に移られた青木敬さんという方がその辺を整理されています。実は海野さんや青木さんが奈良文化財研究所におられたころ、奈良の薬師寺の東塔を発掘していました。その時にお邪魔したんですが、青木さんという方は、まさに古代の土木技術に大変詳しい方

で、「棒で突いて地面を硬くするのが版築の基本だ」とおっしゃっていました。僕たちが勉強したころの版築は、「外側に堰板を巡らせ、その中の土を棒で突き固めるのが版築」と習っていたんですけどね。結果的に薬師寺の場合は外側に堰板があったのか、なかったのかっていうのは、どうなったんでしょうか。

**海野**　確か明確には出ていなかったと。

**亀田**　明確には見えなかったのですよね。といいますのが、実は堰板があればその端っこは、棒で突くと斜めに上がるんですよね。それが薬師寺の東塔の場合、礎石のところでは突き棒の痕跡は、まさにそのようになっていたのですが、基壇の端のほうではそのような明確な痕跡がわかりませんでした。それで、青木さんに、この基壇、堰板を使っていたでしょうかねっていう話をしたのです。実は日本の古代寺院の場合、基本的に版築って言っているものには、もしかしたら堰板がないのもあるかもしれない、っていう話が建築の方でもあるんですかね。

**海野**　ちょっと記憶が曖昧ですけれども、確か可能性として考えたのは、堰板を置いてきちんと合理的に少ない労働力でやるであろうと今まで我々は考えてきたんですが、そうではなくて、完成する基

壇より少し大きいところで造って、版築の端を切り落として造っているんじゃないか、と考えたと思います。要はケーキの切端を落とすという、そんなような造り方をしたのではないか、そういう考えもできるんじゃないかというのが、現場で検討した考えだったと記憶してます。

**亀田**　はい、そうしますと今までの定義ってどうなるんだろう?ってことも含めて考えなければならなくなりますよね。中国ではきちんと堰板を使っている例がありますので、朝鮮半島に入ったときに変化したのでしょうか?　少なくとも、岡山の鬼ノ城の版築を調べたときに、前面には当然堰板があります。そして、横板があったかどうかという確認をやっていきますと、ちょうど横板があったと想定されるところの版築層がやはり上がるんです。ということで鬼ノ城の場合には、少なくとも前面と左右の合計三面には堰板があったと思われます。また、大野城にも堰板はどうもあるようですが、それが鞠智城にあるかどうかっていうと実はまだよく判りません。ということで鞠智城では、今後、意識的にまた掘っていただければと思っています。

それから、前面の堰板さえなかったんじゃないかっていう例が岡山の大廻小廻山城です。このような見方をすると版築の仕方にも幾つかグループ分けが出来そうだね、というのが見えてきます。そのような見方で改めて鞠智城の版築を調べていただくと、グループみたいなものも分かるのかなって思います。そういう意味でも版築のあり方っていうのが、先ほど海野さんはじめ皆さんが仰っている日

本化とかいうことなのか、技術者がいなくてそうなったのかとかいうのは、やはりそれぞれの例に当たらなきゃいけないのかなって思っています。

それから、石積みに関しましては、鞠智城の石積みはちょっとまだ難しい状況ですね。もう少し調査が進まないといけないと思っています。確実に石積みで古代山城を造っている例は対馬の金田城だけです。岡山の鬼ノ城も石をたくさん使っています。復元されて有名な西門の横に高石垣と呼んでいる部分があるんですが、僕は積み直しだと思ってます。地元の方と意見が違うんですが、高石垣はお城が生きてる（使用されている）段階の積み直しだと思っています。なぜかといいますと、石垣の裏側の掘方が弧状になっている、つまり一回崩落したから積み直したんだと思っています。さらに言いますと、だからこそ正面からみた石垣の形がおかしいと思っています。本来であれば石垣の左右の端は真っ直ぐ上がっていくものと考えています。石垣の壁が、山なりになっているのは積み直したからだと、僕は考えています。そして、大野城の石積みに関しては、比較的多くの場所で積み直しされていますから、僕にはオリジナルがよく分かりません。そういうところも含めて、石垣に関しては改めて調査検討しなければならないと思っています。

**佐藤**　基肄城はどうですか。基肄城の水門。

**亀田**　基肄城の水門も、おそらく皆さん、答えが出てないと思います。基肄城には昔からの大きな水門がありますよね。あれが当初のものなのか、それとも後世のものなのか判っていません。と言いますのは、水門の向かって左側の崩れた部分を二〇一〇年頃から発掘しましたら、中に小さな水門が三つ見つかりました。あそこも前面はほとんど崩れていました。そんな事情で残念ながらもう一つよく分かっていません。今回の基肄城の三つの水門も、後ろ（城内）側は掘っていないと思います。このような石組みの城壁はやはり前後左右をきちんと確認しないと、単に表面から見た石積みだけでいろいろと発言するのは、やはり難しいです。水門の後ろ側を掘っていただき、積み直しがあるかないかも検討しないと、なかなか分かりません。繰り返しますが、基肄城の門のところの大きな、立ってでも入れる（ちょっとオーバーですが）、腰を屈めれば入れる、水門ですと、敵が入ってきますよね。実際に小さな水門が三つ出てきましたので、やはりあの辺も、もう一度検討する必要があるのかなと思っています。ということで、石積みに関しましては、申し訳ありませんが、あまりよく分からないのが現状です。

**佐藤**　はい。ありがとうございました。

　では小山田さん、鞠智城について今日のご報告にもありましたが、もう一度今までの話を受けとめて、いかがでしょうか。

**小山田**　亀田先生の、新羅には南朝の瓦が入っているという話は、とても興味深く拝聴しました。実は新羅には「塢」と呼ばれる水利施設があります。慶尚北道の菁堤という溜め池の碑文を見ますと、新羅では「塢」から「堤」に変わることが知られています。古代半島の「堤」は溜め池を表す言葉で、「堤」の築造技術自体は百済で始まったと考えています。一方、「塢」は中国の南朝に多く、「塢」が新羅に出現することと、南朝系瓦の出現は共通する点がありそうで、ちょっとゾクゾクしました（笑）。技術の話ですが、私が扱っているのは、堤の補強土工法という限られた範囲の土木技術になります。大事なことは、補強土工法を使って堤を造るプランを鞠智城造営の土木技術者が持っていたということです。補強土工法の入手方法などが分かれば、より具体的に技術の系譜が辿れるものと思います。ただし、考古学だけでこの問題を解決するのは難しいようにも思います。

**佐藤**　日本国内の他の山城とか、あるいは溜め池でもいいのですけど、いかがでしょうか。

**小山田**　古代日本では溜め池を除くと、補強土工法を使っている堤はあまりないような気がします。溜め池ですと、大阪の狭山池と久米田池、福岡県ですと京都郡の池田遺跡などがあります。溜め池の場合、堤の補強土工法だけを切り取るんじゃなくって、溜め池を造る技術体系の一つとして補強土工法を理解・評価しなければなりません。鞠智城でも補強土工法をふくむ技術体系が問われることになり

ます。

**佐藤**　粗朶敷きについては、私、福岡県の大宰府の水城の西門、あるいは御笠川沿い、鉄道沿いのところの粗朶敷きが一番見本的なものと思っています。あれはどうでしょうか。半島との関係も含めて、粗朶敷きや補強土工法としていかがでしょうか。

**小山田**　そうですね。水城の粗朶敷については、佐賀大学にいらっしゃった林重徳先生のご研究があります。水城は真ん中に御笠川があり、その近くで地盤が軟弱なところは何層にもわたり粗朶を敷いています。ところが、西の丘陵に取り付く西門付近は地盤が固く、粗朶の敷設は見当たらないようです。このような特徴から、水城では地盤の状態に適した工法で施工していると復元できるわけです。この場合、地盤の強弱に応じて工法を使い分けるという経験がなければ、現場で的確に指導・指揮することは難しいと思います。このようなことを考えると、扶余羅城で地盤の強弱に応じて工法を工夫している百済の情報と考えてよさそうです。

**佐藤**　水城の場合は六六三年の敗戦の後、六六四年に造っているということで、百済の技術を割と直接的に導入してできたと思ってよろしいですよね。渡来系の技術というと、水城の西門などで柱を埋

め殺している工法がありますが、それも朝鮮半島系の技術と思ってよろしいでしょうかね。

**小山田**　ソウル特別市の風納土城は百済最古の王城で、これまでの調査によると、城壁の版築工事で、堰板を留める柱を抜き取らず、そのまま埋め殺している事例が確認されています。このような工法は山城の報告書にも確認できるので、韓国では広く行われていたように思います。

**佐藤**　ありがとうございます。海野さん、先ほど、八角形建物について質問したのですけれども、建築史の立場から、鞠智城における渡来系工法について、何かコメントいただければありがたいです。

**海野**　はい。八角形以外にもやはり注目すべき点というのがあって、一つが規格性の問題だと思います。例えば、大野城を始めとする他の倉庫群で施工精度が相当高い制度で施工されているのに対し、鞠智城がどういう精度でなされているのかという点です。これに関しては、遺構の施工精度というところというところと、先ほどの在地で実際誰が施工したかというところにも関わってくる問題かと思いますので、一つの検討材料になると思います。

もう一つが、やはり城門に関するところ、特に柱間装置、そして扉をどう設置するかに関連するところです。建築の側からすると、古代山城といえば軸擦穴のある礎石というぐらい、やはり密接に関

係していると思います。それは先ほどの私の報告でも申しましたように、山田寺などでは地覆石に穴を彫る例はありますけれど、日本では基本的に木の部材に穴を開ける方が一般的です。これに対して、古代山城に関しては石製の軸擦穴を持つものとなります。渡来系の技術であっても少なくとも日本に入ってくると基本的に石じゃなくて木でできるものは木で造るという方向に変わってくるのが大まかな傾向としては多いのです。ですから、山田寺の技術系統と解らないですけれども、やはり古代山城の石製の軸擦穴は着目すべき点と思います。

**佐藤**　鞠智城の城門には、扉を立てるための唐居敷があります。扉の両側の柱を据えて、その間に開く扉を設定するための設備ですね。その扉板をギーと開けるときの軸の穴が大きな石の唐居敷に刻んであって、堀切門の扉の幅は三メートルぐらいになります。門の構造自身も知りたいのですけど、扉の構造がある程度分かるということですよね。

**海野**　そうですね。門に関して、礎石の位置からある程度、規模なり、切妻の屋根なり、というのは想定できます。扉を受ける装置が石製というところに関して言うと、時代が下ってしまいますが、絵巻物等に描かれる門は、基本的に石製ではなくて木製の唐居敷で描かれることがほとんどです。というわけで、少なくとも後の時代の資料と比較をすると、石製というのはやはりこの時代、すなわち木

製の加工よりも石製の加工の方に長けている時代の特徴と思われます。この辺は、半島系、大陸系、というところを強く示唆しているのではないかと思います。

**佐藤**　唐居敷は確か花崗岩を使っていましたから、固い石を確保するだけの技術の高さもあった、というわけですね。

**海野**　そうですね。よくこういうときに私がお話するのが、例えば高床の正倉院正倉ですと、通常、石を平らにして柱の長さを一緒にすれば、床の高さがきちんと揃う、と普通は考えるんですけれども、必ずしも礎石の上面をきっちり高さを揃えて加工するわけではなく、柱の下面を礎石の凹凸に合わせているんです。石の加工が大変なのです。あるいは、平城宮第一次の大極殿院といった中枢の一角でも自然石を使っています。木の方を石に合わせるなど、普通で考えたら逆だと思うような方法をとるほど、石よりも木を扱う方が得意というのが日本の考え方です。そのため鞠智城の石製の軸擦穴が渡来系との関係が強いという考えは、こうした背景とすごくマッチすると思います。

**佐藤**　唐居敷に見られる扉の構造などは、渡来系の技術かもしれない。

**海野**　渡来系の技術の要素が強く出ている。あるいは、少なくとも石の加工などについて言えば、渡来系の技術と見た方がよく、日本の技術でできたんだ、とすると逆に、なぜそれ以降の時代には使ってないのか、という疑問が次に出てきてしまうというところですね。

**佐藤**　扉を動かすときの軸に鉄を使っていますよね。きっと、それもありますよね。ありがとうございました。

吉村さん、すいません。鞠智城に絞ったかたちで渡来系技術ということを議論しているのですが、一言お願いできますか。

**吉村**　今日、小山田さんが報告されましたけど、曲池とか苑池とかの施設があるとすると、やはり鞠智城の存在理由ともつながりますね。鞠智城は、大野城・基肄城と同じように長く存在しますね。鞠智城の池遺構は必ずしも明らかではありませんが、そこから出ている水の流れが、仮に苑池とか曲池とかの機能に関係するようですと、鞠智城がなぜ造られたかということとも関係してくるので、重要だと思います。池という公の施設を造ったとき、何か儀礼が行なわれるような設備があるとしますと、そういう施設を作った理由が関係してくるからです。

実はもう一つ、八角形の建物が話題になっています。これは前期難波宮にも二つあるのですが、天

皇陵も八角形なのです。推古朝以降、かなり後になりますが、その意図と意味が気になります。八角方面の支配、つまり八方の支配とかで説明する人もいますが、まだよくわからない。鞠智城を建設し維持する場合、何らかの祭祀が行なわれたことは間違いないだろうと思います。都でも国衙でも祭祀はやりますね。その祭祀のあり方というのは、今までの鞠智城の議論ではあまりされていません。

これまで遺跡では、わからない遺跡でも、これこれの遺構は祭祀遺構だ、と指摘することがありますね。下総の市川市史編纂事業の関係から、市川市の北下遺跡という水辺の祭祀に関心があります。最近では各地で水辺の祭祀の遺構が見つかって話題となっていますが、鞠智城の遺構が水辺の祭祀と関係があるとすれば、池を発掘すれば関連資料が出てくるかもしれません。それと関係して、八角形の建物が持つ意味です。今日、八角形の建物には二つの造り方があると言われましたので、どちらの造り方をすれば、どういう意味を持つのか、ということがわかるかもしれません。そうすれば、この鞠智城における八角形建物の意味も明らかになるだろうと思います。

そういう意味では、曲池のような性格をもつかどうかということ、八角形の建物の用途が明らかになること、これら二つがわかれば、鞠智城の存在理由もかなり明確になるのではないでしょうか。

**佐藤**　はい。大事なお話だと思います。苑池の場合は、それを鑑賞する建物が近くにあってもいいかなと思います。あと、池の場合は多分、古代の日本の七世紀～八世紀の苑池だと、洲浜を築いたり、

立石があったりしますので、それをどう考えるかということから遺構の評価をする必要もあると思います。水辺の祭祀をするような場所が苑池とか、今日説明のあった水が流れているところであることはありえて、百済の金銅仏が出土したというのも関係する場合があり得ると思います。

それ以外に儀礼の場を考えると、後の九世紀ぐらいの資料だと正倉院の稲穀を収めた倉庫群も出てきます。古代の正倉院にもそういう儀礼の場はあった、と思います。あと、古代の城は、単なる城郭だけではなくて、辺境を護るものですから、護りのための祈りというのは必ず付いてくるのです。これはお隣の福岡県の大宰府の北の大野城でも、ちょっと時代が下るかもしれないけれど、四天王が祀られて国境を護る祈りがある。私は鞠智城にもそういう祈りの施設があってもおかしくないと思います。

さて、ここまでいろいろな意見が出てきたのですけれども、長谷部さん、鞠智城を護って、また調査研究されるお立場から、今までの話を踏まえて、お話をお願いしたいと思います。

**長谷部**　はい、今、鞠智城の城門をまず復元をして、今後の検討材料として使えるようにというふうなところで考えております。深迫門の発掘調査も今年もやっていますので、今日、話題となった版築の見方、考え方もしっかりと捉えた上で報告書にきちんと反映させて参ります。

**佐藤**　当面、城門についての調査成果が報告書になるということで、大変楽しみにしたいと思います。最後に、ちょっと時間過ぎているのですが、会場に朝日新聞社の編集委員の中村俊介さんがいらっしゃると思うのですが、一言お願いしたいと思います。

**中村俊介**　朝日新聞の歴史担当をやっています編集委員の中村俊介と申します。もう時間も過ぎていますので、手短に感想を言わせていただきます。

私、東京とか大阪とか福岡とかを行ったり来たりして仕事をしておりますけれども、先月大阪から福岡の西部本社に戻ってきたばかりなのです。生まれは熊本市なので高校まで熊本におりまして、やはり鞠智城というのは非常に馴染みが深いところなのです。福岡におりますと、先ほども何度も出てきました大野城とか基肄城とか、あるいは水城とか馴染みがあるのですけれども、そこには石垣とか礎石とかしかありません。

ところが、やはりこの鞠智城というのは非常に情報量が多い。そして話題にも事欠かない。溜め池といいますか貯水池もありますし、菩薩立像が出土したり、あるいは「秦」と書かれた渡来系の木簡も出土したりしています。今日もたびたび話題となった八角形の建物は孝徳朝の難波宮と同じ時期ぐらいなので関係あるのだろうかとか、あるいは長者原伝説もありましたね。さらには、この立地が有明海を向いたものなのか、大宰府方面だけなのか、あるいは南九州の隼人とかも見据えたものなのか、

などいろいろと議論があったと思います。そういう議論、古代の謎がギューッと凝縮されたところ、それがこの鞠智城ではないのかなと思います。

さらには古代山城の中で、大野城とかかなり山の中ですけれども、鞠智城は非常に行きやすい。復元建物もありますし、非常に見晴らしもよく、ピクニックにも行ける。温故創生館もございます。そういう意味では、この鞠智城は日本の古代山城の中でも非常にその活用に適したところではないのかな、というふうに思います。

こちら福岡の西部本社に戻ってきて、いの一番に熊本城に行ってきました。熊本城の天守閣、立派な博物館として見学施設にもなっておりますし、確かテレビ朝日系列「歴史の専門家が選ぶ難攻不落！最強の城総選挙」のトップになったと思います。お城のトップ！　この意味で近世の熊本城、それから古代のこれもトップ級の鞠智城がございます。先ほどころう君も鞠智城をどんどんＰＲしていきたいと言っていましたので、熊本においては鞠智城と熊本城のツートップ、古代と近世の二つのお城をどんどんＰＲして、そして活用していただければと思います。

私も報道の人間ですので、お手伝いを可能な限りしたいと思います。どうもありがとうございました。

**佐藤**　どうもありがとうございました。ちょっと時間が過ぎてしまいました。まだまだ鞠智城を基に

して古代史の謎に迫らなくてはいけない課題がいっぱいある。まだまだ勉強が全然足りないな、という感じがいたしています。今後とも、こうしたシンポジウムをまた開けるとありがたいと思いますので、どうぞ皆様も御期待いただくとともに御協力いただければ幸いです。今日はどうもありがとうございました。

## 亀田修一先生のコメントに関する参考文献と図出典

［軒丸瓦の系譜に関する主な参考文献］

・百済系：島津義昭・鶴嶋俊彦ほか『鞠智城跡』（一九八三年）熊本県教育委員会など

・高句麗百済系：畿内経由：小田富士雄「鞠智城創設考」『古代九州と東アジアⅡ』（二〇一三年）同成社

・百済・新羅系：中山圭「鞠智城出土の軒丸瓦－朝鮮式山城古瓦の一様相－」『九州考古学』八〇（二〇〇五年）九州考古学会など

［スライド図出典］（左記以外は、亀田が撮影・作成）

スライドⅠ：『鞠智城跡Ⅱ』（二〇一二年）熊本県教育委員会・『鬼ノ城』（二〇一〇年）岡山県立博物

館

スライド2：下列右側3点：『新羅瓦塼』（二〇〇〇年）国立慶州博物館

スライド3：1・3：『鞠智城跡Ⅱ』（二〇一二年）熊本県教育委員会、2：『千房遺跡』（一九九六年）公州大学校博物館、4：『高岡寺院跡発掘調査報告書』（一九七八年）高岡寺院跡発掘調査会

# 渡来系技術の導入と古代山城　補足資料

吉村武彦

◇「東アジア世界論」（西嶋定生説）
　＊地域　中国・朝鮮諸国・日本・ベトナム
　＊指標　①中国で発明された漢字、②政治思想としての儒教、③政治制度の基礎となった律令法、④中国で翻訳された漢訳仏典に基づく仏教
　＊問題点　礼制の扱い、産業技術などの評価

◇ ５世紀の河内湖周辺の渡来系移住民
　＊ヤマト王権の経済基盤
　　・須恵器、韓鍛冶、馬飼集団
　＊有明海沿岸　（江田船山古墳）

◇ 大宝令と養老令における「才伎」の扱い
　＊戸令没落外蕃条を通して　⇒ 史料

◇ 『日本書紀』の渡来系才伎
　a 百済
　　＊今来才伎（雄略７年条）、手末才伎（雄略７年条、陶部、鞍部、画部、錦部、訳語）、手末才伎（雄略14年条、漢織・呉織・衣縫）
　b 高句麗
　　＊巧手者（仁賢６年条）
　c 新羅
　　＊才伎10人（大化５年）、才伎者（斉明元年）
　d 大蔵省（百済手部（雑縫作事））、内蔵寮（百済手部（雑縫作事））

◇『類聚三代格』
　　＊天平勝宝９年８月８日太政官謹奏　⇒ 史料

◇「壬辰年韓鉄□□」木簡
　　＊元岡・桑原遺跡群（福岡市西部）
　　＊壬辰年　６９２年（持統６）
　　＊筑前国志麻郡韓良郷（加良須知）

◇ 韓鍛冶
　　＊養老６年（722）３月辛亥条　⇒ 史料
　　・近江、丹波、播磨、紀伊

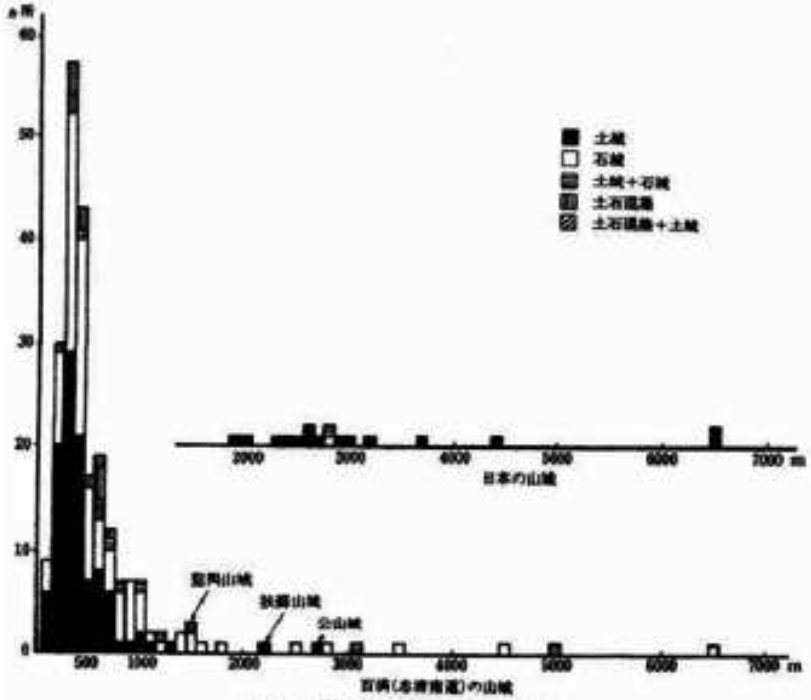
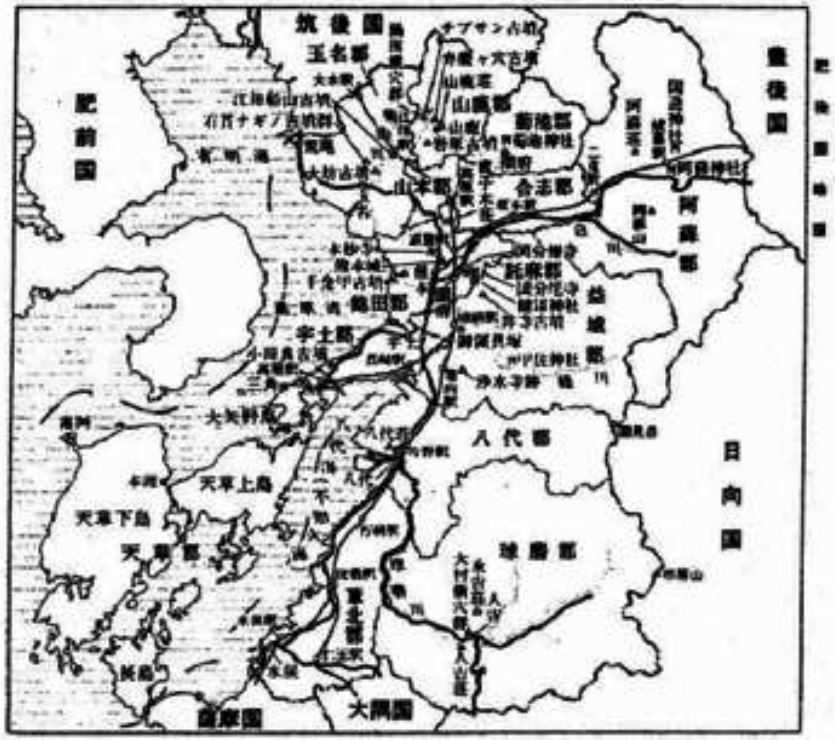



図2　百済と日本の山城の大きさと数

（亀田修一　図）




（国史大辞典）

⑧

表1 天智朝以降の蝦夷を除く蕃史人の帰化地(『日本書紀』『続日本紀』より)

| | 西暦 | 年/月 | 記事 |
|---|---|---|---|
| ① | 665 | 天智 4/2 | 百済の百姓男女四百余人を以て近江国の神前郡に居く。 |
| ② | 665 | 天智 4/3 | 神前郡の百済人に田を給ふ。 |
| ③ | 666 | 天智 5/是冬 | 百済の男女二千余人を以て東国に居く。凡て僧と俗(僧俗)とを択ばず、天武年(663)より起りて三歳に至るまで、並びに百の女を喚へり。 |
| ④ | 669 | 天智 8/是歳 | 余平余自信・余平鬼室集斯等男女七百余人を以て近江国の蒲生郡に遷す。 |
| ⑤ | 675 | 天武 4/10 | 筑紫より唐人三十口を貢れり、皆も近江国に遷はして安置す。 |
| ⑥ | 684 | 天武 13/5 | 化来の百済の僧尼及び俗、男女并て二十三人、皆武蔵国に安置す。 |
| ⑦ | 687 | 持統元/3 | 投化の高麗五十六人を以て常陸国に居く。田賦の恩恕ひて生業を安らかしむ。 |
| ⑧ | 687 | 持統元/3 | 投化の新羅十四人を以て下野国に居く。田賦の恩恕ひて生業を安らかしむ。 |
| ⑨ | 687 | 持統元/4 | 筑紫大宰、投化の新羅の僧尼及び百姓の男女二十二人を献る。武蔵国に居く。田賦の恩恕ひて生業を安らかしむ。 |
| ⑩ | 688 | 持統 2/5 | 百済の敬須徳那利を以て甲斐国に寄す。 |
| ⑪ | 690 | 持統 4/2 | 帰化の新羅の韓奈末許満等十二人を以て武蔵国に居く。 |
| ⑫ | 690 | 持統 4/3 | 帰化の新羅人等を以て下野国に居く。 |
| ⑬ | 715 | 霊亀元/7 | 馬寮諸人、外従八位上矢田部造老並びに新羅人七十四家を武蔵国に貫して、始めて高麗郡を置つ。 |
| ⑭ | 716 | 霊亀 2/5 | 駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野の七国の高麗人千七百九十九人を以て武蔵国に遷し、高麗郡を置く。 |
| ⑮ | 733 | 天平 5/4 | 武蔵国埼玉郡の新羅人俗郎ら男女五十三人を、姓に依りて金の姓とす。 |
| ⑯ | 758 | 天平宝字 2/8 | 帰化の新羅僧三十二人、尼二人、男十九人、女二十一人を武蔵国の閑地に移す。是に始めて新羅郡を置く。 |
| ⑰ | 760 | 天平宝字 4/4 | 帰化の新羅の一百三十一人を武蔵国に置く。 |
| ⑱ | 761 | 天平宝字 5/正 | 俘虜・武蔵の二国の少年、国毎に各人をして新羅語を習はしむ。 |
| ⑲ | 766 | 天平神護 2/5 | 上野国に在る新羅人の子、午足ら一百九十三人に姓を吉井連と賜ふ。 |

(田中史生 表)

[14] 門のもと。

[15] 原文に「僧、俗是」とある。シマタクに同じ。ここにコマ点では「ハ、カニシテ」と訓める。又、新訳・外国本四種のことばをセサブ・ヒという。小川本系統の新撰字鏡増補版に「加牟波比」、古訓天理図書館蔵、佐比宮内庁蔵)とある。

[16] 新羅を新訳した文で、他人をはばかって真実をそれとなく伝えたことばだから、原義は明らかでない。後文の韓語は行方、通訳は身体の意とするが、あるいは語源の異れ、イは本来発音語ではないが、軽く添字をしている時。

[17] 原文、韓語、これをレンカテと訓むのは通説。

[18] 底本、欠いて他本により補う。

[19] オヘ・ヲは訳も。一九頁注三〇。

[20] 高津・倭事は百済の官位十六階の第三・第四。一頁注一。参官は官名の人名か不明。一二四頁注三六。翻訳・会話・会話知・数字等は人名。カタートは船の船を表も、その方向をきめる等。下文による上陸等が記録。参官が記録の後らして、翻訳・会話も記録は高津・参官の語下であるから、ここの人名記録には高津があるかと思われる。原本の名前がみえないこと、記録が倭事であることもふかしい。カタ下文一四六頁二四行目下参照。

一 文天、原本欠。「日本紀私記甲本」に「日本紀竟宴和歌、水手為百」とある。カは河を横る半一般をいう。

[21] 白雉元年(六五〇)の一種。難波に遷る場所は遠賀郡説もある。たのであろう。

[22] 原文元年三月条に難波崎、上宮記に以加之古道とある。鵜の小手子は孫娘天皇の記とな

[23] 一頁注二一二。

[24] 原文にある。六国史一七。

[25] 原文原の門か。や政をきく殿、名義抄にオヤクリアドノノ訓り、八色のたり立ったりして文を読上をきうことも、名義抄に「宣読、アルマウ」とある。

[26] 大伴氏は名地の名代(行)の部(伴)を統率して宮門を警護した。たので、部原の職員だ。古来注目されて、大伴氏を表記と呼んだのであろう。一頁注一四。

[27] 原は欠損・脱に対する敬意を表わす語。使って表記。オホキミ。

[28] 原外、原脚です。一二六頁注二〇。

[29] 原脚は天皇天皇の最高称号。大王家のための名代とされている。原脚(原真)は名代の部を管理する国造の一族の子弟から中央に出仕して宮廷の警衛に当るもの。一四二頁記神社「名代・子代」、原脚で、下二段活用タマフは自己

⑨

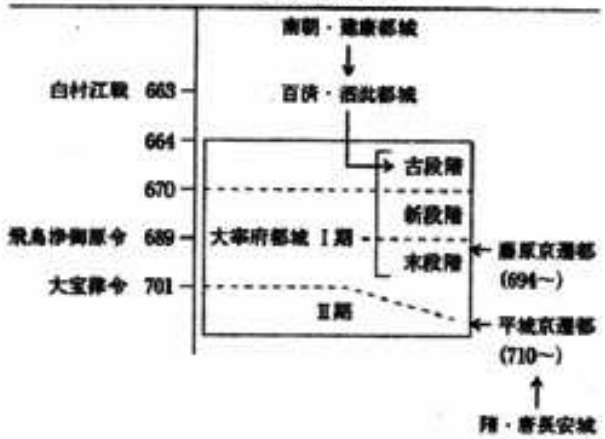
## 敏達十二年条

是歳、復、吉備海部直羽嶋を遣して、日羅を百済に召す。羽嶋、既に百済に之きて、先ず私に日羅を見むとして、謂り告らく、「汝が国の門庭に泊く、依ありて、家の裏より来る。軽捷有り。雄誥を用て言はく、「汝が根の内に入れよ」といひて、即ち人衆出ぬ。羽嶋、便に其の意を察りて、後に随ちて入る。是に、日羅、迎へ来りて、手を牽りて座に坐らしむ。密に告げて曰はく、「倭国に聞くならく、百済国の主、天朝を畏び事らく、臣を率遣して後、誓めて重したまはじと。所以に、争悟みて殖め滞りぬべずと、勢を営する時に、厳しく繒き色を飾せて、偽しつつ急に召せ」といふ。羽嶋、乃ち其の計に依りて、日羅を召す。是に、百済国の主、天朝に怖ち畏みて、敢へて勢に違あず。来遣すに、日羅・恩率・徳爾・余自信・余自勢・木劣不麻呂・許勢小徳・物部依網連乙等・若干人を以てす。日羅等、吉備児島屯倉に行き到る。蝦夷、大伴糠手子連を遣ひて、慰め労ふ。復、大夫等を館の館に遣ひて、日羅を訪はしむ。是の時に、日羅、甲を被、馬に乗りて、門の庭下に到る。乃ち館の前に立む。進退ひ跳み、駿き悦みて曰はく、「我が国の宮殿、高く天皇の世に、我が君大伴金村大連、国家の事業に、勇武に使しし、大王北国、遠荒郡郷部神和新皇の子、既、座事日羅、天皇の召すと聞きたまへて、恐り畏みて来朝り」とまうす。乃ち其の甲を解きて、天皇に奉る。乃ち館を阿斗桑市に徙りて、日羅を住らしめて、館の隣に供給ふ。

⑦

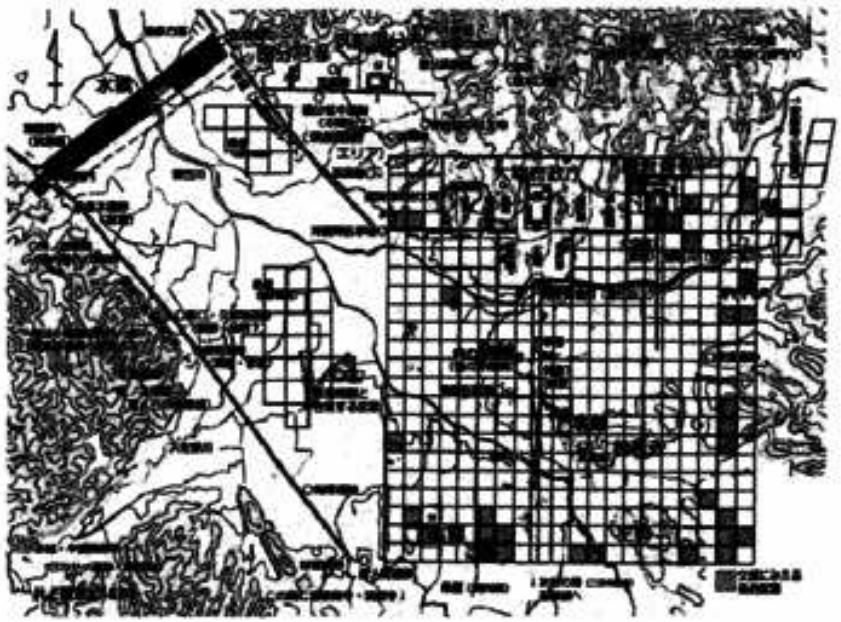
（概説 韓国考古学）

大宰府都城の系譜




（小田富士雄 図）

⑧



（井上信正 図）

⑤

| | 第1段階 第2段階 第3段階 |
|---|---|
| 第1系統 | ・金田城（667） |
| 第2系統 | ○大野城Ⅰ期（665）　◎Ⅱ期（8世紀初）<br>○水城（664）<br>○基肄城（665）？<br>○鞠智城（698以前）？ |
| 第3系統 | ・屋嶋城（667）？<br>□鬼ノ城<br>□讃岐城山城<br>□播磨城山城？<br>・大廻小廻山城<br>・永納山城 |
| 第4系統 | ・阿志岐城<br>・雷山城<br>・御所ヶ谷城<br>・高良山城<br>□石城山城<br>・女山城<br>・杷木城<br>・おつぼ山城<br>・帯隈山城<br>・鹿毛馬城<br>・唐原城 |
| 畿内 | ○川原宮（655）？<br>・高安城（667）？<br>◎藤原宮（694） |

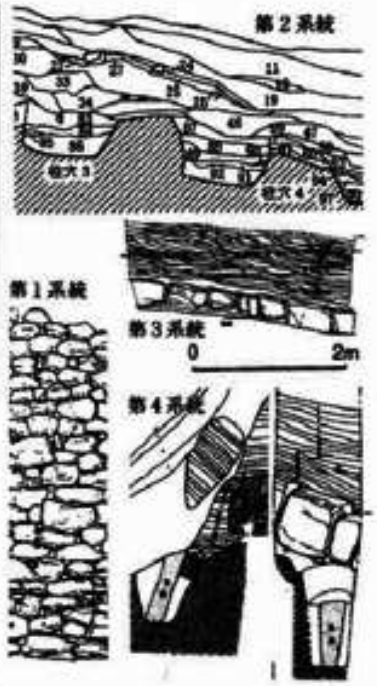



図4　古代山城の城塁系統と築城開始時期編年　○円柱刳込唐居敷、□角柱刳込唐居敷、◎礎石造ち門礎、・他型式門礎又は無し。
（　）は『日本書紀』に基づく年代。右図は城塁の外側立面で、第1系統：石塁（金田城）、第2：石材不用土塁（大野城）、
第3：割石列石土塁（大廻小廻城）、第4：切石列石土塁（御所ケ谷城）。各報告書図を改変。　（稲田孝司 図）

⑥

出土土器からみた古代山城の時期消長表

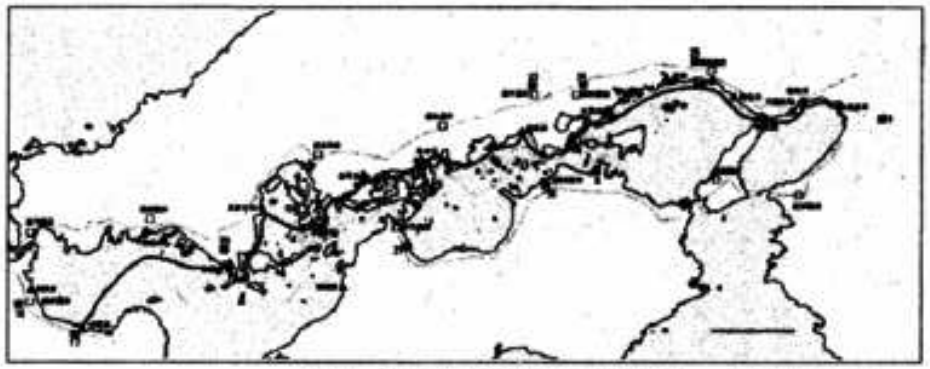
| 学史的な分類 | 山城名 | 時期 7世紀 | 8世紀 | 9世紀 | 10世紀 |
|---|---|---|---|---|---|
| 朝鮮式山城 | 大野城 | | | | |
| | 基肄城 | | | | |
| | 金田城 | | | | |
| | 屋嶋城 | | | | |
| | 高安城 | | | | |
| | 鞠智城 | | | | |
| 瀬戸内の山城（神籠石系） | 播磨城山城 | | | | |
| | 大廻小廻山城 | | | | |
| | 鬼ノ城 | | | | |
| | 讃岐城山城 | | | | |
| | 永納山城 | | | | |
| | 石城山神籠石 | | | | |
| 九州の山城（神籠石系） | 御所ヶ谷神籠 | | | | |
| | 阿志岐山城 | | | | |
| | 高良山神籠石 | | | | |
| | 雷山神籠石 | | | | |
| | 女山神籠石 | | | | |
| | 鹿毛馬神籠石 | | | | |
| | 帯隈山神籠石 | | | | |
| | おつぼ山神籠石 | | | | |
| | 杷木神籠石 | | | | |
| | 唐原山城 | | | | |
| | 備考 | ■出土遺物などからみて確実<br>▨可能性がある<br>▩出土遺物はあるがごく少量であるなど不確実 | | | |

（赤司善彦 図）

④

図43　大宰・総領制と古代山城の分布（「古代山城の分布」（「屋嶋城が築かれた時代」より）をもとに作成）

（向井一雄 図）



第2図　瀬戸内海の航路と駅路・古代山城　（近江俊秀 図）

③

2　凡大学生。取五位以上子孫。及東西史部子為之。若八位以上子。情願者聽。
国学生。取郡司子弟一為之。大学生足者補。国学生闕可補。並取年十三以上。十六以下。聡令者為之。
凡そ大学の生には、五位以上の子孫、及び東西の史部の子を取りてなよ。若し八位以上の子、情に願はば聴せ。国学の生には、郡司の子弟を取りてなよ。大学生は式部補てよ。国学生は国司補てよ。並に年十三以上、十六以下にして、聡令からむ者を取りてなよ。

2（大学生条）大学生・国学生の入学資格に関する規定。

大学寮十道四科の入学資格は、職員令では二〇のほかに家伝三十人という規定があるが、学令の大学生、定員外生の、後のいわゆる明経道を主科としている。

五位以上子孫一令制で五位以上を貴族に準別（一般的・官職的）の特権により同等するはうが有利だったので、なかなか大学には入学しなかったらしい。

東西史部一五・六世紀頃の帰化人の子孫で、代々文筆の業務を掌とし、多くは史の姓を有した諸氏。大和と河内に多く居住し、大和の東漢氏（坂上氏）や河内の文首氏（船氏）がその中心的存在であった。

八位以上子一六位・八位の者の子。位子一軍団補任（→）という。

此例。子孫。及東西史部。謂。居在畿城左右。故曰東西也。前代以来。非世襲業。或爲史官。或爲博士。因以爲姓。然猶之史也。穆云。東西史部。謂居住東西。世習史部。也。凡是史部。前代以来。或作史官。或爲博士。史姓。東西文部亦是。史部稱見録歟。今古記云。東西史部子。謂倭川内。文忌寸等是。東西史部子者。未知錦織並同不。穴云。東西史部。分貫於外國者。亦補大學生无妨。其非東西史。而自餘史姓之輩。補國學生耳。未審文意。不更勘籍。補大學生耳。外國并取用。悉聞。免脱。不依古記。

子。爲之。若八位以上子。情願者聽。謂。八位以上者。内外並同。子者不論嫡庶也。穆云。八位以上子。内外並同。一云。内八位之子不論嫡庶何者。兵衛不足者。取庶子歟。古記云。同。若八位以上子。者

②

## 『日本書紀』による6世紀前半の百済と倭国の主要記事

| 西暦 | 和暦 | 記事 |
|---|---|---|
| 509年 | 継体 3年 2月 | 倭が、百済に使者を遣わす。 |
| 512年 | 継体 6年 4月 | 倭が、百済に穂積臣押山を遣わす。 |
| | 12月 | 百済が、任那4県を請う。倭が許諾する。 |
| 513年 | 継体 7年 6月 | 百済が、姐弥文貴将軍らを遣わし、物部伝押山に付き添わせて五経博士段楊爾を貢ず。別に伴跛国が己汶を奪ったので返還を要請。 |
| 515年 | 継体 9年 2月 | 帰国を願い出た文貴将軍らを、物部連を通えて帰国させる。 |
| 516年 | 継体10年 5月 | 百済が、前部木劫不麻甲背を遣わし、物部連らを己汶に留い、入国させる。 |
| | 9月 | 百済が、州利即次将軍を遣わし、物部連に付き添わせて己汶の賜りを請す。別に五経博士漢高安茂を貢じて、段楊爾に代える。 |
| | | 百済が、姐貴古将軍・日本斯那奴阿比多を遣わし、高麗使を伴う。 |
| 534年 | 安閑 1年 5月 | 百済が、下部脩徳頭善基・上部都総己利己婁らを遣わして通常の調を献じる。 |
| 542年 | 欽明 3年 7月 | 百済が、紀臣奈率弥麻沙・中部奈率己連・物部連奈率用奇多を遣わす。 |
| 543年 | 欽明 4年 9月 | 百済が、前部奈率真牛貴文・物部施徳麻奇牟らを遣わし、医博・暦二口を献じる。 |
| 544年 | 欽明 5年 3月 | 百済が、奈率阿毛牟文・許勢奈率奇麻・物部奈率奇非らを遣わし上表。 |
| 545年 | 欽明 6年 3月 | 倭が、顕宗己婦女を百済に遣わす。 |
| | 5月 | 百済が、奈率其婁・奈率用奇多・施徳次酒らを遣わし上表。 |
| 546年 | 欽明 7年 6月 | 百済が、中部奈率掠葉礼らを遣わし献調。 |
| 547年 | 欽明 8年 4月 | 百済が、前部徳率真基宣文・奈率奇非らを遣わし救援軍を請う。下部東城子言を貢じて、徳率汝休麻那に代える。 |
| 548年 | 欽明 9年 4月 | 百済が、中部杆率掠葉礼らを遣わす。 |
| | 6月 | 倭が、百済に遣使。 |
| | 10月 | 倭が、370人を百済に遣わして支援する。 |
| 550年 | 欽明11年 2月 | 倭が、百済に遣使。 |
| | 4月 | 百済が、中部奈率汶人斤らを遣わし、高句麗の捕虜十口を献ず。 |
| 551年 | 欽明12年 3月 | 倭が、皇妹子徴を百済王に献ずる。 |
| 552年 | 欽明13年10月 | 百済が、西部姫氏達率怒唎斯致契らを遣わし、仏像・経論等を伝える。 |
| 553年 | 欽明14年 1月 | 百済が、上部徳率科野次酒・杆率礼塞敦らを遣わし、軍兵を請う。 |
| | 6月 | 倭が内臣を遣わし、馬・船・弓矢を献じる。また、医・易博士らの交代と卜者・暦本を貢請する。 |
| | 8月 | 百済が、上部奈率科野新羅・下部固徳汶休奉山らを遣わし上表。 |
| 554年 | 欽明15年 1月 | 百済が、中部木劫婆那文次・前部施徳日比分屋らを扶余に遣わす。 |
| | 2月 | 百済が、下部杆率将軍三貴・上部奈率物部烏らを遣わし、救援兵を請う。徳率東城子言古を先の奈率東城子道、五経博士王柳貴を固徳馬丁安、僧侶曇らり人を僧道深ら7人と代える。別に易博士施徳王道良・暦博士固徳王保孫・医博士奈率王有悛陀・採薬師施徳潘量豊奈・固徳丁有陀・楽人施徳三斤・季徳己麻次・季徳老叔・対徳進陀を貢じて、皆交代させた。 |

①

### 応神十四年条

十四年の春二月に、百済の王、貴国天皇を貢る。貴も亦、今の来目衣縫の始祖なり。

是歳、弓月君、百済より来帰り、因りて奏して曰さく、「臣、己が国の人夫、百二十県を領ゐて帰化く。然れども新羅人の拒くに因りて、皆加羅国に留れり」とまうす。爰に葛城襲津彦を遣して、弓月の人夫を加羅に召す。然れども三年経るまでに、襲津彦来ず。

### 応神十六年条

十六年の春二月に、王仁来り。則ち太子菟道稚郎子、師としたまふ。諸の典籍を王仁に習ひたまふ。通り達らずといふこと莫し。所謂王仁は、是書首等の始祖なり。

### 欽明十六年条

六月に、内臣を遣せり。を進して、百済に使せしむ。仍りて良馬二匹・阿倍臣二世・弓五十張・箭五十具を副ふ。献して云はく、「請す所の薬は、王の須ゐるなり」とのたまふ。別に勅したまはく、「医博士・易博士・暦博士等、番に依りて上下れ。今上件の色の人は、正に相代らる年月に当れり。遷使に付けて相代らしむべし。卜書・暦本・種種の薬物、竹並れ」とのたまふ。

秋七月の辛酉の朔甲子に、楜勾宮に幸す。薨ず。葬を挙りて王民悉く集して、舶の数を数へ餘す。即ち王民悉を以て船長とす。因りて姓を鳥ひて船史とす。今の船連の先なり。

671　天智10　1 冠位・法度を施行（「近江令」の存否）。唐使が上表。億礼福留・答本春初に大山下を授位。12 天智天皇没。
672　天武 1　6 壬申の乱。大海人皇子が近江朝廷軍を破る。
673　天武 2　2 大海人皇子が即位（天武天皇）。
675　天武 4　2 天武が高安城に行幸する。3 栗隈王を兵政官長とする（栗隈王は壬申の乱時に筑紫大宰）。10 畿内の諸王・有位者に武装させる。〔676, 679, 684, 685, 693, 699, 700〕
676　天武 5　2 唐が朝鮮半島支配を放棄する。
679　天武 8　11 難波に羅城を築く。
683　天武12　11 諸国に詔して、陣法を習わせる。
685　天武14　11 軍用の楽器・兵器の私家所蔵をやめ、郡家に収める。
686　朱鳥 1　9 天武天皇没。持統皇后称制。
689　持統 3　6 浄御原令施行。戸籍作成（庚寅年籍）。兵士への武事教習。9 石上麻呂・石川蟲名らを筑紫に遣し、位記を給送する。また新城を監す。10 天武が高安城に行幸する。
690　持統 4　1 持統天皇即位。
693　持統 7　12 諸国に陣法博士を遣わし、兵法を教習させる。
694　持統 8　12 藤原宮遷都。
698　文武 2　4 南島に使を遣わし、国をもとめさせる。5 大宰府に、大野・基肄・鞠智三城を繕治せしむ。8 高安城を修理する［天智5年築城］。
699　文武 3　9 天武が高安城に行幸する。11 南島より帰る。12 大宰府に、三野・稲積二城を修せしむ。
700　文武 4　6 筑紫惣領に、覓国使を脅迫した薩末比売、衣評督・助督、肝衝難波を処罰させる。〔覓国使は698年の遣使か、新たな遣使か〕10 筑紫惣領・大弐を任ず。
701　大宝 1　8 高安城を廃す。 大宝律令完成。
702　大宝 2　8 命に逆らう薩摩・多禰を征討し、戸を校へ吏を置く。〔国司・島司〕
10 唱更国司ら「国内要害の地に柵を建て、戍を置きて守らむ」と言う。
712　和銅 5　1 河内国高安烽を廃す。
713　和銅 6　4 大隅国を置く。
718　養老 2　養老律令（施行は757年〈天平宝字1〉）
719　養老 3　12 備後国安那郡茨城、蘆田郡常城を停する。
756　天平勝宝8 6 怡土城を築く。
765　天平神護1 3 大宰大弐佐伯今毛人を築怡土城専知官、少弐采女浄庭を修理水城専知官とする。

【主要参考文献】
＊赤司善彦「古代山城研究の現状と課題」『月刊文化財』631、第一法規、2016
＊稲田孝司「古代山城の技術・軍事・政治」『日本考古学』34、2012
＊大阪府立近つ飛鳥博物館『横穴式石室誕生』2007
＊小田富士雄『古代九州と東アジアⅡ』同成社、2013
＊小田富士雄「『天智紀』山城の出現とその背景」『月刊文化財』631、第一法規、2016
＊亀田修一「日韓古代山城比較試論」『考古学研究』42-3、1995
＊亀田修一「瀬戸内の古代山城」『地域の古代日本 出雲・吉備・伊予』角川選書
＊韓国考古学会編『概説 韓国考古学』同成社、2013
＊九州国立博物館『九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集』2019～
＊葛原克人「朝鮮式山城」『日本の古代国家と城』新人物往来社、1994
＊熊本県教育委員会編『鞠智城と古代社会』2013～
＊田中史生「律令制国家の政治・文化と渡来系移住民」『古代史をひらく 渡来系移住民』岩波書店、2020
＊田中史生「古代文献から読み取れる日本列島内の百済系・中国系移住民」『百済研究』74、2021
＊玉名歴史研究会編『東アジアと江田船山古墳』雄山閣、2002
＊向井一雄『よみがえる古代山城』吉川弘文館、2017
＊吉村武彦「ヤマト王権と半島・大陸との往来」『古代史をひらく 渡来系移住民』岩波書店、2020

【古代山城 年表】

660　斉明 6　9 唐・新羅による百済滅亡が倭国に伝わる。10 百済が倭国に救援を乞う。
661　斉明 7　5 斉明天皇が、朝倉橘広庭宮に遷る。7 斉明没。中大兄称制。
663　天智 2　8 白村江の戦いで大敗。
664　天智 3　5 唐使郭務悰が、表函・献物を進上する。この年、対馬島・壱岐島・筑紫国等に防と烽とを置き、筑紫に水城を築く。
665　天智 4　8 答**体**春初を長門国に遣わし、築城。憶礼福留・四比福夫を筑紫国に遣わし大野・椽（基肄）の二城を築く。9 唐使劉徳高・郭務悰と総軍（旧百済官人）が、表函を進上する。遣唐使派遣。
667　天智 6　3 近江大津宮に遷都。唐使が、遣唐使を筑紫に送る。11 大和国高安城・讃岐国屋島城・対馬国金田城を築く。
668　天智 7　1 天智天皇即位。9 新羅が調を貢納する。唐が高句麗を滅ぼす。この年、唐が倭国征討の船舶を修理するが、新羅攻撃かという（『三国史記』）。
669　天智 8　1 蘇我赤兄が筑紫率。冬に、高安城を修り、畿内の田税を収む。9 新羅が進調。この年、遣唐使を派遣。唐使郭務悰ら2000人が遣わされる。
670　天智 9　2 戸籍（庚午年籍）を造り、盗賊・浮浪を断つ。高安城を修りて、穀と塩とを積む。また長門城一つ・筑紫城二つを築く［重出か］。8 新羅が高句麗王を冊立［唐・新羅の対立］。9 遣新羅使。

2．古代山城と渡来系移住民

(1) 西日本の古代山城と渡来系移住民

a 蒲原克人説

＊各山城と渡来系移住民

・石城山　　百済部

・鬼ノ城　　加夜、漢部、史戸

・大廻小廻　　土田、幡多

・城山城　　綾

・永納山　　唐子山、高麗池

＊加夜氏や讃岐綾氏のもつ先進的な土木技術が築城に際して活用される。

b 筑紫の山城

＊大野城・基肄城

＊鞠智城

(2) 肥後国の氏族

a 主要な氏族名（含推定）

玉名郡　日置部、日置部公

山鹿郡

菊池郡　大伴部、（秦人）

阿蘇郡　阿蘇君、鳥取

合志郡　壬生部、日下部、鳥取

山本郡

飽田郡　建部公（君）、春日部、私部

託麻郡　津守部

益城郡　山部、大伴君、宅部、肥公、真髪部（白髪部）

宇土郡　額田部君、額田部

八代郡　高分部、火君

天草郡

葦北郡　山部、刑部、日奉部、家部、他田部、真髪部（白髪部）、大伴部

球磨郡　久米部

b 特徴

＊渡来系移住民

＊葦北国造（火葦北国造・刑部靫部阿利斯登）と葦北郡

・刑部

・大伴部

3．大宰府と鞠智城

a 大宰府と官人

＊大宰府と鞠智城

b 肥後国と国司

三　肥後国と百済

1．大化前代の肥後と百済

(1) 日羅と火葦北国造

a 日羅

＊敏達12年(583) 7月丁酉条

・「今百済に在る、火葦北国造阿利斯登が子達率日羅、賢しくして勇有り。故、朕、其の人と相計らむと欲ふ」。

＊敏達12年(583) 是歳条

・「桧隈宮御寓天皇（宣化）の世に、我が君大伴金村大連、国家の奉為に、海表に使しし、火葦北国造刑部靫部阿利斯登の子、臣達率日羅、天皇の召すと聞きたまへて、恐り畏みて**来**朝り」とまうす。

＊ ⇒ 史料参照⑨

b 火葦北国造

＊肥後国の国造（国造本紀）

・火国造、阿蘇国造、葦分（葦北）国造、天草国造

＊葦北国造と百済との関係

＊前方後円墳がみられない地域

・国造と前方後円墳

(2) 江田船山古墳出土品

a 冠帽など

＊漢城期百済（『漢城百済博物館』）

b 古墳の被葬者と百済

＊「獲加多支鹵大王世」（雄略天皇）の時代

c 肥後北部と南部

＊江田船山古墳は、後の玉名郡に所在

・葦北国造は、肥後南部（後の葦北郡）

(3) 筑紫と百済

a 筑紫君と火君

＊欽明17年正月条

・「百済の王子**恵**、請りなむと請す。仍りて兵仗・良馬を賜ふこと甚多なり。亦頻に賞禄ふ。衆の欽み歎むる所なり。是に、阿倍臣・佐伯連・播磨直を遣して、筑紫国の舟師を率て、**衛**り送りて国に達らしむ。別に筑紫火君（百済本記に云はく、筑紫君の児、火中君の弟なりといふ）。を遣して、勇士一千を率て、衛りて弥弖（弥弖は津の名なり）。に送らしむ。因りて津の路の要害の地を守らしむ」。

・筑紫君と火君との関係

b 筑紫火君と百済

＊欽明17年正月条

＊天智４年８月条
・大野城・基肄城を築城
＊天智10年正月是月条
・授位　憶礼福留（兵法に関へり）　大山下（従６位）
＊天平宝字５年（761）３月条
・憶頼子老ら41人に石野連を賜姓
c 石野連
＊『新撰姓氏録』左京諸蕃

(2) 四比福夫
a 履歴
＊天智４年８月条
・大野城・基肄城を築城
＊神亀元年(724)５月辛未条　［渡来系移住民に賜姓］
・正７位上四比忠勇に椎野連を賜姓
b 椎野連
＊『新撰姓氏録』になし
c 出身地
＊泗沘城と関係する地名か
・大宰府と泗沘城
d 諸人物
＊四比河守（右京人）、四比元係（左京大属）、四比新紗（大和国有智郡人）
＊椎野連長年（万葉16-3822，23）

3．百済の王城と山城
(1) 四沘城と大宰府
a 四沘城
＊四比城と扶余山城
・非常時の王城としての扶余山城
＊ ⇒ 史料参照⑦
b 大宰府
＊ ⇒ 史料参照⑧

(2) 百済の山城
a 土城と石城（石築）
＊山城の二形態
b 亀田修一による百済と日本の山城比較
＊規模の比較　⇒ 史料参照⑪

b 『書紀』の主要記事

1. 天智３年条

是歳、対馬島・壱岐島・筑紫国等に、防と烽とを置く。又筑紫に、大堤を築きて水を貯えしむ。名けて水城と曰う。

2. 天智４年８月条

達率答体春初を遣して、城を長門国に築かしむ。達率憶礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣して、大野及び椽(基肄)、二城を築かしむ。

3. 天智６年11月是月条

倭国(大和国)の高安城・讃吉国山田郡の屋島城・対馬国の金田城を築く。

4. 天智８年８月条／冬条

天皇、高安嶺に登りまして、詔りて城を修めむとす。なお、民の疲れたるを憐みたまひて、止めて作りたまはず。／高安城を修りて、畿内の田税を収む。

5. 天智９年２月条

又、高安城を修りて、穀と塩とを積む。又、長門城一つ・筑紫城二つを築く。

6. 天武元年６月条 (壬申の乱)

筑紫国は、元より辺賊の衝を成る。其れ城を峻くし隍を深くして、海に臨みて守らするは、蓋内賊の為ならむや。

7. 天武８年11月是月条

初めて関を竜田山・大坂山に置く。よりて難波に羅城を築く。

8.『続日本紀』文武２年５月条

大宰府をして大野・基肄・鞠智の三城を繕治わしむ。

9. 文武３年12月条

大宰府をして三野・稲積の二城を修らしむ。

＊古代山城図 ⇒ 史料参照④

(2) 山城の変遷

a 稲田孝司説

＊城塁列石・城門・水門等に用いられた石の加工方法・形態・構築方法等を主な分類基準とする。 ⇒ 史料参照⑤

b 赤司善彦説

＊出土土器から消長を測る。 ⇒ 史料参照⑥

2．筑紫の山城と百済系官人 ― 憶礼福留・四比福夫

(1) 憶礼福留

a 天智４年８月条

＊達率答体春初を遣して、城を長門国に築かしむ。達率憶礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣して、大野及び椽(基肄)、二城を築かしむ。

b 履歴

＊天智２年(663) ９月甲戌条

・日本へ渡る

b 百済系官人への叙位

＊天智10年正月是月条

| 冠 位 | 人　名 | 職　務 |
|---|---|---|
| 大錦下 | 佐平余自信・沙宅紹明 | 法官大輔　(式部省) |
| 小錦下 | 鬼室集斯 | 学職頭　(大学寮) |
| 大山下 | 達率谷那晋首 | 閑兵法 |
| | 木素貴子 | 閑兵法 |
| | 憶礼福留 | 閑兵法 |
| | 答本春初 | 閑兵法 |
| | 本日・比子・賛波・羅金須 | 解薬 |
| | 鬼室集信 | 解薬 |
| 小山上 | 達率徳頂上 | 解薬 |
| | 吉大尚 | 解薬 |
| | 許率母 | 明五経 |
| | 角福牟 | 閑於陰陽 |
| 小山下 | 達率等５０余人 | |

＊特徴

・兵法関係者の授位が多い

・後の式部省・大学寮の官人

・薬剤の知識

(4) 律令法と史部

a 学令大学生条

＊凡そ大学生には、五位以上の子孫、及び東西の史部の子を取りて為よ。若し八位以上の子、情に願はば聴せ。国学生には、郡司の子弟を取りて為よ。〈略〉並に年十三以上、十六以下にして、聡令ならむ者を取りて為よ。

＊東西の史部

・倭漢（東漢）直

・西首

＊ ⇒ 史料参照③

二　大宰府と鞠智城

1．古代山城の築城

(1) 西日本防衛ライン

a 白村江の敗戦以降の西日本防衛ラインの構築

＊天智２年(663)、朝鮮半島の白村江において、「百済救援」をめざした倭と百済連合軍が、唐・新羅連合軍に大敗した。倭国では、唐・新羅による軍事的脅威が現実化し、対馬から瀬戸内海沿岸をとおり大和国に至る西日本防衛ラインを築く。

労を以て遂に四位を授く。官は造東大寺次官兼但馬員外介に至る。宝字二年、大和国葛下郡国中村に居るを以て、地に因りて氏を命す」。

3．百済からの上番と移住

(1) 百済からの主な移住伝承　　⇒ 史料参照①

a 弓月君（秦氏伝承）

＊応神14年是歳条

・「是歳、弓月君、百済より来帰り」。

b 王仁

＊応神15年８月条

・「百済の王、阿直伎を遣して、良馬二匹を貢る。即ち軽の坂上の厩に養はしむ。因りて阿直岐を以て掌り飼はしむ。（略）対へて曰さく、「王仁といふ者有り。是秀れたり」とまうす」。

＊応神16年２月条

・「王仁来り。則ち太子菟道稚郎子、師としたまふ。諸の典籍を王仁に習ひたまふ。通り達らずといふこと莫し。所謂王仁は、是書首等の始祖なり」。

c 王辰爾

＊欽明14年７月条

・「檜隈宮に幸す。蘇我大臣稲目宿祢、勅を奉りて王辰爾を遣して、船の賦を数へ録す。即ち王辰爾を以て船長とす。因りて姓を賜ひて船史とす。今の船連の先なり」。

(2) ６世紀前半の百済と倭国の往来

a 『日本書紀』による主要記事

＊ ⇒ 史料参照②

b 主な特徴

＊百済からの軍事支援要請と倭国への博士上番

＊五経博士・易博士・暦博士・医博士・採薬師は中国南朝・梁の出身者

・姓は「段・高・王・馬・潘・丁」

・南朝 ⇔ 百済 ⇔ 倭国

＊百済官人には、倭系官人が含まれる

c 『隋書』百済伝（６世紀末～７世紀初頭）

＊「其の人（百済人）、新羅・高麗（高句麗）・倭等雑りて有り。また中国人有り」

(3) 白村江敗戦以降の百済人の移住

a 『日本書紀』による百済人の移住

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1. | 天智４年(665) | 百姓男女400余人 | 近江国神前郡 |
| 2. | ５年 | 男女2000余人 | 東国 |
| 3. | ８年 | 男女700余人 | 近江国蒲生郡 |

＊ ⇒ 史料参照⑩

一　渡来系諸技術の導入

1．横穴式石室

(1) 九州系横穴式石室

＊4世紀後半

・竪穴式石室の変容型

・高句麗・百済の横穴式石室　(扶余系)

＊肥後型横穴式石室

(2) 畿内型横穴式石室

＊5世紀後半

・大王墓では5世紀末葉か

＊百済系

(3) 渡来系技術

＊石工集団　百済・加耶系

＊水はけ技術

2．寺院建設と渡来系移住者

(1) 寺院建立と百済

a 百済寺

＊舒明11年7月条

・「今年、大宮及び大寺を造作らしむ」とのたまふ。則ち百済川の側を以て宮処とす。是を以て、西の民は宮を造り、東の民は寺を作る。便に書直県を以て大匠とす」。

＊書直県

・倭漢書直県（皇極元年2月条）

b 飛鳥寺（法興寺）

＊崇峻元年是歳条

・「百済国、恩率首信・徳率蓋文・那率福富味身等を遣して、調進り、并て仏の舎利、僧、聆照律師・令威・恵衆・恵宿・道厳・令開等、寺工太良未太・文賈古子、鑢盤博士将徳白昧淳、瓦博士麻奈文奴・陽貴文・**陵**貴文・昔麻帝**彌**、**画**工白加を**献**る。蘇我馬子宿祢、百済の僧等を請せて、戒むことを受くる法を問ふ。善信尼等を以て、百済国の使恩率首信等に付けて、学問に発て遣す。飛鳥衣縫造が祖樹葉の家を壊ちて、始めて法興寺を作る」。

(2)　東大寺大仏

a 国中公麻呂

＊宝亀5年10月己巳条

・「散位従四位下国中連公麻呂卒しぬ。本是れ、百済国の人なり。その祖父徳率国骨富は、近江朝庭の歳癸亥に次るとき、本蕃の喪乱に属きて帰化けり。天平年中、聖武皇帝弘願を発して盧舎那銅像を造らしむ。その長五丈なり。当時の鋳工、敢へて手を加ふる者無し。公麻呂、頗る巧思有り。竟にその功を成す。

# 渡来系技術の導入と古代山城

明治大学名誉教授　吉村　武彦

はじめに

日本（倭国）は、中国を核とする漢字文化圏の一員として（ほかに朝鮮・ベトナム）、第一に中国の文字である漢字、第二に政治思想としての儒教、第三に政治制度の基礎としての律令法、そして第四に中国で翻訳された漢訳仏典に基づく仏教を受容してきた。漢語・漢文を利用することで、国内外の意志疎通を可能とし、文明社会に入ることができた。これら四項目は、先進に位置する中国で発展してきたものであり、列島人にとって外来の文化・宗教・思想であった。そして漢字から平仮名・片仮名を発明し、日本語表記を身につけて、日本的文化を発展させていった。

また、社会生活に大きな影響を与えた文物・手工業製品・埋葬施設としての横穴式石室、鍛冶、須恵器、馬の輸入などをあげることができる。その技術を持つ人々の渡来とともに、日本列島に伝わった。とりわけ鍛冶・須恵器・馬はヤマト王権にとって重要であり、陶邑など河内地域に生産基地が設けられた。そして、倭人の墓制・死生観の変化、製造技術の発展、交通の展開に大きな影響をもたらし、ヤマト王権の発展に寄与した。こうした意味で、渡来系技術の導入は列島社会の発展になくてはならないものであった。列島の倭人は、旧来の文化・技能をもとに、こうした新制度・技術を利用しながら、日本的社会を展開していったことになる。

さらに、社会制度の仕組みとして、5世紀の人制（ひとせい）、6世紀の部民制、7世紀の官司制と評制（後の郡）施行、後半の律令制の導入をあげることになる。王権の社会的職能体制の構築や、地域行政組織の展開、そして律令制国家の形成など社会編成や国家の枠組みなどに利用しながら、日本独自の法制・社会制度を整備していったのである。

そして7世紀後半にあたる天智2年(663)、白村江において倭・百済軍は唐・新羅連合軍に大敗する。敗戦後の列島に、西日本防衛ラインが一時的に構築された。渡来した百済官人の達率答**体**春初を長門、達率憶礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣し、「長門城」・大野城・基肄城を築城した。おそらく選地・設計、監督が主たる任務と思われる。なぜか、この3城にしか氏名の記載がない。達率は百済の第二品であるが、答**体**春初・憶礼福留の叙位は大山下で、大宝令制では従六位程度。天智10年における百済系官人への授位の記載は、達率以上である。あるいは鞠智城の場合、大野・基肄城の築城開始以降の**関与**の可能性もあるだろうか。いずれにせよ、各地の山城建設に百済系官人が派遣されなかったとは断言できないだろう。

本報告は、次のような構成で行ないたい。

一　渡来系諸技術の導入

1．横穴式石室、2．寺院建設と渡来系移住者、3．百済からの上番と移住

二　大宰府と鞠智城

1．古代山城の築城、2．筑紫の山城と百済系官人、3．百済の王城と山城

三　肥後国と百済

1．大化前代の肥後と百済、2．古代山城と渡来系移住民、3．大宰府と鞠智城

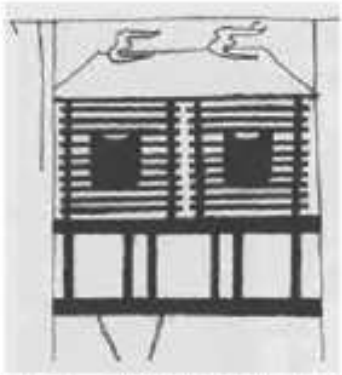


図１０　麻綫溝１号壁画墓建築図

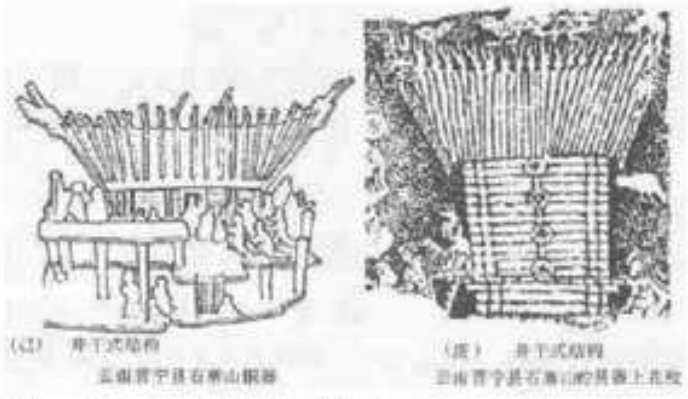


図１１　雲南省出土遺物にみえる前漢代の校倉

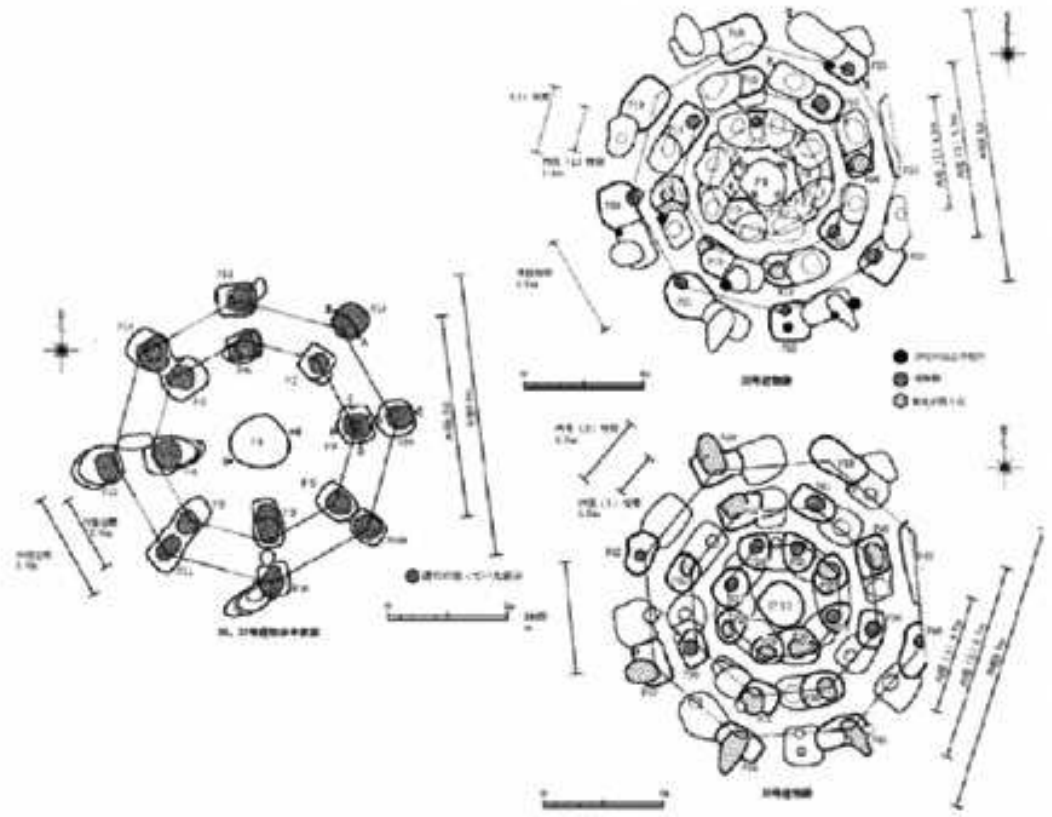


図１２　鞠智城の八角形遺構

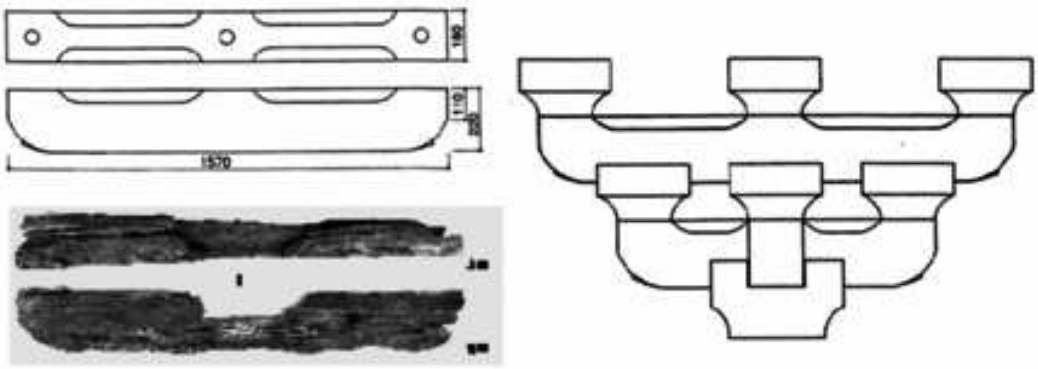


図6　山田寺出土の長い肘木

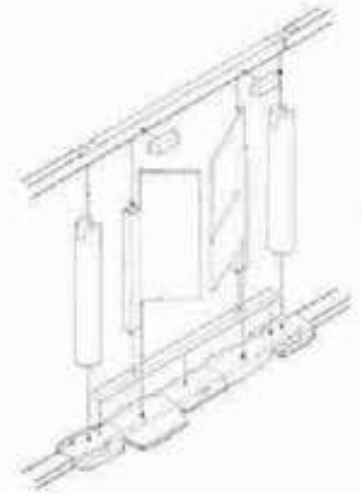


図7　山田寺回廊の扉廻りの構成

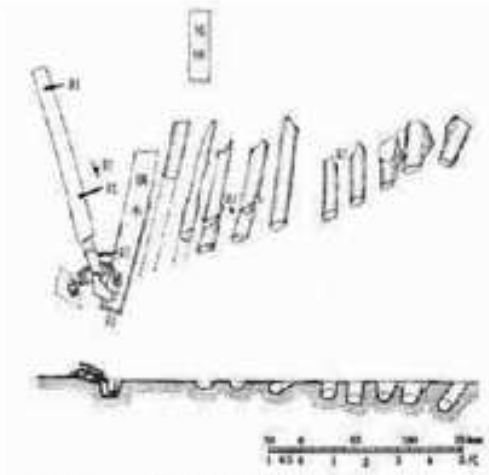


図8　四天王寺出土の垂木

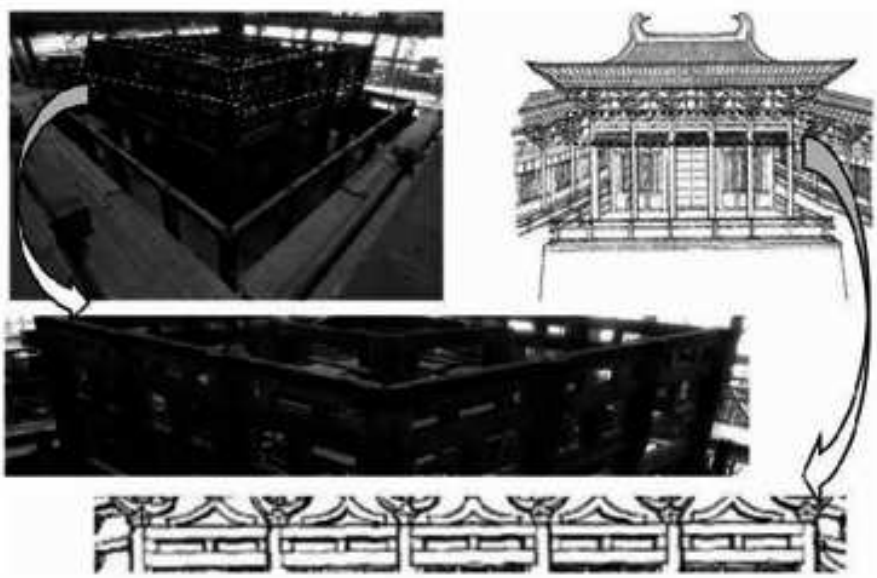


図9　薬師寺東塔（左）と聖徳太子墓（右）の両層閣額

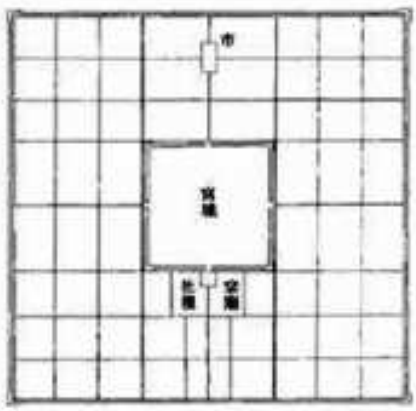



図1　『周礼』考工記による理想の王城図(足立三による)

図2　藤原京の条坊復元

図3　李寿墓に描かれた人字割束

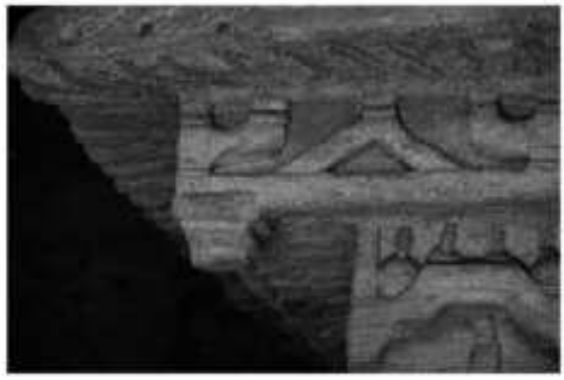


図4　雲崗石窟にみえる皿斗付の斗と人字割束

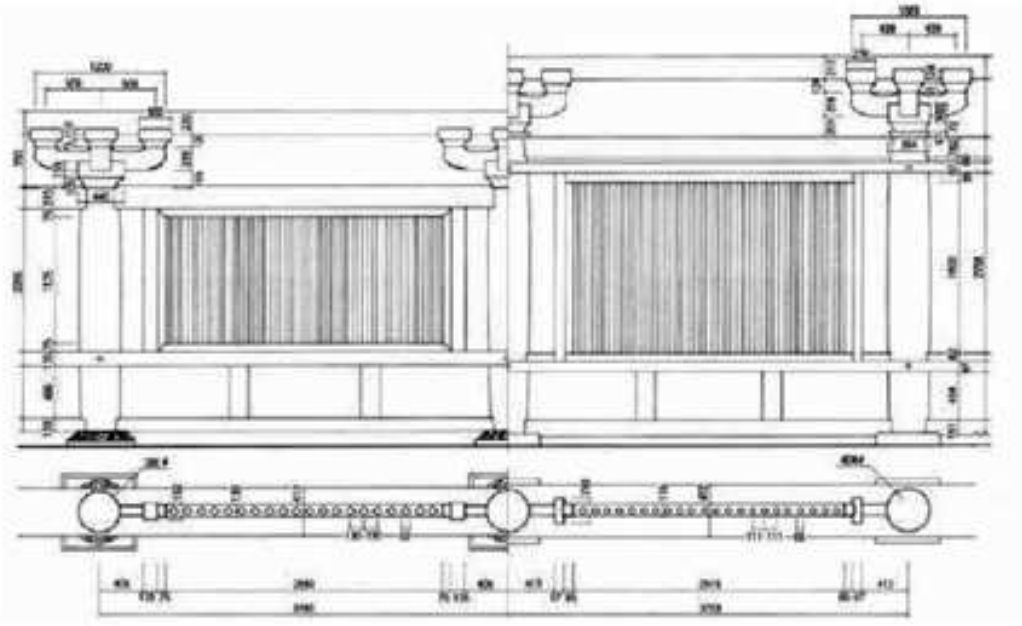


図5　山田寺回廊と法隆寺西院廻廊の比較

１７）浅川滋男も同様の見解を示している（「高倉の民族考古学」『住まいの民族建築学　江南漢族と華南少数民族の住居論』建築資料研究社、1994 年）。

１８）向井一雄『よみがえる古代山城』吉川弘文館、2016 年ほか。研究史の整理をしたうえで、見せる城としての役割を示している。この指摘は建築の意匠面を強調したもので、平城宮朱雀門前の空間構成との共通点もうかがえる。

１９）海野聡「鞠智城の遺構の特徴と特殊性－建物の基礎構造と貯木場を中心に－」『鞠智城跡Ⅱ・論考編』2014 年。

２０）申鍾国「百済地下貯蔵施設の構造と機能に対する検討」『文化財 38』2005 年。

２１）海野聡「寺院建築と古代社会」『古代寺院　一新たに見えてきた生活と文化－』岩波書店、2019 年

２２）上野邦一「鞠智城の八角形遺構について」『古代学』８、2016 年。鞠智城以外の古代山城との比較が必要としつつ、「八角形遺構で行われた祭祀も、渡来人が関わった可能性があることを指摘しておきたい」とする点は傾聴に値する。

２３）むろん、建築の技術的な伝播においては、理念の理解がないままに形のみを移入することも少なくないため、鞠智城の八角形遺構が祭祀施設であった場合でも、理念的な継承がなされていない可能性も想定しうる。

**図版引用・出典**

図１：『図説平城京事典』柊風舎、2010 年_p.21

図２：小澤毅『日本古代宮都構造の研究』青木書店、2003 年、p.221、第 20 図

図３：傅熹年主編『中国古代建築』第２巻、両晋、南北朝、隋唐、五代建筑、中國建筑工业出版社、2001 年、p.454、図 3-4-21

図４：海野撮影

図５：『山田寺出土建築部材集成』奈良文化財研究所、1995 年、p.40、Fig.50

図６：『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所、本文編、2002 年、p.422、Fig.157、p.423、Fig.158 および同、図版編、2002 年、Ph.256.

図７：『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所、本文編、2002 年、p.459、Fig.167

図８：『四天王寺』埋蔵文化財発掘調査報告 6、文化財保護員会、1967 年、p.194、第 87 図

図９：左　奈良県文化・教育・くらし創造部文化財保存事務所編『国宝薬師寺東塔修理工事報告書』図版編、2021 年、第 152 図

右　傅熹年主編『中国古代建築史』第２巻、両晋、南北朝、隋唐、五代建筑、中國建筑工业出版社、2001 年、p.379、図 3-1-19

両図に海野加筆。

図１０：関口欣也「朝鮮三国時代建築と法隆寺金堂の様式的系統」『江南禅院の源流、高麗の発展』中央公論美術出版、2012 年、241p、図 163

図１１：刘叙杰主编『中国古代建筑史』第１卷、原始社会、夏、商、周、秦、汉建筑、中國建筑工业出版社、2003 年、p.618、図 5-212

図１２：『鞠智城Ⅱ』熊本県教育委員会、2012 年、p.66、第 32 図及び p.67、第 33 図。

の技能レベルの両面から技術の素地を検討する必要がある。そのためには、より多くの古代山城で中枢の発掘調査が期待され、遺構から建築技術の比較検討を重ねることで、鞠智城の遺構の特質も見えてこよう。

**注**

1）以前は天台庵も唐代末の建築とされていたが、近年の調査により、建立年代が五代に下るとされる。

2）木工寮から派遣された技術者が造宮省や造東大寺司に従事したことが知られる。また現存建築でも、平城宮東朝集堂が唐招提寺講堂に移築されており、法隆寺伝法堂は橘夫人の住宅を移転したもので、前身建物の様子が明らかになっている。これによると、寺院建築と宮殿や恒久住宅の技術に共通点が多いことが明らかになっている。

3）海野聡「地方官衙政庁域の建築の格式と荘厳―国庁・郡庁正殿・国分寺金堂の比較から―」『地方官衙政庁域の変遷と特質』クバプロ、2018年、「遺構からみた郡庁の建築的特質と空間的特質」『郡庁域の空間構成』2017年ほか。

4）海野聡『奈良時代建築の造営体制と維持管理』吉川弘文館、2015年。

5）注4前掲書。

6）後述のように、川原寺にもパトロンや統率者の影響がうかがえる。

7）海野聡『建物が足る日本の歴史』吉川弘文館、2018年。

8）小澤毅『日本古代宮都構造の研究』青木書店、2003年。

9）なぜ回転させるのかが不明であり、大きさを半分とするにしても、長安の正確なサイズの把握や伝播の方法も不明である。また平城京には東部に張り出し部を持つため、長安とは形状は異なる。

10）日本では興福寺のように前進建物を規範といて再建される慣例がある。また7世紀後半には伊勢神宮においても式年遷宮の制が定まっている。

11）海野聡「混在する技術――7世紀の寺院と飛鳥の宮殿」『日本建築史講義』学芸出版社、2022年ほか。

12）海野聡「古代日本における倉庫建築の規格と屋根架構」『日本建築学会計画系論文集』682、2013年。校倉をはじめとする倉庫は律令制下で多く必要であったため、校倉の規模を規格化することは大量生産に有効であったのであろう。実際に手向山神社宝庫と東大寺本坊経庫は桁行30尺、梁間20尺と同じ規模であり、絶長によって校倉を規格化している。

13）関口欣也「朝鮮三国時代建築と法隆寺金堂の様式的系統」『江南禅院の源流、高麗の発展』中央公論美術出版、2012年。

14）稲葉和也「雲南省に見られる校倉造の源流について：漢代建築の復元的研究 その12」『日本建築学会大会学術講演梗概集』1990年。

15）周達生「中国の高床式住居：その分布・儀礼に関する研究ノート」『国立民族学博物館研究報告』11-4、1987年。

16）貫の技法に着目し、中世以降の技術とされるのは同高の貫であることを明らかにしている（海野聡「中世興福寺の伽藍復興に見る建築の〈復古〉思想」『建築におけるオリジナルの価値』日本建築学会、2020年）。

であったのであれば、その遺構の範囲を固めて、集中的に検討することが遺跡の性格の解明につながりうる。逆に時代が下ってからの付加であれば、古代山城としての機能が変質したのちの状況を遺構が示すことになる。それゆえに、倉庫群の存在から、古代山城が備蓄の機能を有するようになったことは確かであろうが、計画当初の機能をうかがううえでは、やはり周辺部ではなく、より多くの古代山城で中枢部の発掘の進展が不可欠であろう。

渡来系技術とのかかわりでは、古代山城と朝鮮半島の山城の関係性を考えるうえで、地下貯蔵施設について触れておきたい。申鐘国による朝鮮半島における地下貯蔵施設に関する研究[20]では、木槨型貯蔵施設について論じている。これによると、洪城神衿城1基、宮北里百済遺跡5基、大田月坪洞遺跡1基、錦山栢嵓山城1基の事例をあげ、百済時代の山城において、長方形の竪穴を掘る地下貯蔵施設の存在を指摘する。これらの用途としては、倉庫や果実貯蔵庫・貯水用などの可能性が考えられており、建築部材が出土した事例もある。宮北里遺跡3号木槨施設では貯蔵物品の果実とともに、直径0.5cm程度の枝状の木材が重なって出土している。また月坪洞遺跡の木槨では木槨施設の架構に使用された楔、角材、板材、道具の柄等が出土している。これらの出土遺物は鞠智城の貯水池出土の部材と共通する点も多い。こうした朝鮮半島の山城にみられる木製の地下貯蔵設備は、日本では確認できず、鞠智城の貯水池においても、地下の構築物は確認できない。この点は日本列島の古代山城の造営にあたって、朝鮮半島の山城をそのまま受容するのではなく、選択的受容がなされたことを示している。

また鞠智城の八角形遺構である30・31・32・33号についても（図12）、遺跡の性格や渡来系技術との関わりを検討する重要な遺構である。古代の現存建築をみると、貴人を祀る廟所の表現として八角形平面が用いられている[21]。上野邦一は日中韓、ベトナムの八角形遺構と比較検討し、これらを祭祀に関わる遺構と推定しているが[22]、祭祀であるとすると、やはり古代山城の機能との関係を踏まえる必要がある。もし望楼や鼓楼などのように古代山城に必要な機能であれば、形状は異なっても他の古代山城でも同様の施設は発見されるであろうし、八角形遺構が発見されないのであれば、機能はともかくとして、少なくとも八角形の建築は必須ではないと判断される。また同氏は渡来人の関与を指摘するが、渡来人と関係の深い祭祀遺構の場合、古代山城の経営そのものとの関わりも考慮する必要がある[23]。いずれにせよ、鞠智城は中枢部の広範囲の様相が明らかになっているが、他の古代山城と比較可能となることで、より一層、その特質が明らかになるのである。

## 6．おわりに

以上のように、7世紀の建築技術については、画一的ではなく、多様なルートからの伝播が存在する。そして寺院建築の技術伝播以前の技術もすべてが刷新されたわけではなく、存続したものもあったとみられる。技術伝播にあたっても、渡来系技術のすべてを規範とするのではなく、選択的受容がなされた可能性もある。古代山城の建築技術に関しては、こうした状況を踏まえたうえで、構造・意匠を含む建築設計などの高次の技術と加工など

が失われ、画一的になる。その傾向は平安時代以降にも引き継がれ、地方に現存する平安時代の建築も中央に残る建築との類似点も多く見られる。これに対して、上記に示したように7世紀の建築事例からは、多様な技術の存在が確認でき、そこには画一的ではない大陸からの技術伝播のルートがうかがえる。

古墳時代以前の高床建築に用いられた貫のように、歴史のなかで後世に失われた建築技術もあった可能性があり、山田寺の横に広がる肘木もその証左である。飛鳥寺のような朝鮮半島からの技術とは別の南方系の技術がなんらかの形で入ってきた可能性を示している。

加えて倉庫建築に関しても、寺院建築と合わせて朝鮮半島経由で入ってきた可能性以外のルートも想起される。このように奈良時代になると官が技術者の掌握を試みるが、7世紀の段階には氏寺なら氏寺、法隆寺なら法隆寺というように複数の技術系統が混在していた様子が確認できる。それらの建築技術は画一的なものではなく、少なくとも4系統以上の技術系統があり、さまざまなルートを経由して入ってきたのである。

## 5．古代山城の渡来系技術の課題

以上を踏まえ、古代山城の建築に関する渡来系技術を検討したいところであるが、ハードルは高い。ひとつは古代山城の全体計画に関する検討材料の不足である。古代山城の課題は土塁を中心とする外縁部に対する発掘や研究は多いものの、内部の構成に関する研究が進んでいないに点に古代山城研究の課題がある。この点では、中枢部の多くの発掘が進み、建物の配置や構成をうかがうことのできる鞠智城は貴重な存在である。

個別の建築・土木技術についても、版築を中心に土塁に関する検討は進んでいるが[18]、こと建築については礎石・掘立柱併用建物に関する拙稿がある程度で[19]、不足している。これも中枢部に及ぶ発掘調査が少なく、発掘遺構から建築技術について検討する土壌が形成されていないという状況に起因している。ここでは建築遺構のうち、比較的、発掘事例の多い倉庫と貯蔵施設をもとに、技術の系譜と受容のあり方について述べたい。

倉庫建築は大野城ほか、多くの古代山城で確認されており、古代山城の性格を考えるうえでも重要な建築であるが、倉庫建築は建築の標準設計や規格を考える貴重な材料である。例えば鞠智城では桁行4間、梁行3間の礎石建の総柱建物の数が多いが、これらの柱間寸法は6.5～8尺と一定ではない。ある程度、軸線を揃えた建物配置がみられるが、大野城ほど厳密ではない。こうした状況から、大野城や基肄城では大宰府、あるいは中央、渡来系技術者などとの関連性を強く窺える規格性や施工精度の高さが確認できるのと比べ、鞠智城は在地技術、あるいは肥後国の系統の技術など、異なる技術系譜によるものであった可能性がうかがえる。

そして倉庫の建立に関して、建立時期に関する視点を欠いてはならない。同時期に高い規格性と計画性をもって建立されたのではなく、随時、増設された可能性も考慮しておくべきであろう。これは遺跡や建物について、計画時の社会状況と施工時、あるいは完成時の社会状況が異なる可能性を秘めているためである。古代山城としての機能や計画が十全

より、放射状に垂木があったことが明らかとなった（図８）。この形式の垂木の出土は、山田寺の長い肘木や蓮座と同じく。法隆寺や奈良時代以降の形式とは異なる建築技術の存在を示しているのである。

**薬師寺**　藤原京の本薬師寺の建築は不明であるが、平城京の薬師寺東塔は天平２年(730)の建立とされ、現存する。また伽藍配置は薬師寺と本薬師寺で酷似しており、双塔に関しても移築論争が起こるほど、両者の平面は酷似している。そのうえで、薬師寺東塔の特殊な技術をみると、初層に両層闇額という頭貫の下に水平材が確認できる。この技法は古代日本では未確認であったが、唐では多く用いられる技法である（図９）。さらに薬師寺東塔の構造や意匠が白鳳時代の様式であることを踏まえると、本薬師寺の塔の上部構造は薬師寺東塔と同様であった可能性がある。そうであれば、唐の建築様式を７世紀後半に受容していたことになる。川原寺とともに、唐との関係を考えるうえで、重要な視座である。

**倉庫の建築技術**　現存する奈良時代の倉庫建築は六角形断面の校木を積層させた校倉で、この校倉には独自の設計方法が用いられている。通常の建物では柱間寸法を完数尺として設計しているが、校倉の場合は、桁行方向・梁間方向ともに一丁材の校木を組み上げて壁面を構成するため、柱間の総長を基準として設計している[12]。校倉に関しては、５世紀の高句麗の麻綫溝１号壁画墓建築図に高床校倉式の双倉が描かれており（図１０）、中国東北地方の農家の倉廩と同形式とされる[13]。ここから校倉の建築技術は朝鮮半島経由で寺院建築とともに伝播した可能性がうかがえるが、その設計手法は金堂などの柱間設計の建物と大きく異なる。また校倉造や高床建築については、雲南省西北部の少数民族の校倉造が報告されているほか[14]、中国の高床式住居の分布に関する報告がなされている[15]。また雲南省出土の前漢代の出土遺物をみると、銅器や貯蔵具の描写に横木を積層させた切妻造の倉庫が確認できる（図１１）前漢代の手法が高句麗に伝わった可能性も否定できないが、地理的、時間的に離れていることを考慮すると、別系統の可能性もある。

校倉以外の日本の高床建築についても、古墳時代以前の出土部材に貫状の材が貫通したとみられる柱がある。貫は中世以降の技術と考えられていたが、中世以降の寺院建築の技術とは異なる技術の系譜もうかがえる[16]。この古墳時代以前の倉庫建築の技術も７世紀以降に刷新・滅失したわけではなく、集落の小規模な倉などで用いられた可能性がある。

このように日本の校倉の淵源がいずれであるかについて確固たる根拠は確認できず、高句麗、中国南方など複数のルートが想定されるが、こと高床倉庫については、校倉の描写にもとづいて正倉院正倉との関係性から朝鮮半島経由の寺院建築の技術と同ルートに限定する蓋然性は低い。同様に高床という点から南方系に限定することにも問題がある[17]。むしろ古代日本の倉庫建築は諸国の正税帳によると、校倉とみられる甲倉のほか、板倉・丸木倉・板甲倉など多様な形式の倉庫があったことが知られ、複数のルートから倉庫建築の技術がもたらされた可能性も想起しておく必要があろう。

### ４．２．大陸からの技術伝播の多様性

８世紀以降の律令体制が整った時期の現存建築では、細部の意匠を含めて独自の多様性

和銅 3 年（710）に遷都した平城京では北闕型の都城で、さらに宮殿の北方に苑池を持ち、唐の長安の形状と類似する点も多い。また平城京を 90 度回転させて長安と比較すると規模はちょうど半分の大きさになる[9]。慶雲元年（704）に帰朝した遣唐使による情報が平城京の建設に活かされたとみられ、唐との交流による影響の大きさがうかがえる。

移譲を踏まえると、理念的な側面の大きい配置計画については、朝鮮半島との関係が見えるのに対して、唐の影響は見出しがたく、藤原京のプランにも表れている。配置レベルの抽象的な概念では規範とすべき対象を唐に求めるには至っていなかった可能性もあろう。

## 4．7世紀の多様な技術と技術伝播のルート

### 4．1．7世紀の建築技術

**法隆寺**　現存建築は限られるが、発掘遺構や出土部材を含め、7 世紀の建築技術の多様性をうかがうことができる。7 世紀後半に再建された法隆寺西院伽藍の諸建築をみると、高欄の卍崩しや人字型割束は初唐の李寿墓壁画に確認できる（図 3）。ただしこのデザインは北魏（386～534）の雲崗石窟にも確認でき、法隆寺西院伽藍の大斗下の皿斗も北魏の壁画や石窟などによく見られる（図 4）。つまり現在の法隆寺西院の再建は 7 世紀後半以降であるが、当時の最先端である初唐の様式ではなく、より古式なデザインで造られたのである。藤原京と同様に、法隆寺金堂が再建された 7 世紀後半には唐の情報を摂取できなかった可能性もある。もう一つの考えとしては、前身の若草伽藍の建築細部は不明であり、若草伽藍と西院伽藍の伽藍配置が異なることはもちろんであるが、前身建物を規範としたため、古式なデザインとなった可能性もある[10]。なお法隆寺西院伽藍で見られる人字型割束は日本では展開せず、間斗束が用いられており、ここにも大陸からの情報や技術をすべて受容するのではなく、取捨選択が確認できるのである。

**山田寺**　山田寺は 7 世紀半ばに造営を開始した寺で、山田寺東面回廊から出土した部材を見ると、法隆寺とは異なり、8 世紀以降の唐の影響を受けた技術との共通点が多く見え、7 世紀後半の技術伝播の様相がうかがえる（図 5）。同時に 8 世紀以降の技術にはない特徴的な技術が見える。法隆寺では長押に軸擦穴を穿っているが、山田寺では、頭貫に藁座という扉の軸を受けるための材を別に付け、下部は地覆石に直接穴を打ってそこを軸擦穴としている。加えてこの山田寺から出土した肘木には一般の三斗を置く肘木よりも長いものが確認されており、この長い肘木は禅宗様組物の壁付の肘木にみられる（図 6）。同じく山田寺では扉の軸を受ける藁座が出土している（図 7）。これらの方法は日本の中世以降の中国南方からの影響とされる大仏様や禅宗様の技術と共通することから、中国南方系の技術との関係が指摘できる[11]。

**四天王寺**　四天王寺は推古天皇元年（593 年）に造立が開始された寺で、出土した垂木の形状が特殊である。中世以前の入母屋造や寄棟造の現存建築をみると、屋根の垂木はすべて平行に掛かる形式である。これに対して、垂木を放射状に配する扇垂木木は、中世禅宗様、あるいは大仏様以降に広まった技術とされていた。ところが四天王寺の発掘調査に

大きな特徴が表れており、統率者と設計の関連がうかがえる[6]。

### 3．全体計画にみる大陸からの影響

**伽藍配置**　飛鳥寺・四天王寺・薬師寺もその伽藍配置から朝鮮半島との密接な関係がうかがえ、倭国と関係の深かった百済だけではなく、新羅・高句麗との関係も指摘されている。7世紀後半の東アジア情勢は混迷しており、660年に新羅によって百済が滅ぼされ、親交の深かった倭国は百済の遺民とともに663年に白村江の戦いに挑んだが、唐・新羅の連合軍に敗戦する。その後、新羅は668年には高句麗を滅亡させ、朝鮮半島を統一した。

こうした緊迫する東アジア情勢の中で、天武天皇9年(680)には天武天皇の発願により、藤原京に本薬師寺の造立が開始されたのであるが、この伽藍は双塔式の伽藍配置であった。この伽藍配置は百済や高句麗にはみられず、新羅にルーツがみられる。679年に創建された新羅の慶州四天王寺や684年の望徳寺が同形式の双塔式の伽藍配置である。これらの大陸と同形式の伽藍配置は新羅からの影響を示している。すなわち白村江の戦い以降の激動の東アジア情勢のなかで、新羅から迅速に情報を入手して最新の寺院建築の技術を導入していることを示しているのである[7]。

同時期の寺院の伽藍配置では川原寺がある。川原寺は7世紀後半に斉明天皇の菩提を弔うために天智天皇によって建立されたとみられる。伽藍配置は一塔二金堂の特殊なもので、塔と西金堂を回廊で囲み、回廊は中金堂につながり、講堂はその北方に置かれた。この金堂と塔が向かい合う伽藍配置は、大宰府の観世音寺にも見え、天智天皇が斉明天皇の追善供養のために建てたとされる。後述のように、川原寺は斉明天皇の菩提を弔うために天智天皇によって建立されたとみられ、一塔二金堂の特殊なもので、廻廊が塔と西金堂を囲んで中金堂につながり、講堂はその北方に置かれた。この金堂と塔が向かい合う伽藍配置は、大宰府の観世音寺にも見え、天智天皇による斉明天皇の追善供養という点で共通する。すなわち対外的な関係性だけではない伽藍配置も見えるのである。川原寺は出土瓦の観点から大陸との関連も指摘されるが、国内でのパトロンや統率者の影響がうかがえるのである。

このように寺院の伽藍配置は日本と大陸の交流の表出であり、その伽藍配置の類似性から大陸との交流の活発さや情報伝達の迅速さを看守でき、百済との親密な交流から新羅との交流へと変化したことがわかるのである。

**藤原京と『周礼』考工記**　朱鳥8年(694)に藤原京に遷都したが、その形状は当時参考にすべきであったであろう唐の長安と大きく異なる形状で、中央に宮殿が置かれる回字型あった[8](図1)。中国最古の技術書『周礼』考工記に記された理想の王城図の姿と酷似している(図2)。『周礼』は中国の経書のひとつで、戦国時代以降に周王朝の理想的な制度について記したものとみられ、このうち考工記は漢代に補われたものとされる。その構成は中心に宮城を置き、その南に宗廟・社稷、北に市を配するという都市計画を理想像として示している。この藤原京で当時の最新の都城である唐の長安を参照せず、『周礼』考工記の宮城を参考とした点には、唐からの直接的な情報入手の困難な状況がうかがえる。

それゆえに同じ機能を有する施設であれば設計方法は類似し、比較検討が可能となる。伽藍配置や宮殿の構成、金堂や校倉など同じ機能を有した建築の比較が有効な指標となるのはそのためである。

また設計理念にも個々の部材の形から、建築全体の構成に至るまで、さまざまな尺度で違いがある。わかりやすい例でいえば、古代の柱間寸法を基準に設計する方法と近世の屋根構造から柱の位置を決める方法では設計理念が全く異なるのである。そして設計理念の具現化を技能が支えている。いっぽうで、設計理念や機能が異なっていても、通底する建築技術は存在し、宮殿に用いられる技術と寺院に用いられる技術には共通点が多い[2]。それゆえ、個々の建築技術に関しては、寺院建築の技術を基本に考えることに妥当性がある。

**2．2．渡来系技術者と統率者**

百済から仏教の公伝とともに、寺院建築ももたらされたが、礎石・瓦葺の建築はそれ以前の倭国の建築とは全く異なるもので、建築技術の移入なくして、建立は困難であったのである。そのため『日本書紀』によると、崇峻天皇元年（588）には仏堂を建てるために百済から仏舎利や僧とともに技術者が送られている。内訳は寺工２名、鑪盤博士１名、瓦博士４名、画工１名である。仏塔の相輪の露盤を造るための金属製品の製作技術、屋根を葺く瓦などは新しい技術は技術者の移動により、伝播したとみられる。技術者以外にも、『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』の飛鳥寺建立に関する記述によると、金堂の「本様」が伝来したという。「様」は訓読みで「ためし」と読み、模型や設計図などとみられている。

こうした方法による技術の伝播は対外的なもののみとは限らない。『続日本紀』天平宝字３年(759)年11月辛未（９日）条の「頒下国分二寺図於天下諸国。」とあるように、図による中央から地方への伝達は確認できる。ただし、国分寺をはじめ、国庁・郡庁・郡衙正倉など、同じ機能を有した建物であっても、明確な設計規格はうかがえず、その規範の精度は高いものではない[3]。８世紀以降には木工寮を中心に渡来系技術者の数が低下し、その役割は低下したとも言われているが、依然として、指導的立場に渡来系技術者が確認でき、一翼を担っていた[4]。

また渡来系技術者以外を含め、長官クラスの統率者やパトロンとの関係も大きい。古代山城でいえば、『日本書紀』によると天智天皇４年（665）８月に百済の武官の答体春初が長門の城、憶礼福留・四比福夫らが筑紫に大野城・基肄城を築城したことが知られる。同じく佐伯今毛人は造東大寺司長官などを歴任した造営関係の任官の多い人物で、軍事と造営の密接な関係も明らかになっており[5]、怡土城造営にも従事している。天平勝宝８年（756）に怡土城の築城のため、大宰大弐の吉備真備が専当官に任官され、天平神護元年（765）に大宰大弐佐伯今毛人が築怡土城専知官に任官され、神護景雲２年（768）に完成した。この怡土城は中国式山城とされる。

これらの統率者と具体的な建築設計との関連は明確ではないが、怡土城に関しては８世紀であることもあるが、中国兵法に通じた吉備真備による影響とみられ、山頂から平地部にかけて広く囲む城郭を形成している。また山頂から尾根にかけての望楼などが設けられ、

# 古代建築と渡来系技術

東京大学大学院工学系研究科准教授　海野　聡

## 1．はじめに

日本の建築文化を築き上げてきた技術については、寺院建築を中心に大陸からの影響は少なくない。古代建築と渡来系技術を考えるにあたって、まずは検討材料を見ておきたい。日本には世界最古の法隆寺金堂をはじめ、奈良時代以前の現存建築が約 30 棟弱と比較的多く残る。中国の唐代の建築が最古の山西省の南禅寺大殿（782 年）をはじめ、広仁王廟大殿・仏光寺東大殿・開元寺鐘楼の 4 棟に限られることと比べても豊富である[1]。いっぽうで、奈良時代以前の建築技術について、大陸との影響関係を論証するには日本・中国・韓国のいずれにおいても現存建築の数は不十分であると言わざるを得ない。また日本の現存建築もすべてが寺院建築という偏りがある。ただし、仏教や寺院建築は古代東アジアの共通の文化的基盤であり、技術伝播に大きな影響を与えたことに異論は少なかろう。現存建築に加えて、発掘遺構・文献史料・絵画資料等から得られる情報も多く、これを補完している。このように研究資料は限られるが、古代建築と渡来系技術について、検討したい。

## 2．建築の設計・技術と技術者・統率者

### 2．1．建築の設計と技術

そもそも建築の造営には造営計画の企図、場所の選定、建物の設計、労働力の確保など、準備には長い時間がかかる。また建物の設計においても、ごく一部の特殊な例を除いて、基本的には個別の設計が必要である。その設計に基づいて使用する木材量や作業に従事する労働量の算出、運搬経路の確保などの実務も膨大である。こうした準備を経て、造営は進捗する。それゆえに設計などを担う技術者と現場における施工を担う技能者の両面から伝播を考える必要がある。

また建築技術の伝播には、特殊性がある。工芸品とは異なり、実物の移動が困難な建築にあっては、デフォルメした模型や図像などによる技術の伝播、あるいは技術者自身の移動という経路を必要とする。さらに前者の場合、デフォルメする段階、そして受容側の解釈の 2 度にわたる伝播のハードルがある。デフォルメによる情報の喪失はもちろんだが、受容においても、正しい理解のないままの誤解や受容側の意図的な選択により、伝播の正確性を欠くことも少なくない。

こうした造営のフロー、技術伝播におけるデフォルメと受容における誤読・取捨選択を踏まえ、文献史料から知られる渡来系技術の伝来の様子を示す。そして個別の技術については、全体計画にあたる伽藍配置レベル、個々の建築技術から渡来系技術を検討したい。

建築の設計においては機能との関係が深く、寺院であれば宗教理念や僧の生活のための施設、宮殿であれば、政務・儀礼、生など、複合的な機能に応じて、諸施設は建てられる。

## 5 おわりに

### 1 谷筋の空間計画

| 施設 | 底面の土層 | 鞠智城時期区分 |
|---|---|---|
| 泉井 | 透水層 | 鞠智城Ⅰ期 |
| 貯木場 | 透水層 | 鞠智城Ⅰ～Ⅱ期 |
| 曲池？ | 不透水層 | 鞠智城Ⅰ～Ⅱ期 |
| 排水工・減勢工 | 不透水層 | 鞠智城Ⅰ期 |

平城京左京三条二坊宮跡庭園

### 2 谷筋開発の土木技術情報は、半島系情報の複合体

| | |
|---|---|
| 補強土工法(泉井の堤) | 鞠智城は、大野城・水城・基肄城などと同様の防御施設 → 百済系情報 |
| 曲池？ | 鞠智城Ⅱ期とすれば、城内整備の一環？<br>曲池は新羅系だが、山城には類例がなく、畿内を介した可能性が高い |
| 空間計画 | 高句麗(平壌大城山城、5･6世紀)･新羅(竹州山城、6･7世紀)に類例 |

**ご清聴ありがとうございました**

## おもな参考文献


小澤佳憲　2021「山城で水をつかう―古代山城の水資源―」『大宰府史跡指定100年と 研究の歩み』

小山田宏一　2018「古代日韓補強土工法の俯瞰的整理」『纒向学研究』6

主税英徳　2019「日韓古代山城の水門構造からみた鞠智城」『鞠智城と古代社会』7

西住欣一郎　2014「鞠智城跡貯水池跡について」『鞠智城跡Ⅱ ―論考編1―』

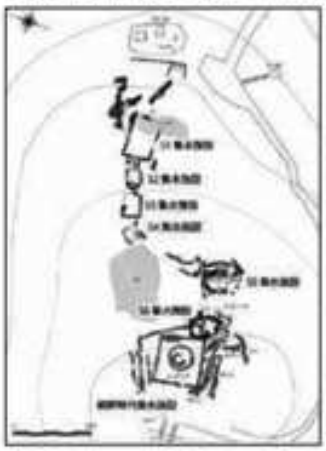
矢野祐介　2016「鞠智城の築造―貯水池・土塁を中心に―」『季刊考古学』136

全 錄基　2021「韓国の古代山城の集水施設からみた鞠智城の研究課題」『鞠智城と古代社会』10

(財) 韓白文化財研究院　2012『安城竹州山城　2～4次発掘調査報告書』

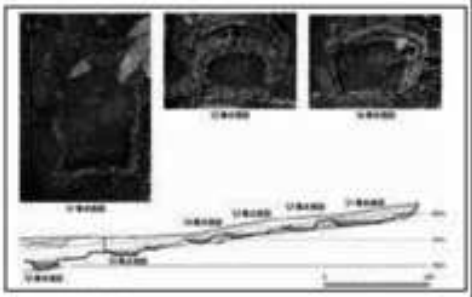
## 4-1 新羅山城谷筋の利水と治水の空間計画　京都道安城市 竹州山城／6世紀中～7世紀後半

勾配約七・六度の渓流性の谷筋に、
石組護岸をめぐらす方形と楕円形の
五基の集水施設（S1～S6）を階段式に配置する



利水
浄水施設　沈澄を繰り返して浄水をえる

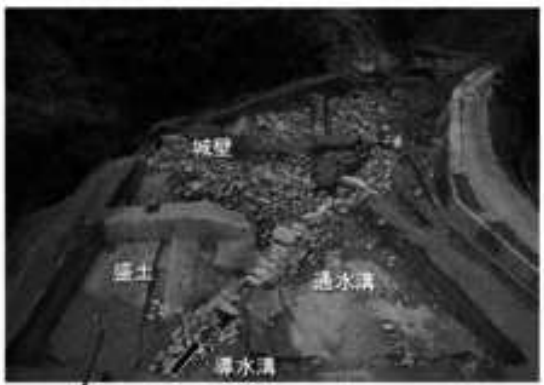
治水
減勢工　洪水時の谷を下る激流から
谷筋下流の城壁(東門)を守る



韓国文化財研究院
2012『安城竹州山城 2～4次発掘調査報告書』一部加工

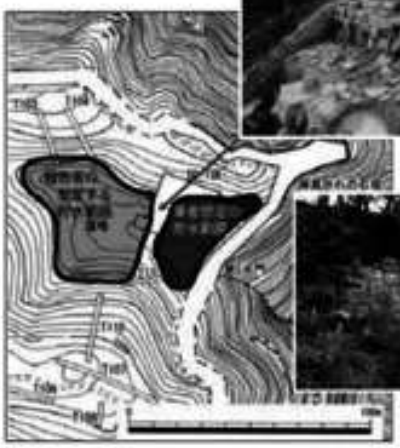
## 4-2 倭国古代山城水門付近の治水工

鞠智城池ノ尾門跡




池状落ち込み

鬼ノ城第5水門と土手状遺構1



排水口

（小澤佳憲2021）

## 3-3
## 6･7世紀の百済の補強土工法

双北里／道／粗朶

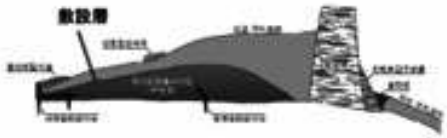
技術移転

扶余羅城東門付近／忠清南道扶余／6世紀

水城／福岡県太宰府市／7世紀／粗朶

鬼ノ城の小水城
池ノ下散布地の土塁／岡山県総社市／7･8世紀／粗朶

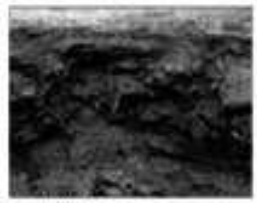
## 3-4
## 6･7世紀の新羅の補強土工法




城山山城／慶尚南道咸安郡／6世紀中頃／草本・樹皮・木簡

雪峰山城／京畿道利川市／6世紀後半／粗朶・樹皮

旧位良池　慶尚南道密陽市／6世紀前半／粗朶



泉橋池　慶尚北道尚州市／7世紀後半／粗朶

慶尚南道昌寧郡／7世紀末／粗朶

## 施肩遺跡　浙江省余姚市

第1期　河姆渡文化早期(前4700～前4500年)
第2期　河姆渡文化晩期(前3700～前3300年)
第3期　良渚文化期(前2900年～前2500年)

区画水田　稲田路(大畦畔)
22条・長20～200m・幅1～4m・間隔15～40m

ベース　淤泥層
敷設材　粗朶、竹　地盤補強

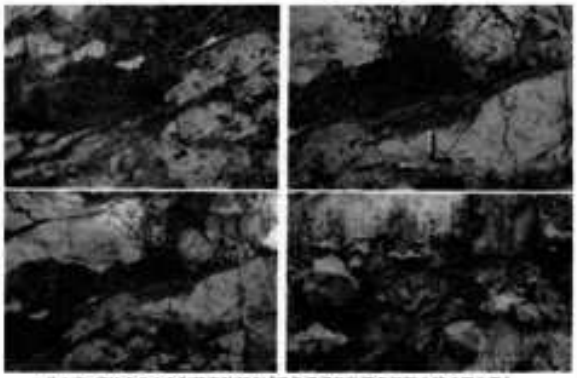
(報道写真)

(『2020中国重要考古発見』2021)

## 黄登堤　全羅北道益山市

朝鮮時代　湖南3大貯水池(碧骨堤・金堤)
古代　防潮堤？
堤　基底部は現地表面から－約4.9m、幅約22m
敷設材　草本　地盤補強
AMS分析　紀元前4世紀頃

©Google



益山市・(財)全北文化財研究院2021『黄登堤堤防確認発掘調査略式報告書』

## 3-1 補強土工法

1 これまでの名称　　敷粗朶工法、敷葉工法、韓国：부엽공법、中国：敷草法

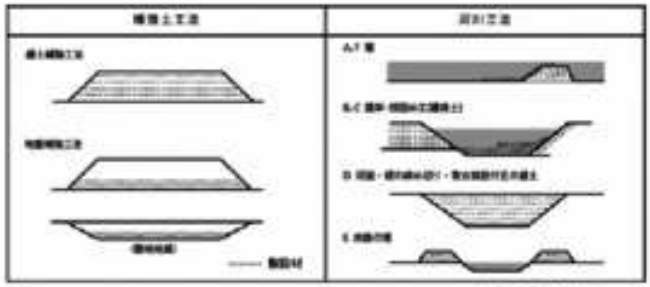
2 構造物　　城壁、土塁、防水堤、池堤、道、整地

3 敷設材　　粗朶、木葉、草本、樹皮、チップ、穀物の殻、骨片など

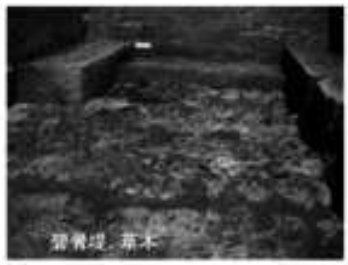
4 名称と機能

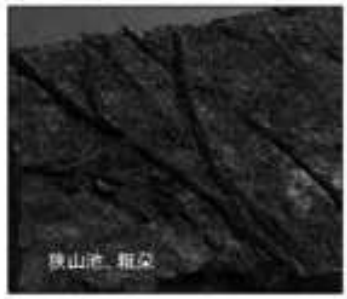
地盤補強工法　　軟弱地盤の補強、地盤支持力を高める

補強盛土工法　　土と補強材の相互作用により、盛土の安定性・強度を高める




（小山田宏一2018）



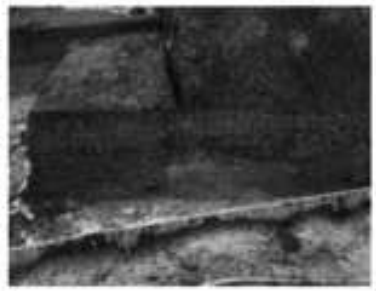
（小山田宏一2018を一部修正・加筆）

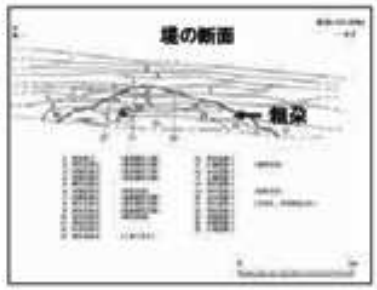
## 3-2 拡散する補強土工法

最古の事例　良渚文化期、施恩遺跡
前4世紀頃　中国江南ー半島 益山黄登堤
4-5世紀頃　六朝ー百済 風納土城、堤川義林池、金堤碧骨堤

## 2-5 湧水の水汲み場(泉井)

湧水池の木組み

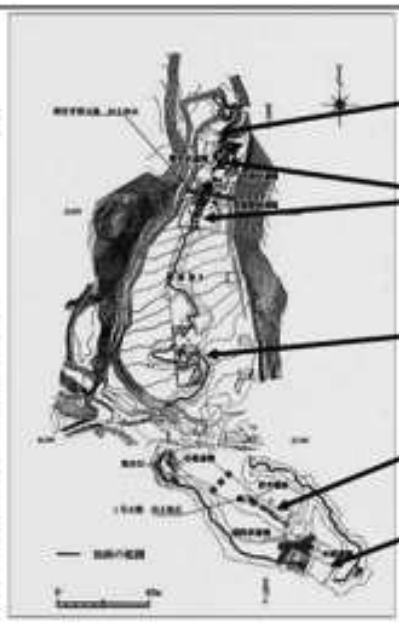





- 透水層まで掘削し、湧水を確保
- 堤は、湧水池を区画する土手(道)
- 土手の一部は、粗朶を敷設する補強土工法による
- 木柵は土留め工?

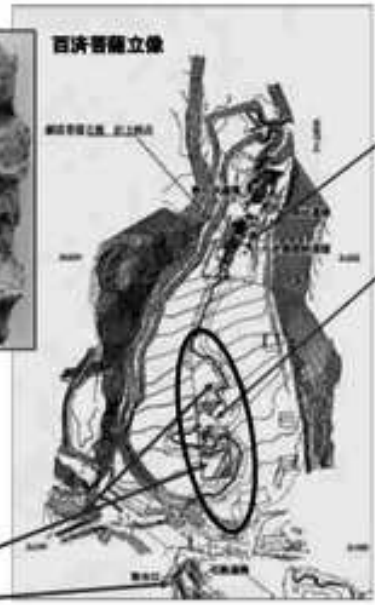
## 2-6 鞠智城貯水池の再検討

空間計画
谷筋の地形・地層にそくして
各施設を階段式に配置する



## 2-3 浅い水域

底は不透水層
自然流路を利用した曲池？
水源　貯木場の余水
　　20次取水口



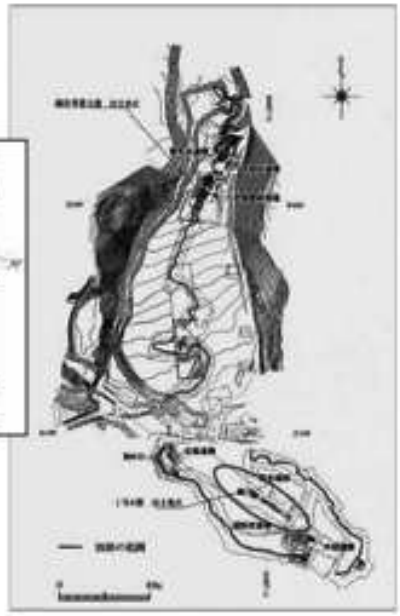

31次 トレンチ41
流水の影響のある沼沢地

24次 トレンチ40
流れの影響が少ない止水域

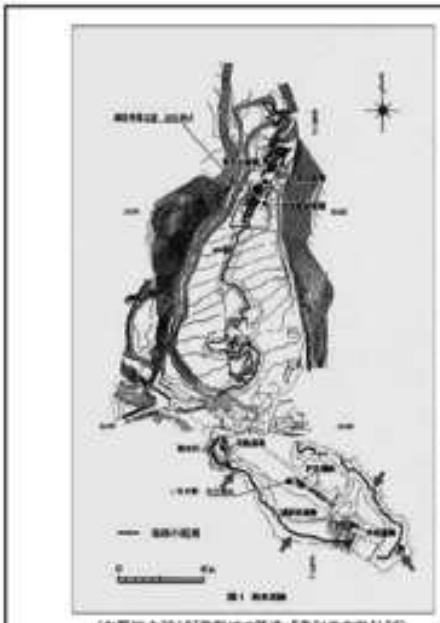
24次報告書
当該積土に古代の遺物（細かな時期は不 明）を含しており、当該遺構は、創建当初からある一定の時期を経て構築された可能性が高い

鞠智城Ⅱ期に下る？

## 2-4 貯木場



形状　谷底を帯状に利用する
構造　砂礫層（透水層）まで掘りくぼめて
　　湧水を確保し、建築材を貯木する
水源　湧水（表面浸出）
　　泉井の余水
　　取水口
時期　鞠智城Ⅱ期が中心



## 2-1 鞠智城の貯水池

（報告書の復元）

造成　谷筋を利用

範囲　水成粘土の堆積層から復元

面積　約5,300㎡

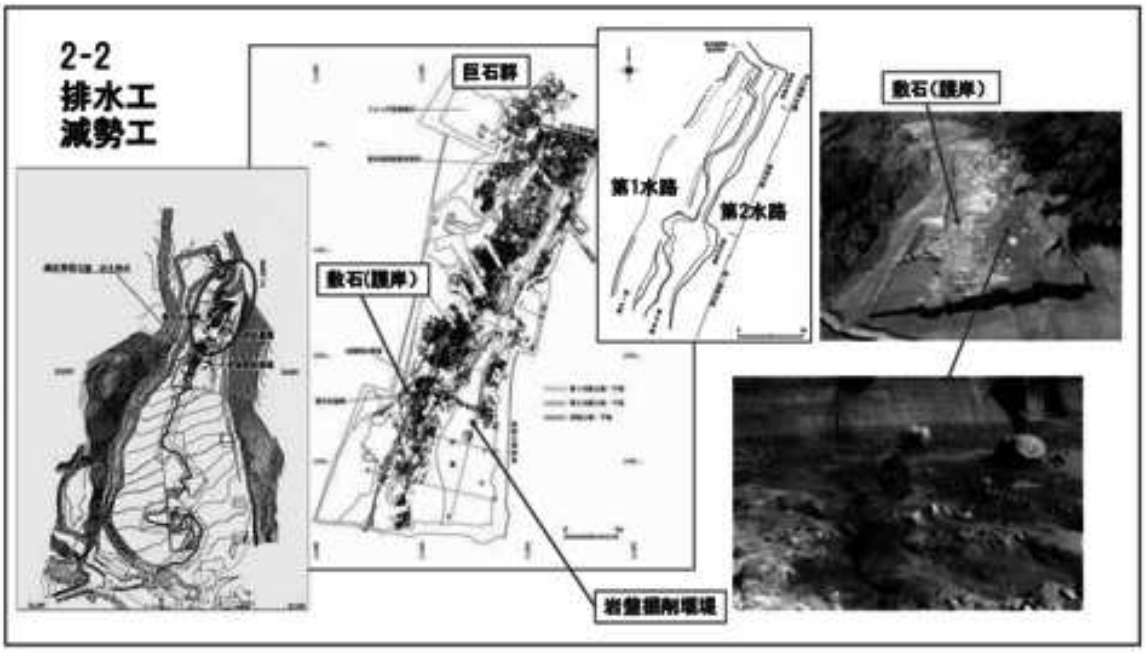
比高　南北約9m

堤　　堤を階段状に配置して貯水

施設　貯水池、貯木場

水源　主に湧水

（矢野裕介2018「鞠智城の築造」『季刊考古学』136）

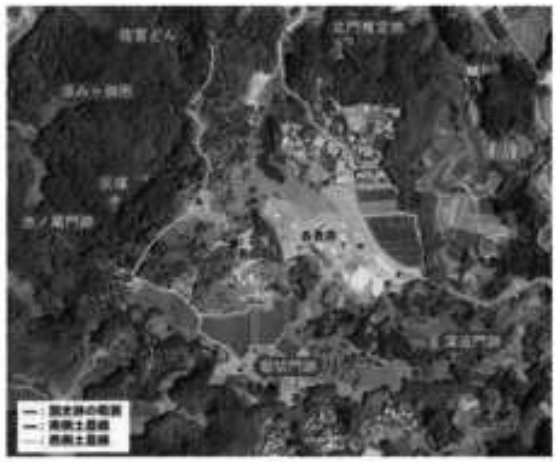


大阪府立狭山池博物館館長　小山田　宏一

## 目　次

1　はじめに
2−1　鞠智城の貯水池
2−2　排水工・減勢工
2−3　浅い水域（自然流路を利用した曲池？）
2−4　貯木場
2−5　湧水の水汲み場（泉井）
2−6　鞠智城貯水池の再検討ー谷筋の空間構成
3−1　補強土工法
3−2　拡散する補強土工法
3−3　6−7世紀の百済の補強土工法
3−4　6−7世紀の新羅の補強土工法
4−1　新羅山城谷筋の利水と治水の空間計画
4−2　倭国古代山城水門付近の治水工
5　おわりに一谷筋の空間計画の系譜

## 1　はじめに



ころう君の将来の夢
鞠智城がもっと有名になること

- 鞠智城は東アジア的文化遺産
- 激動する東アジア情勢の証人
- 歴史的価値を高め、利活用を促進する学際的研究の蓄積がある
- 本報告は、貯水池とされる谷筋を分析して、鞠智城の土木技術系譜の一端にせまりたい

年）熊本県立装飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温故創生館

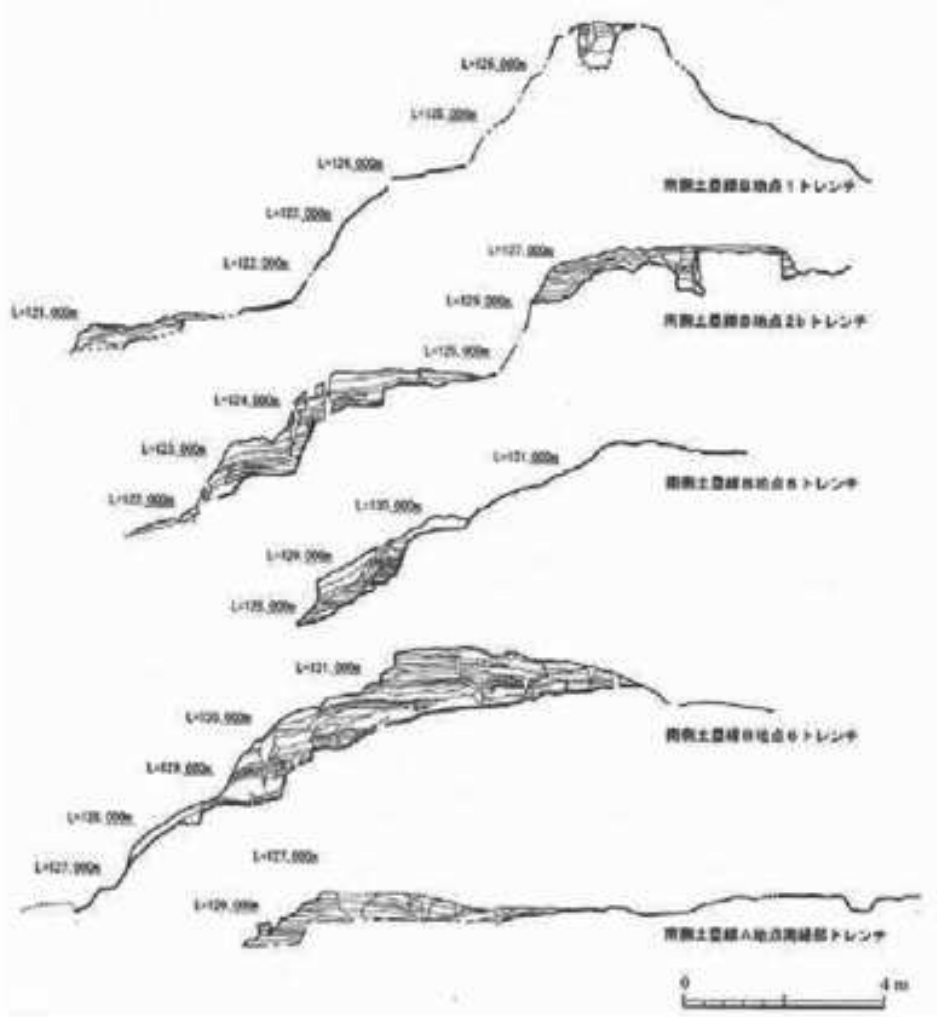
- 『鞠智城跡Ⅱ』－論考編１－　平成 26（2014）年３月　熊本県教育委員会
- 『鞠智城跡Ⅱ』－論考編２－　平成 26（2014）年 11 月　熊本県教育委員会

---

[1] 「朝鮮古代史からみた鞠智城」－白村江の敗戦から隼人・南島と新羅海賊の対策へ－『古代山城 鞠智城を考える』鞠智城東京シンポジウム報告書　平成 21（2009）7 月

[2] 「古代山城としての鞠智城」『鞠智城を考える』2009 東京シンポジウムの記録　平成 22（2010）年 山川出版社

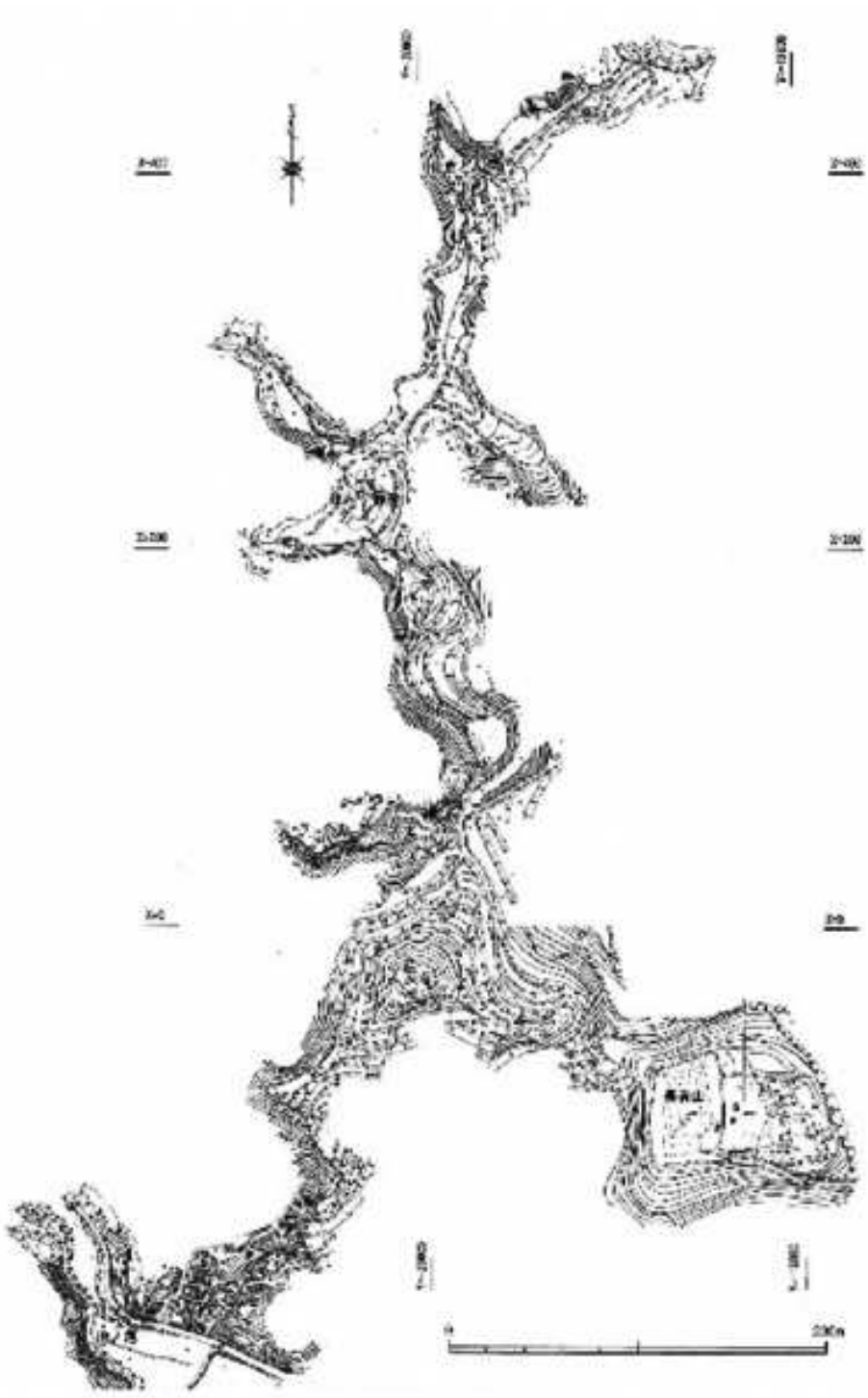
[3] 「韓国の古代山城の集水施設からみた鞠智城の研究課題」令和３年度鞠智城跡『特別研究』論文集



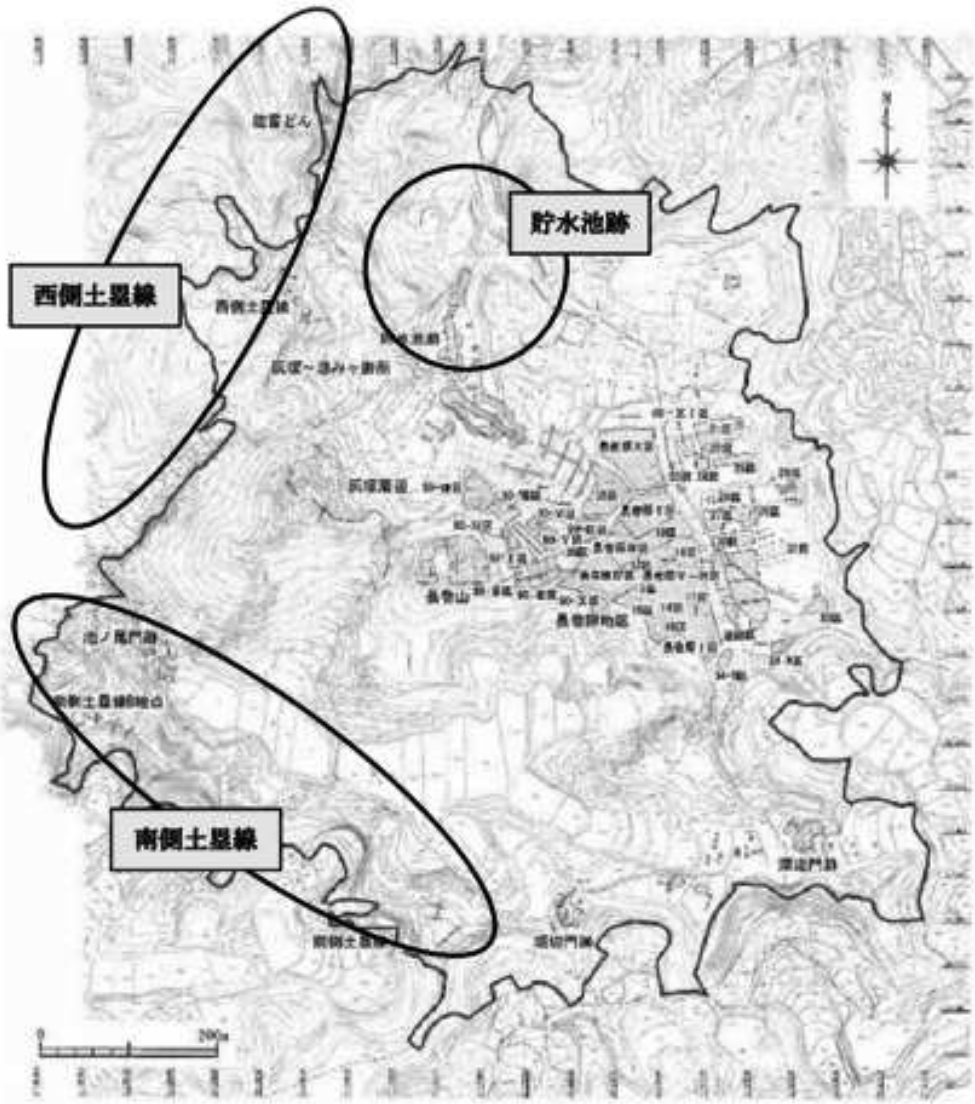

**南側土塁線トレンチ断面**

【参考文献】


- 『史跡鞠智城跡保存管理計画書』平成 27 年（2015 年）
- 『第３次鞠智城跡保存整備基本計画』平成 28 年（2016 年）
- 『鞠智城跡Ⅱ－鞠智城跡第８次～第 32 次調査報告－』平成 24 年（2012）
- 『鞠智城と古代社会』第１号（平成 24 年度・2013 年度）～第 10 号（令和３年度・2021 年度）
- 『築城技術と遺物から見た古代山城』－発表資料集－　古代山城に関する研究会　平成 28（2016）年　熊本県教育委員会
- 『鞠智城とその時代』－平成 14～21 年度「館長講座」の記録－　平成 23 年（2011 年）　熊本県立装飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温故創生館
- 『鞠智城とその時代２』－平成 14～21 年度「館長講座」の記録－　平成 26 年（2014



西側土塁線




鞠智城跡各地区　遺構配置

れている。また、南側では、心柱を中心に八角形状に配された柱が三重に巡り、こちらも掘建柱から礎石への建て替えが確認されている。八角形建物は８世紀前半、鞠智城第Ⅱ～Ⅲ期に位置づけられ官衙的役割を持つ建物群が立ち並ぶなど、当初の城と指揮機能から役所的機能へと変化する時期に当たっていたと考えられる。近年、多角形建物の検出は国内で官衙的性格を持つ遺跡等から数例の検出事例があるが、古代山城からの検出事例は鞠智城が初出である。

（５）出土遺物

① 瓦

鞠智城では、軒丸瓦、丸瓦、平瓦の３種類の瓦が、大小の破片を含めて合計約１万900点出土している。軒丸瓦には、「単弁八葉蓮華文」と呼ばれる蓮の花をかたどった文様が施され、これは朝鮮半島の瓦文様の影響を受けたものと見られる。

② 銅製菩薩立像

銅造菩薩立像は、貯水池跡の池尻部から出土した。柚（下部の突起部分）を含む高さ 12.7cm、幅3.0cmで、横から見ると体部がＳ字曲線を描いている。顔の表情は丸みを帯び穏やかで、三面の宝冠、肩まで垂らした垂髪、両肩にかけられた天衣などもよく表現されている。また、舎利容器と考えられる持物を、へその前で両 手で抱えるように持っている。

この仏像は、７世紀後半の百済仏の特徴を持つことから、朝鮮半島の百済でつくられ日本に持ち込まれた可能性が高いと考えられている。

**３　発掘調査から見えてきた鞠智城に遺る渡来系技術**

鞠智城に用いられている築城技術並びに出土遺物にはこれまでに多くの渡来系技術の存在が調査や研究から分かっている。特に鞠智城には国内の古代山城にはない八角形建物やこれも事例の少ない貯水池跡の存在などまだ、研究の余地を多く残す古代山城である。

最後に、本県では、現在、海外から世界的な半導体受託製造大手の菊陽町進出が決まった。これほどの企業がなぜ、進出先として熊本を選地したのか。今回の事例が、これまで鞠智城がなぜ現在の山鹿市・菊池市に跨る米原台地を築城先として選地したのかに大いに考えさせられるきっかけを与えてくれた。

現在、進出先周辺は熊本県知事の判断により北側に大分方面と九州縦貫道とを結ぶ高規格道路の交通インフラの整備、また、熊本県、周辺市町村が力を合わせ長年整備してきた工業団地及びそこに進出してきていた国内関連メーカーの存在など、他地域に比べ進出すべき条件が整っていたことが熊本の地が選地された理由であると考える

この在り方は、７世紀代に鞠智城が現在の山鹿市・菊池市に選地され、築城された経緯とも重複すると考える。車地など官道の整備、菊池川を中心とする河川交通の整備など大宰府との連携を目途としたインフラの整備が整っていたこと、これは今後の課題になるが、鞠智城が築城される７世紀代に周辺に鞠智城と連携を図る官衙的存在があったことが現在の鞠智城が選地された要因であると考える。

野城・基肄城と同様、城門は単独で存在するものではなく、土塁線上にあり土塁と連携することで城としての機能を有する存在として城門ある。深迫門では城門を挟み込むように谷地形の中まで土塁が迫っており、その延長として城門が造られている。

城跡を考える上で重要となる定義の一つに、岡田茂弘氏[2]が示された「城跡」と判断する基準を、「防御的構造物＝自由な出入を規制する施設の遺構の存在」とすると、城門と土塁の連続性に、強い防御的思想を見いだし、同じ構造を持つ大野城・基肄城と同様にこの当時の国内の築城思想から派生した施設ではなく、朝鮮式山城にルーツを持つ施設の在り方を見て取れる。

**（3） 土塁線**

鞠智城の土塁線として南側・西側土塁線が知られていること先述した。土塁と城門が組み合わさることにより、防御的構造物としての城となる。さらに、この両土塁には、古代山城で始めて取り入れられた築城手法である「版築」技術が用いられており、城壁と呼ぶに相応しい中国・朝鮮半島の築城技法が発掘調査で明らかにされている。

南側土塁線は、堀切門跡から西方向に延びる標高 120m～130mの丘陵頂部に位置し、総延長 500mの区間である。丘陵南斜面は、掘部との比高差が 20m～30mに及び、阿蘇溶結凝灰岩の切り立った崖を形成しており「屏風岩ライン」と呼ばれる地点も含んでいる。

また、西側土塁線上は、長者原地区の西端（標高 155m）から北方向に延び、標高 150m～170mの丘陵頂部に位置し、総延長約 500mの区間である。土塁線は馬の背状の尾根が、通称「灰塚」「涼みヶ御所」「佐官どん」といった頂を繋ぐように連続し南から北に徐々に標高を上げていく。発掘調査では「佐官どん」で版築土塁が確認されている。

**（4） 貯水池跡**

長者原地区の東側、米原集落の西に所在する谷部から、平成８（1996）年に調査に着手し、国内の古代山城では、岡山県の鬼城山（史跡鬼城山跡・岡山県総社市）と鞠智城でしか確認されていない、城内に所在する貯水池を確認している。調査の結果、鞠智城では総面積約 5,300 ㎡に及び、池跡からは後に触れるが多彩な遺物も出土している。

古代山城における貯水池は、全 榮基[3]氏により古代山城の類例から古代朝鮮の山城における「集水遺構」と同遺構であるとし、池跡からの出土遺物の特徴とも合わせて、そのルーツは古代朝鮮の築城技術の一つとして捉えられている。

また、貯水池跡の調査では、堤防状遺構の断面から「敷粗朶工法」とみられる低湿地における地盤を強化する技術も確認されている。この技術は鞠智城の先行し渡来系官人の指導により築城された記録の残る水城（特別史跡水城・太宰府市ほか）で、この技法が用いられ、軟弱地盤上に大堤が築かれている事例がある。

**（5） 建造物等**

鞠智城で確認されている長者原・上原地区からの検出数を合わせ、72 棟の建造物を確認しているが、うち２ヶ所で八角形建物跡を４棟確認している。北側の 30・31 号建物では、心柱を中心に八角形状に配された柱が二重に巡り、掘建柱から礎石への建て替えが確認さ

石道遺跡（菊池市）の調査がおこなわれるなど、鞠智城取り巻く遺跡が知られてきている。

このような現在知られている官衙的を持つ遺跡はすべて、凝灰岩台地の平坦地を選地するか、菊池川河岸段丘の平坦地を利用して立地している。これらは例外なく、他の役所や集落を見通す位置を選地しており、車地を通じ連携できる位置に選地している。

それに比べ鞠智城は現在知られている３つの城門はもとより、米原台地の建物群など、これら他からの視点を遮断するかの場所に建設され、かろうじて長者山、灰塚など「烽台」を置いたであろう場所だけが周辺を遠望できるが、外部からその位置を正確に求めることは難しい。

それではなぜ、重要な官衙や拠点集落がうてな台地や河岸段丘上に作られてきたにもかかわらず、鞠智城だけは外から見えない低山地内に選地されたのか。おそらく、この選地こそが、渡来系官人による選地思想の一つと考える。

濱田耕策氏は平成 21 年の鞠智城シンポジウム[1]で、「鞠智城を「くくち」と読む『日本書紀』の古訓を糸口に鞠智城の築城者層について考察されており、筑紫の二つの山城と連携するこの鞠智城の「鞠智」が築城に際してその土地の選定に始まる築城プランナーとして城名に名を遺すほどの貢献をなしたものかと考えらえる」とし、百済官人のそれも上位の官位を持ち、佐平や達率を帯びた亡命官人の関与を指摘されている。このことから、鞠智城の最もそして最大の渡来系技術は鞠智城の選地そのものと考えるとされ、渡来系（百済）官人の関与を示唆している。

**（２） 城門**

現在、鞠智城内で知られ超背により確定している城門は３ヶ所である。いずれも城域の南側土塁線上に、東から深迫門、堀切門、南側土塁線と西側土塁線の接点近くに池ノ尾門がある。これまでの発掘調査で城門の向きが確定もしくは想定される方向は、深迫門は東向き、堀切門は南向き、池ノ尾門は西向となる。このうち、深迫門と堀切門は包谷式を取る選地の条件から、周囲の平坦地もしくは車路へ抜けるルート上には深い谷を有する。唯一、西を向く池ノ尾門は菊鹿盆地を横切る車路や、河川交通として川湊が想定できる菊池川や木野川から谷を隔てることなく入ってこられる城門である。おそらくは城内に搬入される米をはじめとする物資の搬入口としての役割を担っていたと考えられる。のちに報告するが、貯水池跡から出土した鞠智城初の文字資料である木簡も荷札として付けられた状態でこの城門を経由し持ち込まれたものと考える。

また、この池ノ尾門は、現在の福岡県八女市から国道３号を経由する渓谷を辿ると最短距離で大宰府方面とを結ぶルートとなる。現在知られている車路・延喜式官道で想定されているルート上には乗らないが、大野城・基肄城の後方支援基地としての役割を考えるとこのルートの存在も生きてくるのではなかろうか。更に、鞠智城には城域の北側、現在の米原集落近くに北門の存在も指摘されている。これまでの調査では確認されていないが福岡県方面に向けての城門があってもおかしくはないと考える。

そこで城門がなぜ、渡来系の技術と考えるかだが、同じく朝鮮式山城として築城された大

# 鞠智城跡の渡来系技術

歴史公園鞠智城・温故創生館館長　長谷部　善一

## 1　はじめに

鞠智城跡の保護施策は、昭和 34 年（1959 年）の長者山礎石群、深迫門礎石の確認を受け「伝鞠智城跡」として県の史跡指定を皮切りに、昭和 40 年代の発掘調査成果を踏まえ、昭和 51 年（1976 年）に鞠智城の位置が確定するに至り、指定名称を「伝鞠智城跡」から「鞠智城跡」に変更した。平成 16 年（2004 年）には国により「我が国の歴史を語るうえで重要な遺跡」として、国指定の史跡に指定され、更なる高みによる保護が図られた。

本稿では、これらの保護の過程で明らかにされてきた古代山城としての鞠智城の価値を示す「渡来系技術」について、これまでの研究成果をもとに報告する。

## 2　鞠智城に遺る渡来系技術

鞠智城跡の発掘調査は昭和 42（1967）年度の第 1 次調査以降、令和 4（2022）年度までで 37 次を数え、城門跡、土塁線、管理・行政機能を司る建物群を擁する平地と建物群、そして国内の古代山城では初めての確認事例となる貯水池跡など多くの調査成果が得られてきた。

ここでは、これまでの発掘調査の結果や、鞠智城シンポジウム及び鞠智城跡「特別研究」で、朝鮮半島に由来する渡来系技術として指摘されてきた、各遺構について紹介し、この後の報告につなげたい。

### （1）　鞠智城の「選地」

鞠智城は、菊池川沿いの菊池平野と内田川沿いの菊鹿盆地の両方を望む位置に所在する。鞠智城が築城され役割を終える時期には、8 世紀～ 9 世紀代を中心に、鞠智城を望む地域に官衙的要素を有する遺跡が現在までに、4 ヶ所知られている。その他、全容は把握されていないが官衙的要素を有する可能性が高い遺跡として、掘立柱建物や火葬墓を確認している赤星福土遺跡（菊池市）、竪穴建物、掘立柱建物が確認され、越州窯系青磁が出土している赤星水溜遺跡（菊池市）がある。全面調査をおこなうとその数は増えてくると考えられる。

そのうち鞠智城に最も近い位置には、土塁が巡り多量の布目瓦が出土し「菊池郡家」と推定される西寺遺跡（菊池市）、うてな台地南側斜面上に塔心礎が残り、西に金堂、北に講堂を持ち法起寺式の伽藍が推定され、さらに鴻臚館式瓦を出土し「菊池郡寺」と推定される十十蓮寺遺跡（菊池市）、官衙的要素の一つとされる「コ」の字に並ぶ掘立柱建物群の存在が確認されている御宇田遺跡（山鹿市鹿本町）並びに同じく「コ」字に掘立柱建物群を持つ「上鶴頭遺跡」（菊池市七城町）などが知られてきた。

その後、平成に入り、うてな台地上の圃場整備事業で一部が調査され、うてな遺跡七枝地区から多数の竪穴建物と共に 20 棟を超える掘立柱建物が検出され、三彩壺や銅椀片並びに墨書土器が出土しており、官衙関連の集落が展開していたと想定されている。また、近年、鞠智城近くを通る官道の「車路」ルート近くで、9 世紀初頭の掘立柱建物群を検出した赤星

鞠智城シンポジウム

# 「渡来系技術から見た古代山城・鞠智城」

日時：令和４年（２０２２年）１０月２３日（日）１２：５０～１７：００

場所：くまもと県民交流館パレア１０階パレアホール

（熊本市中央区手取本町８番９号テトリアくまもとビル１０階）

主催：熊本県・熊本県教育委員会

共催：明治大学日本古代学研究所

後援：山鹿市教育委員会・菊池市教育委員会・熊本県文化財保護協会・菊池川流域古代文化研究会・肥後古代の森協議会

―日程―

１２：００ 開場

１２：３０ 開催前行事

１２：５０ 開会挨拶

主催者挨拶 熊本県副知事　木村　敬

明治大学日本古代学研究所所長　石川　日出志 氏

来賓紹介

１３：００～１３：２０

報告①「鞠智城の渡来系技術」長谷部　善一（歴史公園鞠智城・温故創生館館長）

１３：２０～１４：００

報告②「渡来系の土木技術とため池・山城」小山田　宏一 氏（大阪府立狭山池博物館館長）

１４：００～１４：４０

報告③「古代建築と渡来系技術」海野　聡 氏（東京大学大学院工学系研究科准教授）

（１４：４０～１４：５５　休憩）

１４：５５～１５：３５

報告④「渡来系技術の導入と古代山城」吉村　武彦 氏（明治大学名誉教授）

（１５：３５～１５：４０ 休憩）

１５：４０～１６：５０　　パネルディスカッション

コーディネーター　佐藤 信　氏（くまもと文学・歴史館館長、東京大学名誉教授）

コメンテーター　　亀田　修一 氏（岡山理科大学特任教授）

パネリスト　　小山田　宏一 氏（大阪府立狭山池博物館館長）

海野　聡 氏（東京大学大学院工学系研究科准教授）

吉村 武彦 氏（明治大学名誉教授）

長谷部　善一（歴史公園鞠智城・温故創生館館長）

１６：５０ 閉会（～１７：００）

令和4年度（2022年度） 鞠智城シンポジウム
令和4年（2022年）10月23日開催

# 資 料 編

鞠智城シンポジウム2022
成果報告書

鞠智城シンポジウム二〇二二成果報告書

# 渡来系技術から見た古代山城・鞠智城

発行年月日　令和五年（二〇二三年）●月●日
編集・発行　熊本県教育委員会
〒八六二―八六〇九
熊本市中央区水前寺六丁目一八番一号
電話　〇九六―三八三―一一一一（代表）
印刷　サンコー・コミュニケーションズ株式会社

歴史公園鞠智城・温故創生館は開館20周年を迎えました。
鞠智城シンポジウムの過去の発表要旨や成果報告は、
奈良文化財研究所が運営するホームページ
「全国遺跡報告総覧」から無料ダウンロードできます。
「全国遺跡報告総覧」はこちら
▼
https://sitereports.nabunken.go.jp/ja

発行者：熊本県教育委員会
所　属：装飾古墳館
発行年度：令和４年度

この電子書籍は、渡来系技術から見た古代山城・鞠智城 鞠智城シンポジウム成果報告書 2022 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、古代山城がある市町村教育委員会、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：渡来系技術から見た古代山城・鞠智城
鞠智城シンポジウム成果報告書 2022
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦 2023 年 3 月 23 日